岡山県埋蔵文化財発掘調査報告37

# 泉瓦窯跡・万富東大寺瓦窯跡

1980.3

岡山県教育委員会

文化課

# 序

東大寺は天平17年、聖武天皇の発願により、鎮護国家・民衆済度を祈念して、7年の歳月を要し、国家の総力を傾注して建立された一大伽藍であります。諸国に続々と建立されていく国分僧寺・国分尼寺の総本山として、国家宗教の頂点に位置し、本尊毘盧舎那仏は身丈15mという日本最大の金銅像であり、これを安置する大仏殿もまた世界最大の木造建築物でした。以来1200年、度重なる兵火により灰燼に帰することも二度に及びましたが、その都度、時の為政者や民衆によって再興され、その法燈は今も消えることがありません。

岡山県と東大寺の結びつきは少なくありませんが、とりわけ、鎌倉時代初期の再建に際して、備前国が造営料国とされたことにより、深い繋りを持つに至りました。国司として赴任した傑僧俊乗坊重源は国内において精力的な活動を展開し、その業績は800年後の今も各所に散見されます。なかでも、国指定史跡とされている瀬戸町万富東大寺瓦窯跡は著名です。先年、和気町安養寺から東大寺瓦の破片と窯壁片が発見され、東大寺瓦窯跡の存在が推定されることとなりました。事実とすればきわめて貴重な遺跡であり、岡山県教育委員会では緊急に調査を実施し、その真疑を確かめることとしました。そしてこれを機会に、従来明確でなかった万富東大寺瓦窯跡についても確認調査を実施し、今後の保存のための基礎資料を収集するとともに、備前国における東大寺瓦生産の実態把握に努めることを企図しました。

調査の結果、安養寺については東大寺瓦窯跡ではないことが判明しましたが、調査例のほとんどない鎌倉時代の瓦窯跡として、今後有効な資料となりえましょう。また、万富東大寺瓦窯跡については当初の予想を大きくうわまわる数の窯跡が検出され、規模の大きさに驚かされるとともに、従来の指定域の再検討という新たな課題が提起されることとなりました。これらの貴重な遺跡をどのようにして後世へ残していくのか。より一層努力いたす所存でありますが、広く皆様方のご理解とご支援を切望するしだいです。この小冊子が文化財の保護・保存に役立てられ、また学問研究に微力なりとも貢献できうれば幸いです。

なお、末筆ではありますが、調査にあたってご協力を得た地元各位、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター職員諸氏をはじめ、東大寺瓦窯跡調査委員会委員、ならびに地元教育委員会職員諸氏に対して、深甚の謝意を表します。

昭和55年3月

岡山県教育委員会

教育長　佐藤章一

# 例　　言

1．これは、岡山県教育委員会が昭和54年度国庫補助を受けて実施した和気町泉瓦窯跡・瀬戸町万富東大寺瓦窯跡についての発掘調査の概要報告書である。

2．調査にあたっては東大寺瓦窯跡調査委員会を組織し、その指導・助言のもとに、文化課職員岡本寛久が担当・実施した。

3．発掘調査中は、地権者安養寺住職内藤広隆氏、末藤八代子氏をはじめ地元の方々、とくに万富区町内会の有志の方々のお世話になった。厚く謝意を表します。種々奔走下さった万富区長森畑殖、和気町文化財保護委員長目賀正実の両氏に深謝します。

4．調査にあたっては各瓦窯跡とも地形に従って任意に方眼を設定した。南北方向の軸線の方位は泉瓦窯跡 MN-8°17′0″-E、万富瓦窯跡 MN-16°6′0″-W である。実測図中のポイント数値の単位はメートルである。磁気探査も同一方眼を使用しているが、ポイントの呼称が異なっているので注意されたい。

5．現地調査は昭和54年7月15日から同年9月26日まで実施した。それ以後、文化課分室（岡山市西古松）において報告書作成作業を実施した。

6．磁気探査は奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター職員西村康・岩本圭輔両氏によって実施された。第3章の磁気探査についての報文は両氏の手になるものである。

7．この報告書の作成は、文化課職員伊藤晃・岡本が担当し、執筆・編集は岡本が行った。

8．現地調査にあたっては、文化課職員浅倉秀昭・平井勝・福田正継・平井泰男の協力を得た。遺物の実測、拓本、遺構の浄写には福田・藤井守雄の文化課職員の他、山本悦世・北村智子・坪井和江の諸氏の援助を得た。

9．本書に掲載した資料の借用・公表については次の方々のご好意を受けた。深く謝意を表します。
黒住秀雄・岡田伊三六・平松宏一・川崎努・土井秋夫・瀬戸町教育委員会・和気郡北部教育委員会・邑久町教育委員会・熊山町立豊田小学校（敬称略）

なお、岡山県立博物館収蔵品の写真は同館学芸員臼井洋輔氏の撮影になるものである。

10．実測図中の高度値はすべて海抜高である。方位については、第1図・第2図・第8図・第15図が真北、他は磁北である。

11．挿図と図版の遺物番号は一致している。

12．出土した遺物および実測図・写真類はすべて文化課分室（岡山市西古松）に保管している。

13．本書第1図・第2図は建設省国土地理院発行の25,000分の1地形図（和気・万富・備前瀬戸）を1/2に縮尺したものである。

# 目　　次

序
例　言
目　次
第１章　地理的・歴史的環境…… 1
　第１節　泉瓦窯跡周辺の地理的・歴史的環境…… 1
　第２節　万富東大寺瓦窯跡周辺の地理的・歴史的環境…… 3
第２章　調査の経過…… 5
　第１節　調査の契機…… 5
　第２節　調査の実施…… 5
　調査日誌…… 7
第３章　磁気探査の結果…… 10
　第１節　磁気探査の概略…… 10
　第２節　泉瓦窯跡の探査…… 12
　第３節　万富瓦窯跡の探査…… 14
第４章　発掘調査の概要…… 16
　第１節　泉瓦窯跡の発掘…… 16
　第２節　万富東大寺瓦窯跡の発掘…… 23
　第３節　遺物…… 36
第５章　まとめ…… 54
　第１節　泉瓦窯跡について…… 54
　第２節　万富東大寺瓦窯跡について…… 55
　　付１．岡山市一宮字山神(吉備津宮常行堂)出土瓦…… 57
　　付２．邑久町大賀嶋寺・半田廃寺出土瓦…… 57

# 挿　図　目　次

第１図　泉瓦窯跡位置図…… 2
第２図　万富東大寺瓦窯跡位置図…… 4
第３図　磁気探査実施風景…… 10
第４図　泉瓦窯跡地区探査方眼…… 11
第５図　泉瓦窯跡地区磁気コンターマップ…… 12

第６図　万富瓦窯跡地区探査方眼…… 13
第７図　万富瓦窯跡地区磁気コンターマップ…… 14
第８図　泉瓦窯跡周辺地形図…… 16
第９図　磁気探査結果とトレンチの位置…… 17
第10図　泉瓦窯跡地形測量図…… 18
第11図　第１トレンチ実測図…… 19
第12図　１号窯実測図…… 21
第13図　２号窯実測図…… 22
第14図　第５トレンチ実測図…… 22
第15図　万富東大寺瓦窯跡周辺地形図…… 23
第16図　万富東大寺瓦窯跡地形測量図…… 24
第17図　磁気探査結果とトレンチの位置…… 25
第18図　第３トレンチ実測図…… 26
第19図　２号窯実測図…… 26
第20図　３号窯実測図…… 27
第21図　第２トレンチ実測図…… 28
第22図　10号窯実測図…… 28
第23図　第１トレンチ実測図…… 29
第24図　11号窯実測図…… 30
第25図　12号窯実測図…… 31
第26図　13号窯実測図…… 32
第27図　第５トレンチ実測図…… 33
第28図　万富東大寺瓦窯跡遺構位置図…… 35
第29図　泉瓦窯跡出土軒瓦…… 37
第30図　泉瓦窯跡１号窯出土平瓦と「東大寺瓦」…… 38
第31図　万富東大寺瓦窯跡出土平瓦叩目文様分類図…… 40
第32図　万富東大寺瓦窯跡出土平瓦…… 42
第33図　万富東大寺瓦窯跡出土瓦及び窯体使用平瓦拓影…… 43
第34図　万富東大寺瓦窯跡出土土器…… 44
第35図　「東大寺」刻印集成図…… 47
第36図　「東大寺大佛殿」銘軒丸瓦…… 49
第37図　「東大寺大佛殿」銘軒丸瓦…… 50
第38図　「東大寺大佛殿」銘軒瓦…… 51
第39図　「東大寺」刻印平瓦…… 52
第40図　岡山市一宮字山神(吉備津宮常行堂)出土軒瓦…… 58

第41図　岡山市一宮字山神(吉備津宮常行堂)出土平瓦…… 59
第42図　岡山市一宮字山神(上)・邑久町大賀嶋寺(下左)・
邑久町半田廃寺(下右)出土瓦…… 60

## 表　目　次

第1表　泉瓦窯跡地区の磁気の強さ…… 12
第2表　万富瓦窯跡地区の磁気の強さ…… 15
第3表　万富東大寺瓦窯跡遺構別出土平瓦叩目文様分類表…… 45
第4表　「東大寺大佛殿」銘軒丸瓦計測値一覧表…… 53

## 図　版　目　次

図版1　泉瓦窯跡　1．調査前近景　2．調査前全景
図版2　泉瓦窯跡　1．第1トレンチ全景　2．第1トレンチ西壁(部分)
図版3　泉瓦窯跡　1．1号窯検出状況　2．1号窯分焔牀
図版4　泉瓦窯跡　1．2号窯検出状況　2．2号窯分焔柱
図版5　泉瓦窯跡　1．第5トレンチ全景　2．第1トレンチ石敷遺構
図版6　万富東大寺瓦窯跡　1．万富東大寺瓦窯跡遠景　2．調査前近景
図版7　万富東大寺瓦窯跡　1．第2トレンチ全景　2．第3トレンチ全景
図版8　万富東大寺瓦窯跡　1．2号窯検出状況　2．同上
図版9　万富東大寺瓦窯跡　1．3号窯検出状況　2．同上
図版10　万富東大寺瓦窯跡　1．3号窯検出状況　2．3号窯細部
図版11　万富東大寺瓦窯跡　1．3号窯南分焔牀　2．2号窯南分焔牀
図版12　万富東大寺瓦窯跡　1．10号窯検出状況　2．10号窯瓦残存状況
図版13　万富東大寺瓦窯跡　1．10号窯隔壁検出状況　2．9号窯検出状況
図版14　万富東大寺瓦窯跡　1．11号窯検出状況　2．11号窯焼成室南東隅
3．11号窯南壁
図版15　万富東大寺瓦窯跡　1．11号窯奥壁　2．11号窯南半窯体内部
図版16　万富東大寺瓦窯跡　1．11号窯分焔牀細部　2．11号窯南壁細部
図版17　万富東大寺瓦窯跡　1．12号窯検出状況　2．同上
図版18　万富東大寺瓦窯跡　1．13号窯検出状況　2．13号窯瓦出土状況
図版19　万富東大寺瓦窯跡　1．13号窯分焔牀検出状況　2．13号窯分焔牀

図版20　万富東大寺瓦窯跡　1．第5トレンチ竪穴遺構
2．第1トレンチ全景
図版21　万富東大寺瓦窯跡　上・中：竪穴遺構(部分)
下：第5トレンチ北端灰原断面
図版22　泉瓦窯跡　泉瓦窯跡出土軒瓦
図版23　泉瓦窯跡　泉瓦窯跡出土平瓦
図版24　万富東大寺瓦窯跡　「東大寺大佛殿」銘軒丸瓦
図版25　万富東大寺瓦窯跡　「東大寺大佛殿」銘軒瓦
図版26　万富東大寺瓦窯跡　万富東大寺瓦窯跡出土瓦及び「東大寺」銘瓦
図版27　岡山市一宮字山神出土瓦(吉備津宮常行堂)
図版28　岡山市一宮字山神出土瓦(吉備津宮常行堂)

# 第１章　地理的・歴史的環境

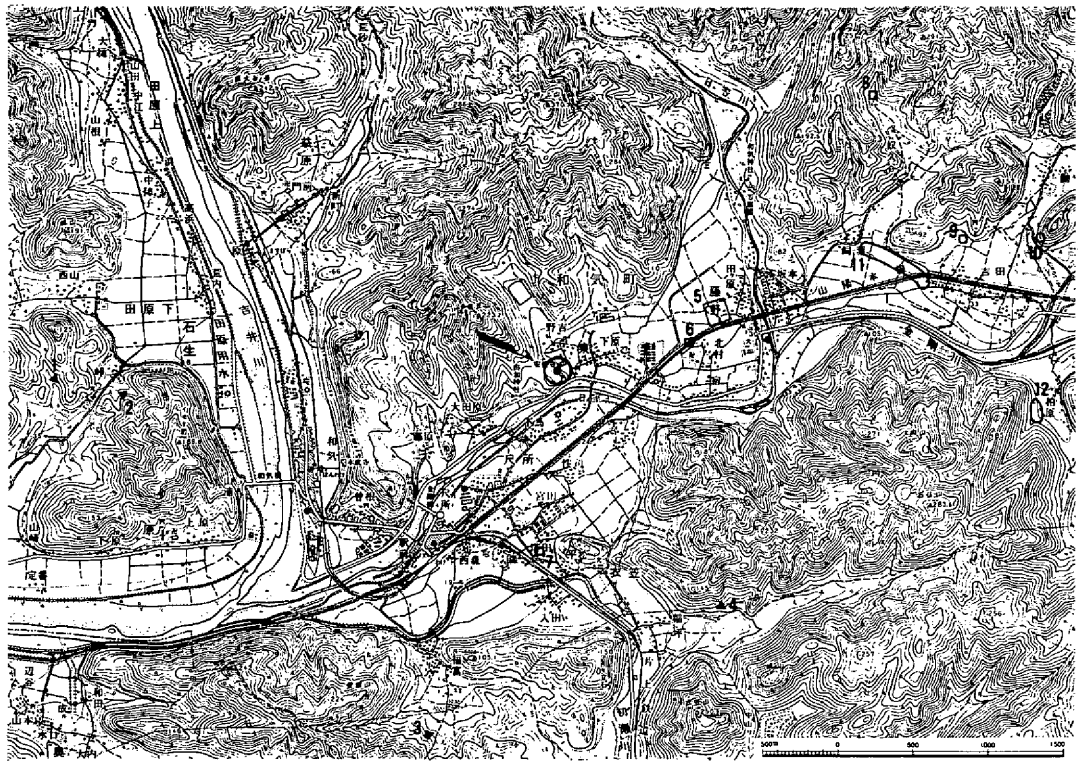
## 第１節　泉瓦窯跡周辺の地理的・歴史的環境

泉瓦窯跡は和気郡和気町泉に所在する。和気町は岡山県の南東部に位置し、吉井川とその一支流金剛川の合流点付近を西端とし、金剛川沿いに開けた町である。合流点は吉井川河口から約26km上流にあり、赤磐郡吉井町・和気郡佐伯町から南下してきた吉井川が熊山山塊に突き当って大きく西へ流路を屈曲させる部分にあたる。この附近での川幅は堤防間で250m を超える。金剛川は、備前市と兵庫県赤穂市の境の帆坂峠付近を水源とし、西流しつつ、途中で南下する八塔寺川・日笠川を合わせ吉井川に注ぐ。その流路は全長約18kmを測る。金剛川の北は岡山県中央部を東西に横断する吉備高原で、標高400～500m の丘陵地帯となっている。南は標高250～400m の低丘陵地帯であり。これを越えれば瀬戸内海である。この南の低丘陵地帯と熊山山塊との境に深い谷があって初瀬川が北流し、やはり吉井川と金剛川との合流点へ注ぐ。

金剛川流域には３ケ所の谷底平野が形成されている。一つは吉永町中心部であり、八塔寺川と金剛川の合流点にあたる。二つめは日笠川と金剛川の合流点であり、金剛川の北岸になる。三つめは和気町中心部で、金剛川の南岸である。二つめと三つめは金剛川によって半割された一つの平野部とみることもできるが、金剛川の川幅はこの附近で100m あり、一つの自然境界線とみることができる。一つめと二つめの平野部の境には狭隘部があるが、両者の通交はそれほど困難とはみえない。したがってこの３ケ所の平野を連続するものとみて、自然地形によって区画された一つの日常活動範囲と捉えることができる。他の平野部との交通であるが、まず吉井川を上下すれば、上流では津山市へ、下流では熊山町・瀬戸町さらに旧上道町（現岡山市）・長船町・邑久町の大平野部に至る。金剛川を溯れば備前市三石で二方向へ別れ、北方は船坂峠を越えて兵庫県赤穂郡上郡町へ継がり、南方は前述の帆坂峠を越えて赤穂湾に出る。前者の通路は現在国鉄山陽本線の道筋であり、古代の山陽道である。初瀬川の谷筋を南下していけば約８kmで片上湾へ至る。現在片上鉄道が走る。また、吉永町中心部から南へ閑谷学校を通って谷筋を溯れば、伊里川沿いに備前市伊里へ出、やはり片上湾へ至る。

和気郡は721（養老５）年、赤坂・邑久２郡から一部の郷を割いて立てられた藤原郡に始まる。726（神亀３）年藤野郡と改称され、766（天平神護２）年赤坂・邑久・上道・勝田の４郡から６郷１村を加えて拡大され、769（神護景雲３）年和気郡と改称された。788（延暦７）年吉井川以西の地を割いて磐梨郡が立てられた。これ以後郡域は安定し、現在に至る。『和名抄』には新田（にみた）・益原（ますはら）・藤野（ふうの）・坂長（さかなか）・香止（かと）の５郷が記されている。中世には郡内に新田庄・香登庄・日笠庄・藤野保・吉永保・三石保などの庄園や保のあったことが知られている。郡衙は藤野郷（現和気町藤野）に置かれていた。現在、和気政庁跡（第１図５）と呼ばれる地点と推定されている。

現在この地域で周知されている遺跡は、和気町・吉永町を合わせても100 に満たない。第１図では寺院跡・窯跡と奈良から中世にかけての遺跡を示した。この地域における遺跡の年代は弥生時代まで



1. 窯　跡
2. 田原下峠瓦窯跡(平安)
3. 福富窯跡
4. 稲坪窯跡(平安)
5. 和気政庁跡
6. 藤野廃寺(奈良)
7. 和気廃寺（奈良）
8. 慈光寺跡
9. 蓮久坊跡
10. 飯の山古墓群(奈良)
11. 桝池遺跡(中世)
12. 柏原遺跡(奈良～鎌倉)

第１図 泉瓦窯跡位置図(矢印)　(S＝1/50000)

溯る。弥生時代の遺跡はきわめて少なく、いずれもその実態については明確でない。弥生時代で重要なものに伝銅鐸出土地がある。吉井川と金剛川の合流点より１kmほど北方の吉井川左岸の丘陵裾である。その型式は突線鈕式袈裟襷文である。古墳時代に入ってかなりの数の古墳が築造されるが、そのほとんどが６世紀以降のものと考えられる。古墳群がいくつか形成されるが、数基の群集にすぎず、平野部全域でとくに集中する地域を摘出できない。

奈良時代に入ると和気町藤野に郡衙が置かれ、藤野と和気町尺所が和気郡の中心地とされる。藤野には藤野廃寺（第１図６）、尺所には和気廃寺（第１図７）が創建される。条里制も遺存していて、日室では長地型千鳥式とみられる遺構がよく残っている。古代の山陽道は金剛川沿いに走り、「和気の渡し」で吉井川を越え、熊山町可真から山陽町へ続く。吉井川は一大水運路であり、美作方面からの物資が和気まで船で下ろされ，ここから陸路で片上港（方上津）へ運ばれ、そして都へ積出された。このように和気町は古代には交通ならびに物資流通の拠点として栄えた。山陽道は鎌倉時代に入って備前市三石から片上・伊部・香登へと通路を変えたが、吉井川の水運は近代まで続いた。

窯跡は第１図にみられるように数基が散在しているにすぎない。このうち年代のわかるものは田原下峠瓦窯跡（第１図２）と稲坪窯跡（第１図４）の２基で、前者は平安時代前半の瓦窯跡、後者は平

安時代の須恵器窯跡である。なお図示できなかったが和気町吉田飼葉に瓦窯跡があり、奈良後期から平安初期頃とみられる瓦を焼いている（註１）。熊山町円光寺跡からこれと同じ瓦が出土していて（註２）注意される。

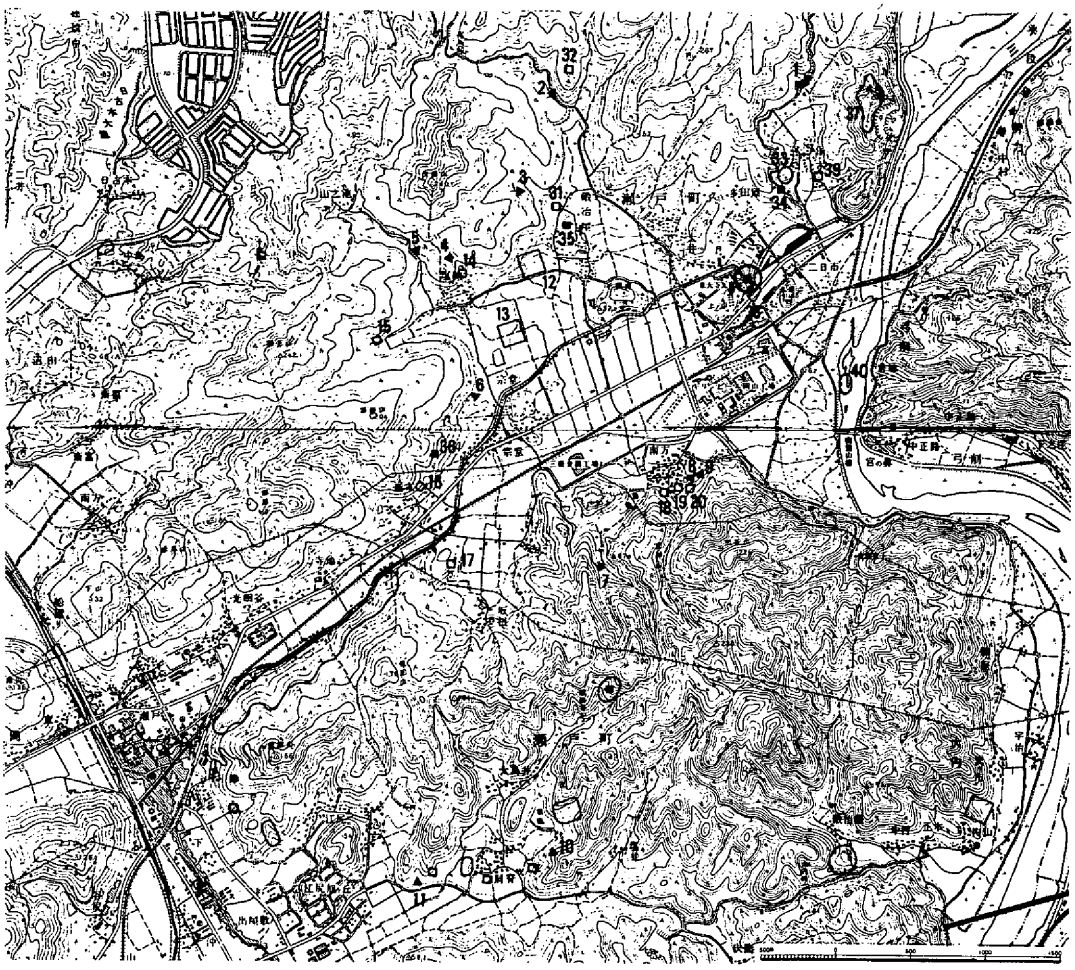
最後に泉瓦窯跡の所在する安養寺の略史を述べておく。寺伝によれば奈良時代報恩大師が建てた備前48ケ寺の一つとされ、康保年間（946～968）に焼失後、信源上人によって再建され、盛時には山内50坊を数えたという。永正年間（1504～1521）兵火で焼失した際もとの常行堂を移築して本堂にしたといわれる（註３）。安養寺に蔵されている木造阿弥陀如来坐像は13世紀初期の優品であり、また安養寺文書として知られる中世文書は13世紀以降のもの80点に及び、貴重な史料である。いずれにしても、安養寺が中世東備における一大寺院としてその勢を誇っていたことは確かである。

## 第２節　万富東大寺瓦窯跡周辺の地理的・歴史的環境

万富東大寺瓦窯跡は赤磐郡瀬戸町万富にある。吉井川は金剛川の合流点から西へ屈曲して熊山山塊に沿って弧状に流下するが、そのもっとも西へ張出した部分に万富地区の平野部がある。平野は東西・南北共に1.5kmの広さがあり、東を吉井川、南北を標高200～300mの丘陵で画され、小盆地状を呈する。西は浅い断層線谷により瀬戸町中心部の砂川流域の平野部と連絡している。谷の幅は約100m を測る。やはり自然地形によってしっかりと区画された、かなり小さな日常活動範囲である。前述の吉井川・金剛川の合流点からは７km程下流になり、吉井川河口からは約19km上流にあたる。この平野部と他地域との連絡は吉井川を除けばほぼ西端の谷に限られるようであるが、北行すれば、標高110m程度の尾坂峠を越え、熊山町可真上の旧山陽道へ出る。西の瀬戸町中心部からは砂川を溯れば山陽町の盆地、下れば旧上道町の平野部に至る。

万富地区は現在赤磐郡瀬戸町に属するが、古代においては磐梨郡礒名（いさな）郷と呼ばれたようである。磐梨郡は788（延暦７）年に和気郡のうち吉井川以西の郷を割いて立てられたものであり、和気（わけ）・石生（いわなす）・珂磨（かま）・肩背（かたせ）・礒名（いさな）・物理（もとろい）の６郷からなっていた。ところが礒名郷はそれ以前の766（天平神護２）年に和気郡の前身である藤野郡へ上道郡から編入されたものであり、もともとは上道郡に属するものであった。中世にはこの地区に吉岡庄が立てられた。吉岡庄は15世紀には東大寺三昧院領であったことが知られている。

万富地区は主要交通路から隔離されているわりには遺跡が多い。とくに奈良時代以降の遺跡がかなり周知されている。また種類別にみた場合寺院と窯跡が目につく。縄文時代の遺跡は知られていないが、弥生時代には南方片山と大井向山に台状墓が知られ、千種山にも土器の散布がみられる。古墳は40基程度が知られているが、平野部の南辺には群集がみられるのに対し、北辺では散在する傾向がある。第２図には奈良時代以後の遺跡と窯跡を示している。奈良時代には３ケ所の寺院跡が知られている。この狭い地域に３寺というのはいささか奇異であり、注目される。窯跡は平野縁辺の丘陵部で１ケ所に集中することなく均等に分布している。鎌倉時代のものが多いことは万富東大寺瓦窯跡との関連で注意される。東大寺瓦窯跡の存在から重源に関係する遺跡がいくつか知られている。第２図39は施湯をした風呂屋の跡といわれ、38は東大寺瓦積出しの船着場とされ、40からは砂利採集中に多数の



1. 松尾古窯跡群(鎌倉)
2. 辛音口窯跡
3. 大谷窯跡(鎌倉)
4. 窯跡
5. 勘定口窯跡(鎌倉)
6. 窯跡
7. 二の倉窯跡
8. 寺山窯跡(鎌倉)
9. 寺山窯跡(鎌倉)
10. ゴッテン窯跡(鎌倉)
11. 徳王寺窯跡
12. 吉岡廃寺跡(奈良)
13. 塩納大日遺跡(平安～室町)
14. 寺跡
15. 梅手折山法蓮廃寺跡(室町～江戸)
16. 妙興廃寺跡(奈良～平安)
17. 夏井遺跡(平安～　)
18. 妙見下廃寺跡
19. 五反田廃寺跡(奈良・平安)
20. 高徳山妙源寺跡(室町)
31. 王了寺館跡(鎌倉)
32. 天王山遺跡
33. 西ケ坪遺跡
34. 西ケ坪経塚
35. 鍛冶屋上の山経塚(平安)
36. 火消経塚
37. 保木城跡(中世)
38. 梅遺跡(鎌倉)
39. 保木風呂屋遺跡(鎌倉)
40. 東大寺瓦散布地(鎌倉)

第2図　万富東大寺瓦窯跡位置図(矢印)　(S＝1/50000)

「東大寺瓦」が採集され、船積みの際の転落品ではないかと考えられている。

註1　仙田実『和気町の文化財』　和気町中央公民館　1980年

2　玉井伊三郎・藤沢一夫『吉備古瓦図譜』　第2輯　1941年

3　神野力「あんようじ（わけ）」『岡山県大百科辞典』上　山陽新聞社　1980年

# 第２章　調査の経過

## 第１節　調査の契機

万富東大寺瓦窯跡は鎌倉時代初期の東大寺再建用の瓦を焼いた窯である。ここで焼かれた瓦（いわゆる「東大寺瓦」）の特徴は、平瓦で言えば、その大きさ（幅35cm・長42cm・厚2.5cm）と凸面の幾可学的な叩目文様，それに「東大寺」と陽刻された長方形の刻印をもつことである。昭和53年５月、和気町泉にある古刹安養寺の裏山から「東大寺瓦」が出土したという連絡が県教育委員会にあった。それはかすかに「東」と判読できそうな刻印の一部をもった一片の平瓦片であった。焼成がよくないためか全体に磨滅が著しかったが、凸面の格子文らしい叩目もうっすら看取できた。話によれば、現地は南北に伸びた舌状の丘陵の東斜面にあたっているが、この丘陵頂に公園があり、地元のライオンズクラブがこれの整備の一環として昭和52年にブルドーザーを導入して道路を新設した。この新設道路の側に瓦が散乱していたのを中学生が採集し、連絡をうけた地元研究者安東利夫氏がその中から「東大寺瓦」を見つけたという。安東氏は和気町文化財保護委員長の目賀正実氏にこのことを伝え、両氏で再度現地に出向き、多数の瓦・土器片を採集した。

連絡をうけた県教育委員会では文化課専門職員葛原克人・柳瀬昭彦の両名を派遣し、現地踏査を実施した。踏査の結果、丘陵裾に２ないし３条の溝状の落込みのあることを確認し、また採集品の中に焼石・スサ入りの窯壁片があったことから、現地に窯跡が所在するのではないかと推定した。東大寺鎌倉再建時の瓦窯は全国で愛知県伊良湖岬と岡山県万富の２ヶ所しか知られていない。いずれも国史跡として指定されている。和気町泉に予想される窯跡を「東大寺瓦」らしい一片の瓦片で東大寺瓦窯と断定することはあまりに軽率すぎるが、万富東大寺瓦窯跡と近接して同一水系内にあり、また採集品の年代が鎌倉時代と考えられることから、その可能性は追求されるべきかと思われた。万一、東大寺瓦窯であればきわめて貴重な遺跡であり、万富窯だけで考えられていた、備前における東大寺瓦生産のあり方を根本的に再考する必要が生じる。このため県教育委員会では緊急に確認調査を実施し、泉に予想される窯が東大寺瓦窯であるかないかを究明することとした。

ところが一方、万富東大寺瓦窯跡については、それが東大寺鎌倉再建時の瓦を焼いた窯であることは判明していて国史跡の指定を受けているが、今後の保護保存を考える上での基礎的な資料となる窯の基数・位置・規模・形態についてはほとんど不明のままであった。したがって、今回和気町泉での調査を実施するのを機会に、万富東大寺瓦窯跡についても確認調査を実施してそのような基礎的資料を収集し、今後の保存に資することとした。またできうればこの両調査を併せて、備前国における東大寺瓦生産の実態把握に少しでも近づくことを意図した。

## 第２節　調査の実施

今回の調査はその対象となる遺構が窯跡であるため、かつて牛窓町寒風古窯址群の調査で実施した

と同様、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターの協力で磁気探査を実施して事前に窯跡の位置を推定し、それに基づいて発掘することとした。

和気町泉瓦窯跡の磁気探査の結果は第３章で詳述するが、窯の存在についてはかなり否定的なものであった。磁気異常を示す地点は６ヶ所あったが、このうち４ヶ所は丘陵頂上へ至る山道の縁辺にあり、多くは異常の幅があまりにも激しすぎるため、山道の階段に使用された枕木に付いていた鉄線あるいは鉄釘の影響によるものと考えられた。また、他の２地点についても異常のあり方が窯跡のそれとは異なっていた。現地踏査の際に問題となった溝状の落込みについてはまったく反応がなく、これは後に旧の山道であることがわかった。発掘調査は道側の２地点と他の２地点の異常の原因究明を目的とし、幅２ｍのトレンチを４本、延べ48ｍにわたって設定し、掘削に入った。発掘の結果、道側の２地点のうちもっとも異常の幅の小さかった地点で窯跡を検出した。他の３地点のうち２地点については予想どおり鉄クズが出土した。窯跡は近接して２基あったが、その主軸の方向から考えて同時に操業されたものではなく、時間的に継続するものと考えられた。窯跡が検出されたことから、その規模等を確認するため、さらに窯の奥部と灰原推定部分にトレンチを設けて発掘したが、窯の奥部は削平のため消滅し、その規模は確認されなかった。また灰原も発掘地区では検出されなかった。そして、窯体内はもちろん、周辺の包含層からも「東大寺瓦」は一片も採集されず、窯体内出土瓦から判断して、泉瓦窯跡は東大寺瓦窯跡ではないことが確認された。

瀬戸町万富東大寺瓦窯跡での磁気探査では、上下２段になっている畑のうち、上段の西端に南北１列に連続して10基の窯跡の反応を捉えることができ、さらにその北に連続して３ヶ所の異常地点を確認した。発掘調査は、10基のうち４基の窯の残存状態を確認することと、北の３ヶ所の異常の原因をつきとめることを目的に幅２ｍのトレンチを設定し、また下段の畑にも灰原を発掘するためのトレンチを設けた。トレンチは５本、延べ77ｍである。発掘の結果、３ヶ所の異常地点は窯跡であることが確認され、窯跡の総数は南北65ｍの間に13基となった。また下段のトレンチからは竪穴遺構が検出され、遺構内に粘土・焼土・窯壁片・瓦等が充塡され、工房址の可能性が考えられた。窯の遺存状況は当初想定していたよりは良好であり、北へいくほど残存度が高く、完存の可能性を考えさせるものもあった。

調査終了後は両遺跡とも埋戻しを行い、旧状に復した。

発掘調査にあたっては、東大寺瓦窯跡調査委員会委員をはじめ、和気郡北部教育委員会・瀬戸町教育委員会職員一同ならびに地元各位から多大の御協力を得た。厚く感謝します。とりわけ、炎天下のもと発掘作業に従事していただいた作業員の方々の御労苦に対して深甚の謝意を表するしだいです。

**発掘作業員氏名**

**〈泉瓦窯跡〉**

小野田岸夫、小野田吉子、藤原清人、藤原都年子、目賀寿美夫、横山鶴江

**〈万富東大寺瓦窯跡〉**

岡田伊三六、苔口静恵、国定重子、末藤八代子、杉本昭文、楢原　保、前座恭子、光山繁雄、弓本

道子、赤井輝清、伊賀正典、市川忠士、大塚　尚、岡本健太郎、岸本自由、楠見時次、高橋生人、寺見忠夫、土井堅郎、中田哲雄、額田信行、森畑　殖、山下　潔

**和気郡北部教育委員会**

**教 育 長**　竹内亥三美　**社会教育課長**　仙田　実

**瀬戸町教育委員会**

**教 育 長**　溝辺　昭　　**課長**　川崎　猛　　**係長**　寺見武敏

**東大寺瓦窯跡調査委員会**

| | | |
|---|---|---|
| **委 員 長** | 宮地暢夫 | 岡山県教育委員会教育次長 |
| **副委員長** | 溝辺　昭 | 瀬戸町教育委員会教育長 |
| **副委員長** | 竹内亥三美 | 和気郡北部教育委員会教育長 |
| **委　　員** | 田中　琢 | 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部長 |
| **委　　員** | 水内昌康 | 岡山県文化財保護審議会委員 |
| **委　　員** | 鎌木義昌 | 岡山県文化財保護審議会委員 |
| **委　　員** | 近藤義郎 | 岡山県文化財保護審議会委員 |
| **委　　員** | 角田　茂 | 岡輝中学校教諭 |
| **委　　員** | 西川　宏 | 山陽女子高校教諭 |
| **委　　員** | 間壁忠彦 | 倉敷考古館館長 |
| **委　　員** | 近藤信司 | 岡山県教育庁文化課長 |
| **委　　員** | 川崎　猛 | 瀬戸町教育委員会課長 |
| **委　　員** | 仙田　実 | 和気郡北部教育委員会社会教育課長 |
| **委　　員** | 土井秋夫 | 瀬戸町文化財保護委員会委員長 |
| **委　　員** | 目賀正実 | 和気町文化財保護委員会委員長 |
| **委　　員** | 内藤広隆 | 照光寺山安養寺住職 |
| **事務局長** | 近藤信司 | 岡山県教育庁文化課長 |
| **事務局次長** | 吉光一修 | 岡山県教育庁文化課課長補佐 |
| **事務局員** | 西田聰一 | 岡山県教育庁文化課主幹 |
| **事務局員** | 光吉勝彦 | 岡山県教育庁文化課文化財主幹 |
| **事務局員** | 河本　清 | 岡山県教育庁文化課文化財二係長 |
| **事務局員** | 林　正人 | 岡山県教育庁文化課文化財二係主任 |

**調査日誌**

**〈泉瓦窯跡〉**

昭和54年7月16日　草苅。

17日　草苅。

19日　東大寺瓦窯跡調査委員会開催。

21日　杭打。方眼設定。

23日　杭打。方眼設定。

24日　磁気探査実施。

8月10日　東大寺瓦窯跡調査委員会第2回開催。

8月17日　発掘調査開始。第1トレンチ、第2トレンチ設定。表土剝ぎ。

8月18日　第3トレンチ設定、表土剝ぎ。第1トレンチ溝状遺構掘上げ、窯でないことが判明。第1トレンチ南端で焼土検出。瓦を積重ねたもの2列検出。窯の可能性強し。第3トレンチ遺構なし。

8月20日　第1トレンチ南端は窯であることを確認。窯壁部分はほとんど残存していない。窯の方向と斜行する形で石敷検出。第4トレンチ新設、鉄製ジョレン出土、これが反応したものと判断される。第4トレンチ遺構なし。第2トレンチ南端掘下げ、表土層より瓦多量に出土。第3トレンチ清掃、遺構なし。

8月21日　第1トレンチ窯より北の落込み掘下げ。第5トレンチ新設、掘下げ。第2トレンチ掘下げ。

8月22日　第1トレンチ南端を道路下まで延長して掘下げる。第5トレンチ焼土面検出。第2トレンチ掘下げて清掃。

8月23日　第1トレンチ南端さらに南へ延長。第5トレンチ焼土下はすぐ地山となる。窯そのものは消滅している。第6トレンチ灰原検出を目的として発掘開始。第2トレンチ掘下げ、清掃。

8月24日　第1トレンチ延長部分掘下げ。2基の窯が近接して存在することを確認。第5トレンチ清掃、写真撮影。第6トレンチ地山に達す。灰原層検出されず。第2トレンチ、第3トレンチ交点付近の大きな落込を掘下げる。

8月25日　第1トレンチ清掃、写真撮影。第2トレンチ、第3トレンチ交点の大形落込掘上げ。遺構かどうか不明。第2・3・4トレンチ埋戻し。第6トレンチ掘上げ、灰原確認されず、写真撮影、実測。

8月26日　第1・5トレンチ実測。

9月25日　第1・5トレンチ埋戻し。

9月26日　第1トレンチ埋戻し。

**〈万富東大寺瓦窯跡〉**

昭和54年7月15日　草苅。

7月19日　東大寺瓦窯跡調査委員会開催。

7月20日　杭打。方眼設定。

7月25日　磁気探査実施。

7月26日　磁気探査実施。

8月10日　東大寺瓦窯跡調査委員会第2回開催。

8月28日　草苅。第1トレンチ耕土除去。

8月29日　草苅。第1トレンチ耕土除去。第2トレンチ耕土・黄褐色土掘下げ。

8月30日　第1トレンチ施肥用周溝掘上げ。窯跡2基検出。第2トレンチ掘下げ、窯壁検出。第3トレンチ掘下げ。窯壁・分焔牀を検出。2号窯内には後世の落込あり、瓦の大形破片大量に出土。

8月31日　第1トレンチ1段掘下げ。窯らしきもの3基検出。第2トレンチ窯体検出作業。第3トレンチ2号窯攪乱溝掘下げ。3号窯清掃。

9月1日　第1トレンチ窯体検出作業。第2トレンチ10号窯内1段掘下げ。第3トレンチ2号窯・3号窯清掃。第4トレンチ表土剝ぎ。

9月5日　第1トレンチ窯体検出作業、北半1段下げ。第3トレンチ窯体清掃。第4トレンチ掘下げ。

9月6日　第1トレンチ窯体検出作業。第3トレンチ清掃。第4トレンチ掘下げ。第5トレンチ表土剝ぎ。午後東大寺瓦窯跡発掘調査委員会開催。

9月7日　第1トレンチ遺構検出作業。第3トレンチ2号窯・3号窯清掃、写真撮影。第5トレンチ掘下げ。

9月10日　第1トレンチ清掃。第2トレンチ清掃。第5トレンチ掘下げ。

9月11日　第1トレンチ清掃。第2トレンチ写真撮影。第3トレンチ写真撮影。第5トレンチ掘下げ、清掃、灰原確認。

9月12日　第1トレンチ写真撮影。第5トレンチ北端灰原掘下げ。

9月13日　第1トレンチ東壁写真撮影、11号窯内断割掘穿。第5トレンチ北端灰原掘下げ、南端1段掘下げ。

9月17日　第1トレンチ11号窯写真撮影、13号窯内部分的掘穿。第4トレンチ黒色土除去、南壁清掃。第5トレンチ清掃、竪穴遺構検出。

9月18日　第1トレンチ実測。

9月19日　第1トレンチ・第2トレンチ実測。

9月20日　第1トレンチ・第2トレンチ実測、埋戻し。第4トレンチ・第5トレンチ壁面清掃。

9月21日　第1トレンチ埋戻し。13号窯内部分的掘穿。第2トレンチ埋戻し。第4トレンチ実測、写真撮影。第5トレンチ実測、写真撮影。

9月22日　第1トレンチ埋戻し、13号窯内部分的掘穿。第3トレンチ実測、第4トレンチ埋戻し。第5トレンチ実測、埋戻し。

9月24日　第1トレンチ13号窯実測。第3トレンチ埋戻し。

10月　第1トレンチ・第3トレンチ・第5トレンチ埋戻し。

# 第３章　磁気探査の結果

## 第１節　磁気探査の概略

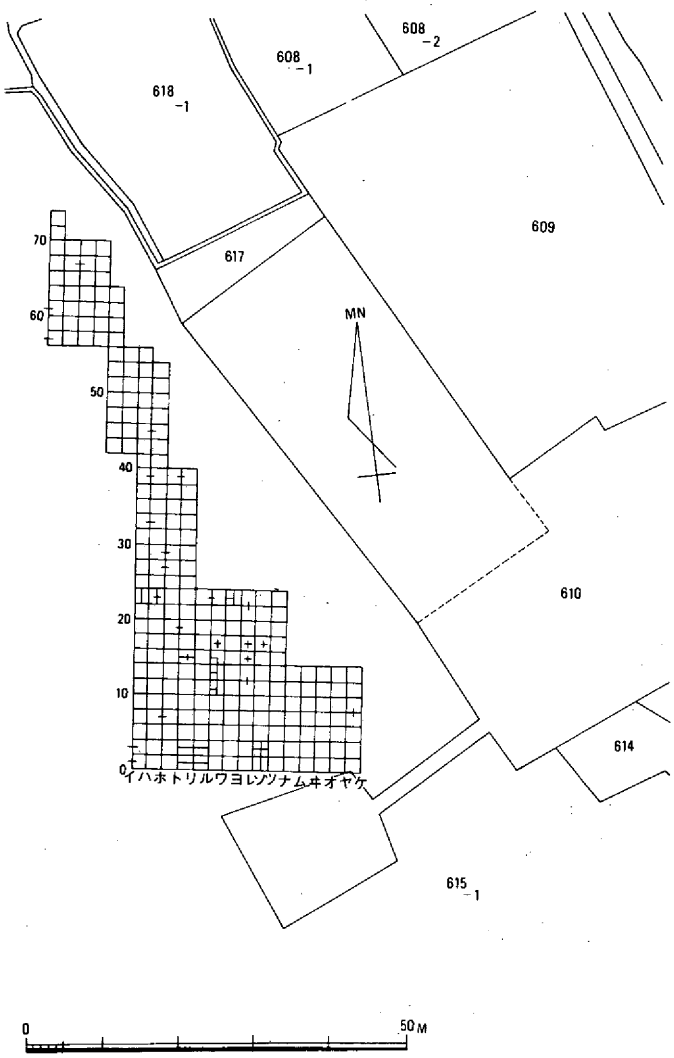
両遺跡の磁気探査の結果を報告する前に、磁気探査とはどんなものであるかを簡単に説明しておきたい。

地中の遺構は周囲の土地とは性格を異にする土や石などから成り立っているのが普通である。このため遺構とそれ以外の部分とでは土の中に含まれる鉄分の量や性質に差があり、磁気の帯び方に違いのある場合が多い。特に火を受けた土は熱残留磁気と呼ばれる現象によって、比較的強い磁力をもつようになる。地下に埋もれたいろいろな遺構は、それぞれに個有の磁気の帯び方に応じて、地磁気にある一定の量と形の影響を及ぼしている。このような地磁気に対する恒常的な影響を磁気異常と呼ぶ。瓦や陶器などの窯はおおまかに言えば、焼けた粘土の大きな塊ということになるので、ほかの種類の遺構に較べて、その磁気異常は際立って強く明確なものとなる。

地表面で地磁気の強さを精密に調べれば、多くの場合遺構の近くでは磁気の強さがまわりと違っているのが認められる。磁力の影響は距離が離れるに従い急激に弱くなるという性質をもっているので、窯跡が原因で磁気異常がおきているというような場合には、その異常の形は地下の窯体の状態を反映してかなり特徴的な様相を示すと考えていい。

磁気の強さを精密に測るために、幾つか種類の違う装置がつくられているが、この探査に使用したのは、プロトン磁力計（米国ジオメトリクス社製、G-816 およびG-826）である。これは携帯可能な装置で、地磁気の強さを±1ガンマ以内の誤差で測ることができるように設計されている。

第３図　磁気探査実施風景



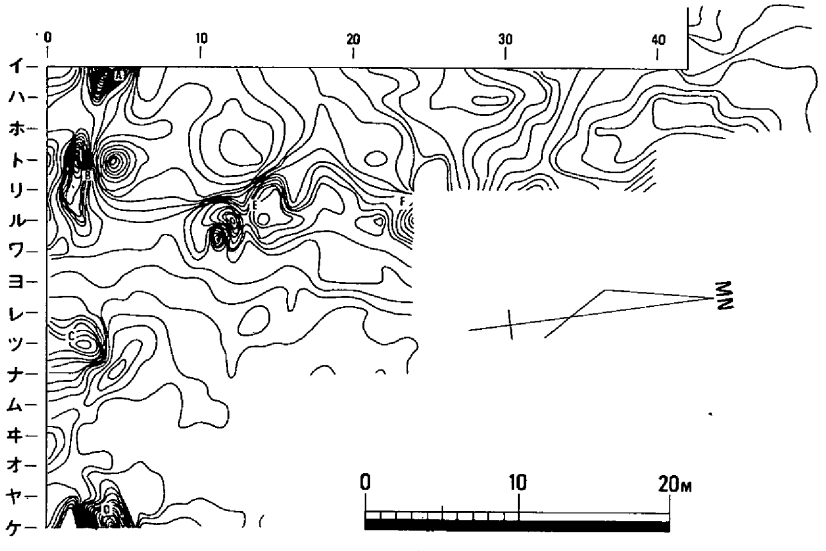

第４図　泉瓦窯跡地区探査方眼（S＝1/1000）

岡山県付近での地磁気の強さは、だいたい47,000ガンマ前後なので、その数万分の１の違いまでがこの測定器で捕えられるということになる。第３図にプロトン磁力計とその使用状況の写真を示す。

今回探査を行った２つの遺跡の周辺は人家が多く、近くをかなり通行量のある道路が走っている。自動車、電線、鉄道、人家の電気器具そのほかのものもそれぞれが強い磁力を帯びており、地磁気に影響を与える。しかもこの影響は、電流の変化や自動車などの移動により変化し続ける。今度の探査の対象となった地域内でも、地磁気の強さは、数10ガンマの上下幅をもって絶えず不規則に変動している。このような状況では、ある地点Ａで測った磁気の強さと時間を変えて別の地点Ｂで測った磁気の強さとの数値が同じでもＡとＢ２つの地点の磁気の強さには磁気ノイズの振れ幅の２倍までの差がある可能性があることになる。磁気ノイズが大きければ、例えば窯跡のために100ガンマ程度周囲より地磁気が強められている場所があっても、１台の磁力計を使った調査ではそれを確実に認めることは非常に難しい。この磁気ノイズの問題を解決するための方法の１つに、２台の磁力計を連動して使う測定法がある。つまりＡ、Ｂ２つの地点に１台ずつの磁力計を置き、同時に磁気の強さを読めばこの２点間の磁気の強さの差は正確に知りうるということである。特別に不利な条件になければ、ある程度の範囲内では磁気ノイズは同時におきており、変動幅はどの点でも等しいということは実験的に確かめられている。このため磁気ノイズのある場所で探査を行う場合には、１台の磁力計を任意の１地点に固定しておき、他の１台は調査対象区内の各点を移動させ、定点と各移動測点との差を調べるという方法をとる。今回の２遺跡の探査もこの２台を連動させる方法によった。

## 第２節　泉瓦窯跡の探査

測定作業は昭和54年７月24日に実施した。探査区の山林斜面に２ｍの方眼をつくり、各方眼交点上60cmの位置に磁力計の磁気感知器を置いて地磁気の強さを調べた。隣接点に較べ著しく磁気強度が異なる場合あるいは磁気異状の存在が推定できたようなところでは、１ｍ間隔で測定を行っている。第４図が泉瓦窯跡地区の探査方眼の配置である。方眼をつくるラインには東西にイ、ロ、ハ、南北に数字をつけて各点を示すようにした。探査を行った部分の面積は約1,200㎡



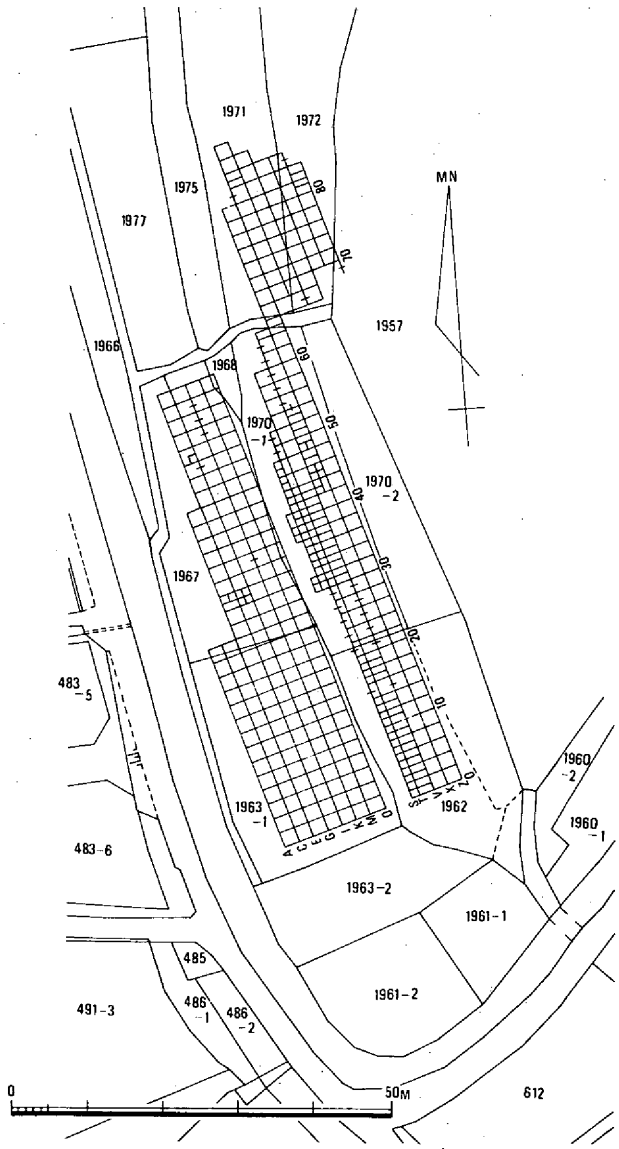

第５図　泉瓦窯跡地区磁気コンターマップ（S＝1/500）

**第１表　泉瓦窯跡地区の磁気の強さ（単位ガンマ）**　（定点は47001ガンマから47054ガンマまで53ガンマの幅で変動。）

| POINT | 0 | 2 | 4 | 6 | 8 | 10 | 12 | 14 | 16 | 18 | 20 | 22 | 24 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| イ | -32 | -5 | 248 | -43 | -28 | -31 | -23 | -6 | -5 | 2 | 16 | 26 | 33 |
| ハ | 4 | 24 | 9 | -36 | -18 | -17 | -30 | -18 | -8 | 0 | 2 | 22 | 39 |
| ホ | 22 | 29 | -2 | -1 | -6 | -30 | -40 | -35 | -19 | 4 | -4 | -6 | 21 |
| ト | -204 | 339 | -89 | -23 | -13 | -29 | -49 | -41 | 7 | 24 | -9 | -12 | 8 |
| リ | -28 | 42 | -26 | -3 | -4 | -18 | -10 | 61 | -20 | 58 | 40 | 11 | 24 |
| ル | -53 | 63 | 26 | 20 | 23 | 47 | 111 | 89 | 72 | 46 | 48 | 66 | -28 |
| ヲ | | | | | | | 85 | 64 | 47 | 36 | | | |
| ワ | 24 | 27 | 20 | 22 | 12 | 42 | 41 | 30 | 25 | 31 | 36 | 39 | 58 |
| ヨ | 4 | 2 | 12 | 4 | 9 | 6 | 22 | 19 | 12 | 30 | 31 | 30 | 34 |
| レ | 17 | 16 | -7 | -10 | -2 | 0 | 6 | -6 | 10 | 3 | -10 | 8 | 11 |
| ソ | 55 | 53 | -15 | | | | | | | | | | |
| ツ | 71 | 75 | -19 | -36 | -10 | -4 | 2 | 1 | 0 | -6 | -3 | 1 | -2 |
| ナ | 16 | 14 | -46 | -14 | -11 | -8 | 1 | -7 | -8 | -28 | -7 | -11 | 3 |
| ム | -14 | -18 | -6 | -9 | -8 | -13 | -7 | -4 | | | | | |
| キ | -46 | -5 | -7 | -10 | -9 | -6 | -9 | -7 | | | | | |
| オ | -22 | -13 | -12 | 3 | -8 | -6 | -11 | -9 | | | | | |
| ヤ | -36 | -5 | 36 | 22 | -6 | -9 | -6 | -4 | | | | | |
| ケ | -50 | -308 | 620 | -23 | -30 | -21 | -16 | 2 | | | | | |

になる。磁力計連動用コードの長さの関係で、探査区を３つの地区に分けて測定作業を進めた。各地区で得られた磁気の値は、それぞれ別の定点との磁気強度の差であるが、これは最初に設けた定点を０として整理しなおし、全体を同じレベルに補正することとした。第１表に補正を行った測定値の一部を表示する。

第５図に示したのが、この数値からつくったこの遺跡の磁気強度の分布を表わすコンターマップである。最初に設けた定点の磁気の強さを０として、10ガンマ単位で線を引いている。磁気異常として纏った形を示すのはＡ～Ｆの６つの部分である。このうちＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄの４つは道路に沿って並ぶ。Ｃを除く３ヶ所は磁気異常の大きさが300ガンマから1,000ガンマという大きな数値をもち到底窯跡など考古学的な遺構によって生じているものとは考えられない。道をつくる際に鉄の材料を使うなどしているためではないかと思われる。Ｃの部分は磁気異常の強さがほぼ100ガンマ程で、磁気の強くなっている部分の北側に30ガンマ程度磁気の弱められているところが認められる。異常の形があまり整っているとはいえず窯跡によるものとは断定できないが、その可能性はある。試掘坑をいれて確かめる必要があると考えた。Ｅ、Ｆの２ヶ所については、磁気異常の形が全く不整形であること、範囲が広すぎることなどから窯跡が存在する可能性はほとんどないと言える。探査区の25ラインより北側では地下の浅い部分に由来する磁気異常は確められない。北半部には窯跡はないと見ていいだろう。

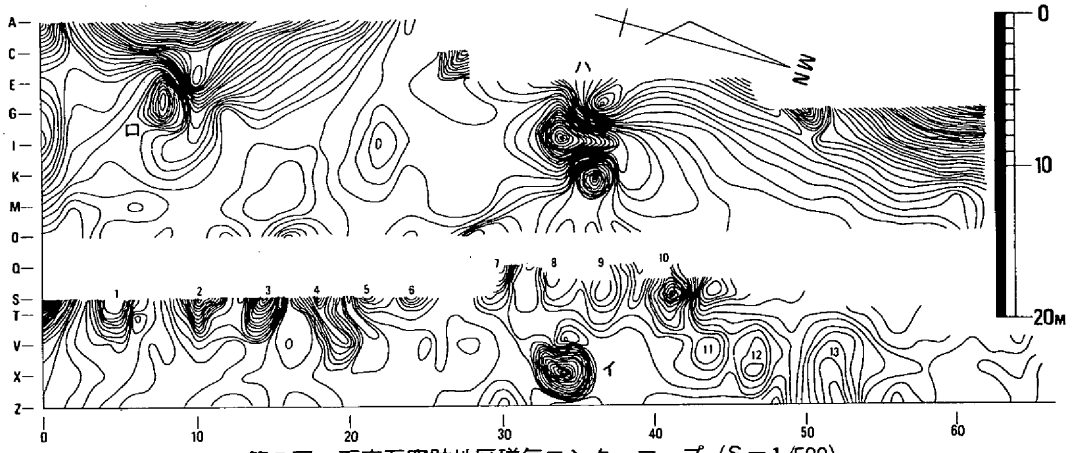



第６図　万富瓦窯跡地区探査方眼（Ｓ＝1/1000）

## 第３節　万富瓦窯跡の探査

現地での磁気測定の作業は昭和54年７月25日と26日に実施した。探査対象地区に２ｍ目盛りの方眼をかけ、基本的にはこの方眼の交点ごとに地上60cmの高さでの磁気の強さを測った。窯跡の一部が壊れていること、またかなり遺構が密集していることが予想されたため部分的に１ｍおきの測定を行って探査の精度を高めるようにした。第６図に探査用の方眼の配置を示す。方眼を構成する線には西から東にアルファベット、南北は南端を０としてメートル単位の距離数をそれぞれの名前とし、各交点をアルファベット１文字と数字とで示せるようにした。探査の対象となった区域は約1,500m²である。２台の磁力計を同時に働かせるために導線でつないでいるので、移動測定用の装置が定点から離れうる範囲はこのコードの長さに規定されることになる。万富遺跡では探査区を５つの部分に分け、各測定ブロック毎に１つの定点を設けて、ブロック内の測定点と定点との磁気の強さの差を測定し記録した。５つの定点間の磁気強度の違いは測定ブロックが変るたびごとに測り、最終的には第１番目に測定したブロックの定点Ｉのもつ磁気の強さを基準としてすべてのデータを整理した。定点Ｉを０として探査区内の各点の磁気強度をガンマ単位で表わしたリストを後に掲げる。

このような形に整理したデータから、遺構による磁気異常を読みとるために磁気強度のコンターマップを描いた。コンターマップの一部を第７図に示す。これは定点Ｉを基準として10ガンマ単位で磁気強度の分布状態を表わしている。狭い範囲内で数百ガンマ近く磁気の強さが変化している部分では、かなりコンターラインを省略した。




第７図　万富瓦窯跡地区磁気コンターマップ（S＝1/500）

このような作業の結果、探査区内で遺構に由来すると判定できる磁気異常13ヶ所が明らかになった。第７図中で１～13の番号をつけた部分がそれである。１から10までの異常は方眼のＱ、Ｒライン沿いにほぼ南北に走る小さな崖の上に一列に並んでいる。これは南北幅２ｍ強、東西の長さ２～３ｍ以上の範囲で周囲より50ガンマから150ガンマの磁気の高まりをもつ。磁気の高まりの北側にはそれぞれ磁気が弱められている部分も認められる。磁気異常の形・大きさからいって、これは窯跡の典型的な磁

気異常とみられ、この部分に窯跡が存在する確率が非常に大きいと判断した。11・12・13の3ヶ所は地下の遺構に由来することは確かだが、それが窯跡であるのかどうか、磁気異常の形からは判定しきれなかった。この13ヶ所以外にも著しい磁気異常がいくつか認められるが、これは地物（家、鉄製フェンスなど）の影響であることが明らかである。たとえばイの部分は焚火のあととその中の鉄線、石油缶の破片による磁気異常であり、ロ、ハの部分は地上におかれたトタン板の影響である。また4の窯跡の異常が東に幾分かのびているのも、地上の焚火の影響と見られる。探査区の西半A～Oのラインの部分は、人家、道路の影響が大きく、窯跡が存在しないという判断は下せるが、それより微弱な磁気異常しか示さない窯跡以外の遺構の有無については何もいえない。

泉窯跡、万富窯跡の両探査地区の現地測定データ、補正データは、すべて奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターに保管している。磁気探査の詳細あるいはデータ解析に関して疑問のある場合には、埋蔵文化財センターに照会していただきたい。

**第2表　万富瓦窯跡地区の磁気の強さ（単位ガンマ）**

（定点Iの磁気強度は46883ガンマから46945ガンマまで62ガンマの幅で変動）

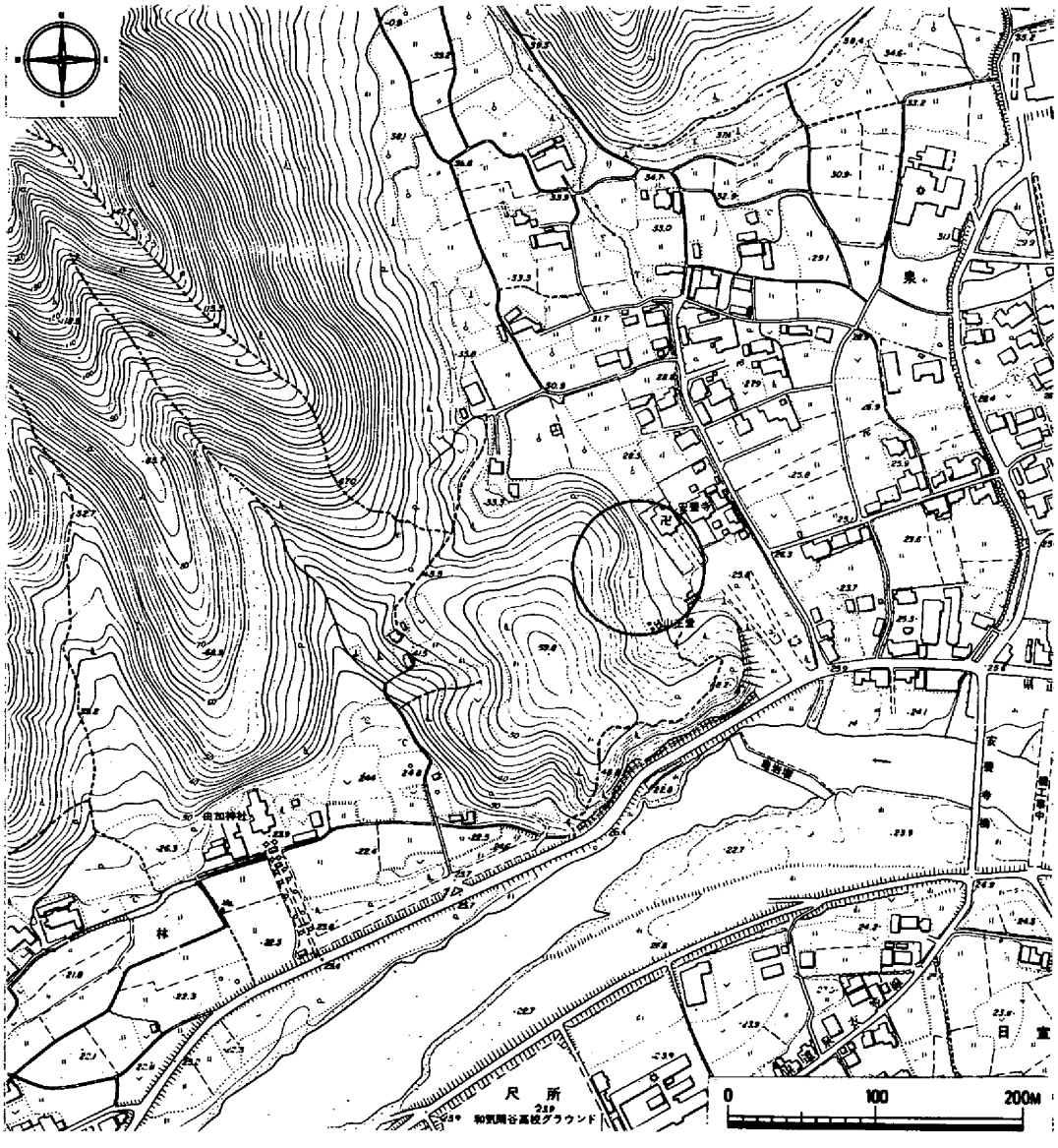
| POINT | 0 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| A | 25 | | -114 | | -192 | | -261 | | -307 | | -334 | | -289 | | -190 | | -186 | | -139 | | -115 | | -52 | | -6 | | -59 | | | | |
| C | -58 | | -84 | | -128 | | -131 | | -154 | | -193 | | -178 | | -134 | | -100 | | -74 | | -54 | | -23 | | -14 | | -121 | | 174 | | |
| E | -96 | | -76 | | -79 | | -64 | | 44 | | -219 | | -126 | | -92 | | -68 | | -58 | | -38 | | -22 | | -10 | | -1 | | -14 | | -31 |
| G | -128 | | -68 | | -70 | | -48 | | 58 | | -96 | | -4 | | -52 | | -40 | | -32 | | -27 | | -7 | | -13 | | -10 | | -5 | | -19 |
| I | -135 | | -61 | | -45 | | -47 | | -72 | | -89 | | -37 | | -29 | | -31 | | -30 | | -26 | | 12 | | -10 | | -16 | | -16 | | -12 |
| K | -99 | | -50 | | -35 | | -46 | | -54 | | -41 | | -38 | | -25 | | -12 | | -38 | | -13 | | -3 | | -25 | | -15 | | -12 | | -19 |
| M | -44 | | -10 | | -28 | | -17 | | -28 | | -36 | | -27 | | -16 | | -14 | | -37 | | -27 | | -22 | | -27 | | -12 | | 11 | | -34 |
| O | -3 | | -3 | | -36 | | -37 | | -41 | | -32 | | -56 | | -24 | | -81 | | -50 | | -30 | | -29 | | -42 | | -38 | | -74 | | -63 |
| Q | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 96 |
| R | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 86 |
| S | -365 | -177 | -70 | -4 | 63 | 66 | -6 | -24 | 4 | 47 | 183 | 239 | 38 | 18 | 304 | 22 | -17 | 31 | 113 | 46 | -26 | 69 | 45 | 28 | 81 | 45 | 14 | 13 | 14 | 51 | 48 |
| T | -208 | -107 | -48 | -13 | 56 | 60 | -44 | -27 | -2 | 25 | 105 | 36 | 30 | | 168 | | -14 | -14 | 63 | 26 | -13 | | 18 | | 27 | | 13 | | 18 | | 24 |
| V | -67 | -50 | -30 | -25 | -22 | -18 | -25 | -7 | -18 | 0 | 12 | 6 | -6 | 3 | 10 | -6 | -21 | -13 | -3 | 51 | 63 | -3 | -8 | 7 | 4 | -5 | 17 | 0 | -3 | 3 | 11 |
| X | -51 | | -44 | | -30 | | -18 | | -5 | | -7 | | 2 | | -2 | | -4 | | 2 | | 0 | | 1 | | 6 | | 10 | | 5 | | 12 |
| Z | -49 | | -35 | | -16 | | -3 | | -8 | | 6 | | 15 | | 9 | | -15 | | -10 | | 4 | | 6 | | 6 | | 11 | | 15 | | 48 |

| POINT | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| E | | -41 | -48 | -74 | | -108 | | -142 | | -142 | | -143 | | -152 | | -202 | | | | | | | | | | | | | | |
| G | | -6 | 13 | 62 | | -204 | | -123 | | -90 | | -96 | | -124 | | -137 | | -154 | | -25 | | -186 | | -238 | | -306 | | -404 | | -464 |
| I | | 17 | 96 | 369 | | | | -18 | | -45 | | -68 | | -76 | | -97 | | -109 | | -125 | -151 | -152 | -166 | -181 | | -232 | | -266 | | -296 |
| K | | -15 | | -6 | | -324 | | -18 | | -32 | | -51 | | -71 | | -76 | | -87 | | -99 | | -108 | | -123 | -140 | -150 | | -167 | | -175 |
| M | | -55 | | -65 | | -62 | | -45 | | -43 | | -47 | | -55 | | -65 | | -61 | | -70 | | -77 | | -93 | | -112 | | -114 | | -95 |
| O | | -54 | | -76 | | -56 | | -74 | | -57 | | -56 | | -55 | | -43 | | -55 | | -43 | | -63 | | -78 | | -77 | | -69 | | -87 |
| Q | 31 | -2 | | | | | 49 | 24 | -7 | | 52 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| R | 7 | 4 | 54 | 49 | 39 | 49 | 62 | 35 | 8 | 33 | 83 | 39 | -19 | -56 | -40 | -35 | -30 | -26 | | | | | | | | | | | | |
| S | 2 | 5 | 45 | 42 | 27 | 61 | 62 | 37 | 2 | 62 | 141 | 92 | -55 | -70 | -45 | -33 | -24 | -24 | -29 | -17 | -17 | -13 | | | | | | | | |
| T | 10 | 9 | 22 | 24 | 22 | 40 | 42 | 25 | 22 | 49 | 75 | 39 | -23 | -18 | | -18 | | -15 | | -16 | | -16 | | -29 | | -36 | | -29 | | -26 |
| V | 21 | 28 | 27 | 21 | -14 | 5 | 8 | 0 | 7 | 19 | 18 | 20 | 40 | 43 | 12 | 24 | 33 | 8 | -9 | 1 | 17 | 28 | 23 | 0 | -22 | -29 | -24 | -21 | -25 | -18 |
| X | | 14 | | 256 | | 5 | | 6 | | 9 | | 26 | | 29 | 10 | 46 | 41 | 5 | -11 | 18 | 47 | 44 | 18 | 6 | | -3 | | -11 | | -2 |
| Z | | 6 | | -5 | | -1 | | 7 | | -4 | | -5 | | -8 | | -2 | | -25 | | 18 | | 56 | | -15 | | -33 | -20 | -12 | | -4 |

# 第４章　発掘調査の概要

## 第１節　泉瓦窯跡の発掘

泉瓦窯跡は第１章で述べた金剛川と日笠川の合流点の平野部西端にあり、竜王山から南南東へ伸び出した細長い丘陵の先端部、半独立丘陵状を呈する海抜60m の低丘陵東側斜面に位置する。低丘陵の

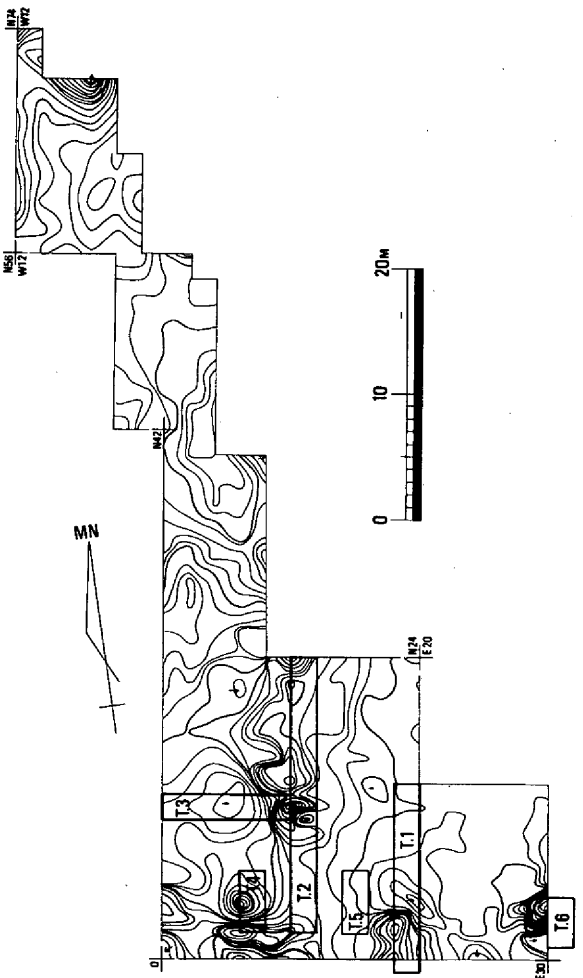



第８図　泉瓦窯跡（円内）周辺地形図（S＝1/5000）

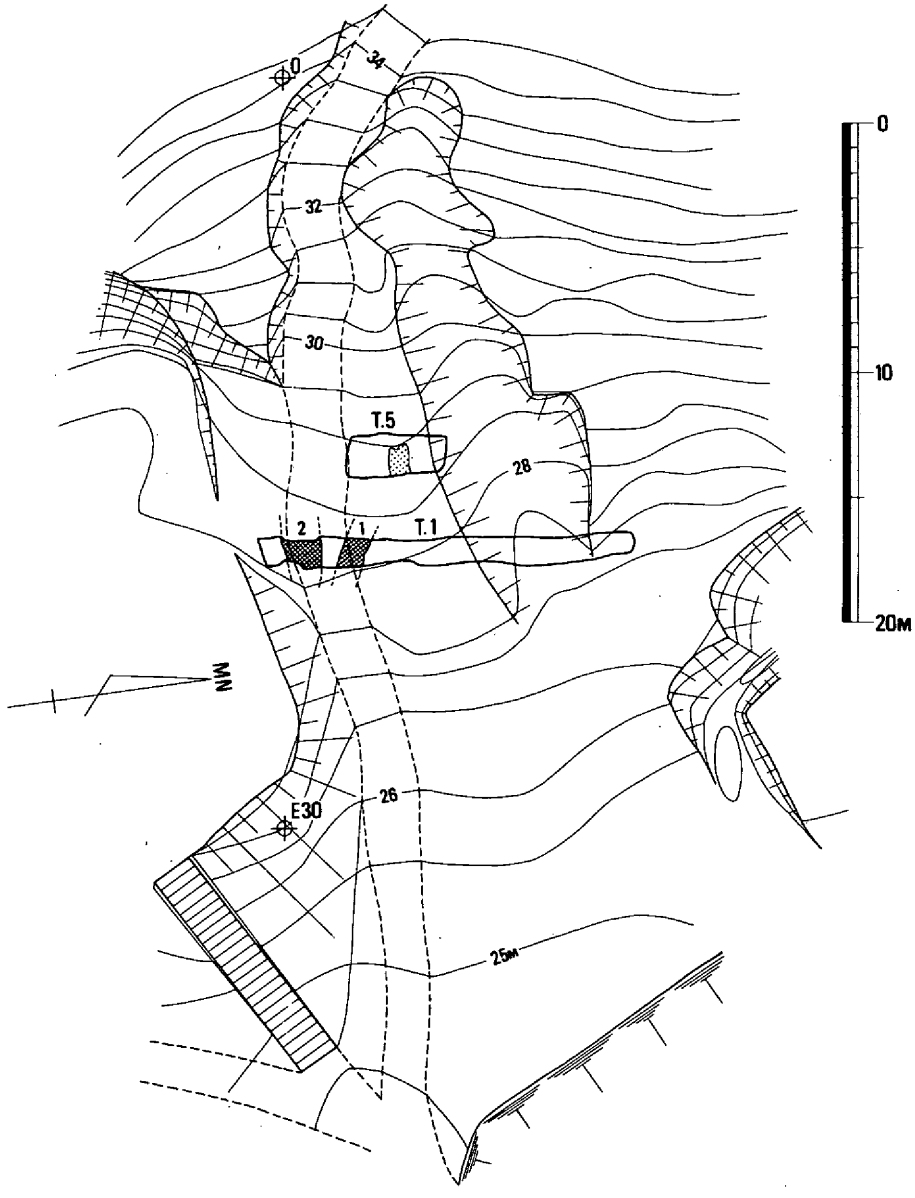
南端からは東方向へ狭長な尾根が伸出しているため、現地は丘陵裾の凹部になっていて、谷奥のような印象を与える。この低丘陵の裾に照光山安養寺が建立されている。現地は安養寺所有の山林で高木林となっている。凹部の奥まった所に丘陵斜面を削平して平坦地を造成し、山王堂が建てられ神社が祀られている。低丘陵上は展望台等のレジャー施設があり、「堂山ふれあいの森」として整備されている。「東大寺瓦」発見のきっかけとなったのがこの整備の一環としてなされた丘陵頂へ至る新道建設であり、山王堂の敷地の北に接して登っている。窯跡付近は傾斜角10°程度の緩斜面で、標高は28m前後である。丘陵裾の標高は25mである。現地踏査の際に確認された溝状の落込みは新設道の北にあり、幅4m、長さ20mの規模をもっていた。その北にも2ないし3条の浅い落込みらしいものがみられたが、それらは斜面の自然な凹凸の可能性も考えられ、人為的なものとは判断できなかった。長大な溝状の落込みは草苅後の北側崖面等の観察ならびに周辺の再踏査、さらには最終的に発掘により丘陵頂へ至るために設けられた旧道であることが判明した。

磁気探査の結果は第3章で述べられたとおりであり、6ケ所の磁気異常を示す地点が確認された。前述の溝状の落込みは当然なんらの反応も示さず、またそれより北の浅い落込みについても反応はなかった。6ケ所の磁気異常の在り方はほとんど窯跡の反応とは異なるものであり、窯跡の存在はかなり疑問視された。発掘調査は6ケ所の磁気異常のうち4ケ所について異常の原因を究明することを目的とし、第10図のようにT1～T4まで4本のトレンチを設定して実施した。T1より窯跡を検出したため、さらにT5・T6を追加して窯跡の形態・年代等を追究した。第10図は磁気探査の結果とトレンチの位置との関係を示したものである。

発掘の結果、第1トレンチ(T1)からは2基の窯跡が検出された。第2トレンチ(T2)と第3トレンチ(T3)の交点からはナタが出土し、第4トレンチ(T4)からはジョレ




第9図　磁気探査結果とトレンチの位置（S＝1/600）

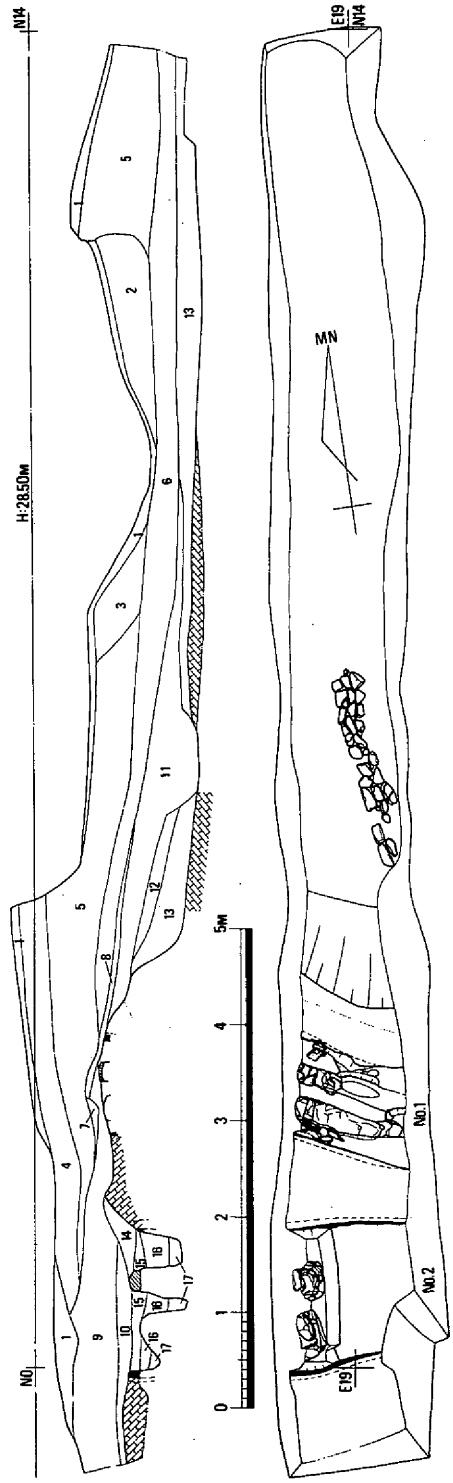



第10図　泉瓦窯跡地形測量図（S＝1/300）

ンが出土し、この２地点についてはこれらの鉄塊による反応であることが判明した。

第１トレンチは南端での磁気異常の原因と北半の溝状の落込みの性格を究明するために設定して発掘した。南端で北側の窯壁が検出されたため、道路下までトレンチを延長し、合計２基の窯跡を検出することができた。北側の窯を１号窯、南側の窯を２号窯と命名した。１号窯と２号窯は主軸の方位を異にしていて、床面の高さにもかなり差があり、１号窯の南壁と２号窯の北壁の距離がトレンチ西壁で１ｍ、東壁で55cmときわめて接近していることなどから、２基の窯は同時に操業していたものではなく、時間的に連続して構築・操業されたものと考えられる。２基の窯の先後関係については確証を得ることができなかったため現段階では不明である。

第１トレンチの土層堆積状況を西壁によって観察してみたい。第11図に土層図を示している。なお、地山は灰黄色砂礫土である。土層堆積は大きくみれば２段階に分けることができるようである。すなわち、第11図１～６までの層とそれ以外の層である。１～６までの層はかなり新しい時期に形成されたものと考えられる。６は礫を多量に含み、地山の砂礫土と類似している。５は６ほど多くは礫を含まず粒子がより細かい土である。この層からはいぶし瓦が出




1．腐蝕土
2．暗灰茶褐色土（瓦礫溜り）
3．灰黄色土
4．灰黄色微砂
5．灰黄褐色砂礫土
6．明灰黄色砂礫土
7．淡赤褐色土（含焼土）
8．明灰黄色細砂
9．灰黄色砂礫土
10．暗灰黄色粘性土
11．暗灰黄色土
12．灰赤褐色土斑灰黄色砂礫土
13．暗灰赤褐色土（含炭）
14．灰赤褐色粘性土
15．赤褐色土（含窯壁片・焼土）
16．黄白色土斑赤褐色土
17．含炭黒色土（含窯壁片）

第11図　第１トレンチ実測図（Ｓ＝1/80）

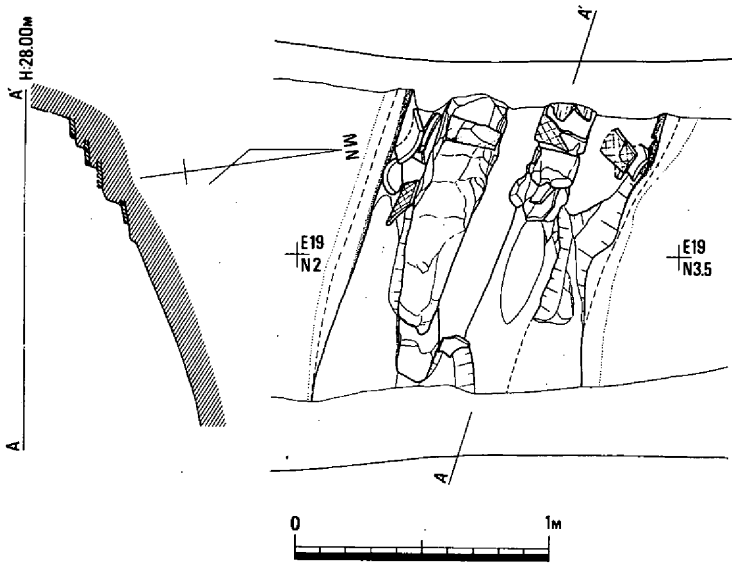
土しているため、近世以降に形成された層である。4は粘性のある微砂からなっている。かなり均質な堆積状況を示している。このように4～6は組成粒子が下層ほど粗いという状況がみられ、一連の堆積現象とみることが可能かと考えられる。各層ともわりに均質な堆積状況を示し、6が地山と近い土であることは、これらの層が自然堆積によって形成されたのではないかと思わせるのである。これにひきかえ2と3は瓦と礫が人為的に投げ込まれたような堆積状況を呈し、とくに2は瓦礫溜りとなっている。いずれも旧道の廃棄に伴い瓦礫の捨場となったものとみられる。7～14は焼土を含む層がかなりあり、窯を破壊して形成された層である。土層図を見るかぎり破壊には二時期あったようである。それは8と9の堆積状況から想定される。まず9・10・14の層が形成される破壊があり、その後8・11～13の形成される破壊があったとみられる。9の層は焼土がみられないことから破壊後しばらくして堆積した層と考えられる。10・14はともに粘性の細かい土であり、14には焼土が含まれ、破壊後間もない時期に堆積したものであろう。11～13はいずれも焼土を含み、とくに13は炭・焼土・窯壁片・生焼けの瓦を多く含み、窯の破壊時に堆積した層である。8・11は13の堆積時よりはしばらく後に形成されたものとみられ、8は焼土を含まず、11も焼土をごくわずか含むだけであった。15～17は2号窯の崩壊による自然堆積層であろう。以上のように第1トレンチでの土層堆積には、窯体内の崩壊による堆積、第1次破壊後の堆積、第2次破壊後の堆積、全面における自然堆積の4段階のあったことが想定される。

窯の構造を考える上で問題になるのが、1号窯の北にみられる段であり、この削平が窯に伴うものかどうかである。土層堆積からすれば窯の破壊前の削平と考えられる。1号窯の北壁と段の上端との距離は60cm前後と狭い。1号窯は床面付近が残存していただけであったため、段が窯に伴うものであったとすれば1号窯の北壁はかなり薄いものになり、しかも窯体の大半は地上に露出していた可能性が強い。窯壁の強度の上で問題はなかろうか。これに対し2号窯は半地下式窖窯であり、窯体の下半は山腹を掘穿して形成されていると考えられる。窯壁の強度上の問題はあるが、段の上端・下端の線は窯と平行しているようである。段の部分に堆積した土は第2次の破壊に伴うものであり、窯の廃棄後からは少し間がある。その間の堆積層は確認されていない。今後の類例資料の増加を待って再度検討したい。

第1トレンチの中央で石敷遺構を検出した。扁平な石を水平に敷いたもので、西辺は揃えられていた。第11図13の層の上面にあった。したがって窯とは時期を異にしている。小部分の発掘のためその性格は判然としないが、石畳の道あるいは建物縁辺の石敷の可能性もある。

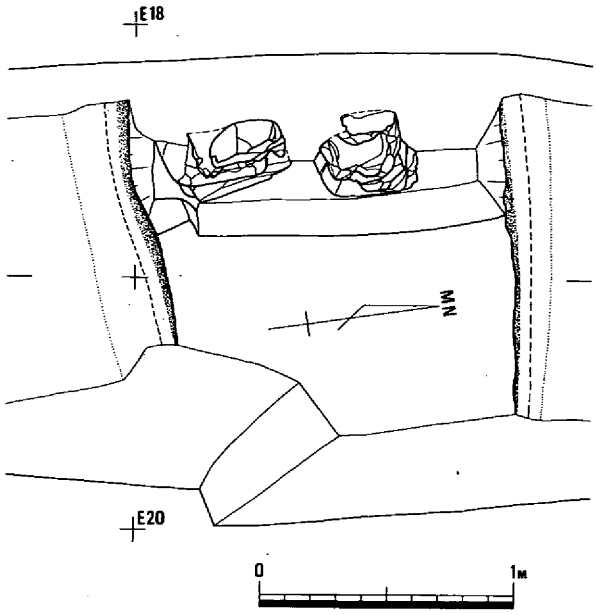
1号窯は焼成部を検出した。半地下式窖窯と考えられる。床面付近の残存にすぎず、東端では床面はすでに削平され消滅していた。窯の幅は95cmあり、主軸方位はMN-65°-Wであった。床面の傾斜は約20°であり、丘陵裾の傾斜角に近い。窯体は地山の灰黄色砂礫土を掘込み、スサ入りの粘土で壁面をつくっていた。貼壁の厚さは確認しえなかったが、採集した窯壁片では厚さ10cmのものがあった。壁体は内面より青白色、白色、橙色、赤褐色、赤紫色と熱による変化を示していた（第12図の破線は白色と橙色、点線は橙色と赤褐色の境である)。青灰色に固く焼けしまった部分は厚さ2cm、白色は5cm、橙色は4cm前後の厚さがあった。1号窯は窖窯と考えられるが、瓦窯として通有の形式である

ロストル式平窯のロストルを導入していて、２条の分焔牀を備えていた。ロストル式窖窯とでも呼ぶべきであろうか。これが１号窯の構造上の大きな特徴となっている。分焔牀は瓦と粘土を交互に積み重ねたものであるが、瓦そのものは若干傾斜を持つ程度であり、床面の傾斜とは平行しないため、分焔牀の上面は階段状になる。残存部分ではそれぞれの段差は５cm程度とみられ、またそれぞれの段の幅は７cmを測る。分焔牀の幅は平瓦の幅で20cmである。北壁はほとんど破損しているためかならずしも正確でないが、分焔牀は窯体内を均等に分割してはいず、３条の分焔道の幅に差がある。南壁で17cm、両分焔牀間で13cm、北壁で24cmを測りかなり不規則である。遺物は南壁側と北壁側の分焔道に落込んだ状態になっていたものを採集することができた。軒丸瓦片が生焼けの状態で一片採集された。床面、壁面には自然釉が青白色を呈して付着していた。１号窯の規模を探るため第５トレンチを設定して発掘したが、窯体は削平を受けてすでに消滅していて、焼土面が検出されたに止まり、第１トレンチから第５トレンチまでの５ｍについては窯が伸びていたことを確認したにすぎず、その全長ならびに各部の詳細な構造については今後の調査を待たねばならない。



第12図　１号窯実測図（S＝1/30）

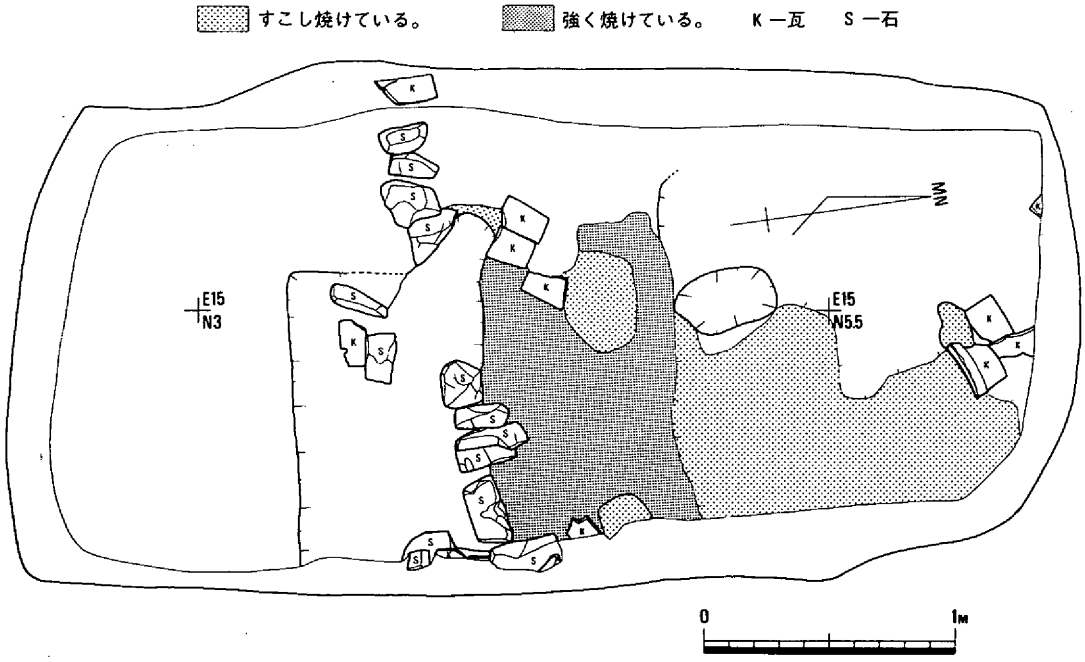
２号窯は燃焼部を検出した。半地下式窖窯である。検出部分の上半については床面まで掘下げた。窯は幅140cm前後を測り、床面までの深さは約60cmであった。主軸方位はＭＮ-87°-Wである。壁体の状況は１号窯と同様であった。ただし13図南壁の破線と点線の間は橙色あるいは赤褐色に変色した部分である。青灰色部分は５cm、白色も５cm、橙色は８cmの厚さがあった。壁は残存部分については上方に向って開くような傾斜をもっていた。床面は発掘した小部分では傾斜が認められ、１号窯の例や地形から考えて傾斜しているものとみられる。掘下げた部分から２本の土柱状のものが検出された。土柱とはいってもその本体は石を積上げたものであり、その周囲を粘土で巻いたものとみられる。よく火を受けていて、自然釉が吹出している。土柱は北側のもので下底幅40cm、高さ60cmを測り、柱状を呈していたが、南側のものは下底幅が60cmと広く、ずんぐりした形で残存していた。小部分の発掘のため窯全体の中で占める位置が明確でないが、その形状や他の類例から分焔柱のようなものではないかと考えている。柱は１号窯の分焔牀と同様に窯体内を均等には分割していない。土柱間は15cm程




第13図　2号窯実測図（S＝1/30）

度であるが、北壁と北側土柱の間は35cm程度と広い。分焔柱は窯の中央に立てて炎を左右に分け、窯体内における火のまわりを均等にする働きをもつが、それからすれば2本の分焔柱は本来の機能に合致しない。1号窯の例から考えればこの2本の土柱は2本の分焔牀に伴いその前面に立てられたものと考えるべきかもしれない。ロストル式平窯の焼成室と燃焼室の境をなす隔壁に対応するものかもしれない。

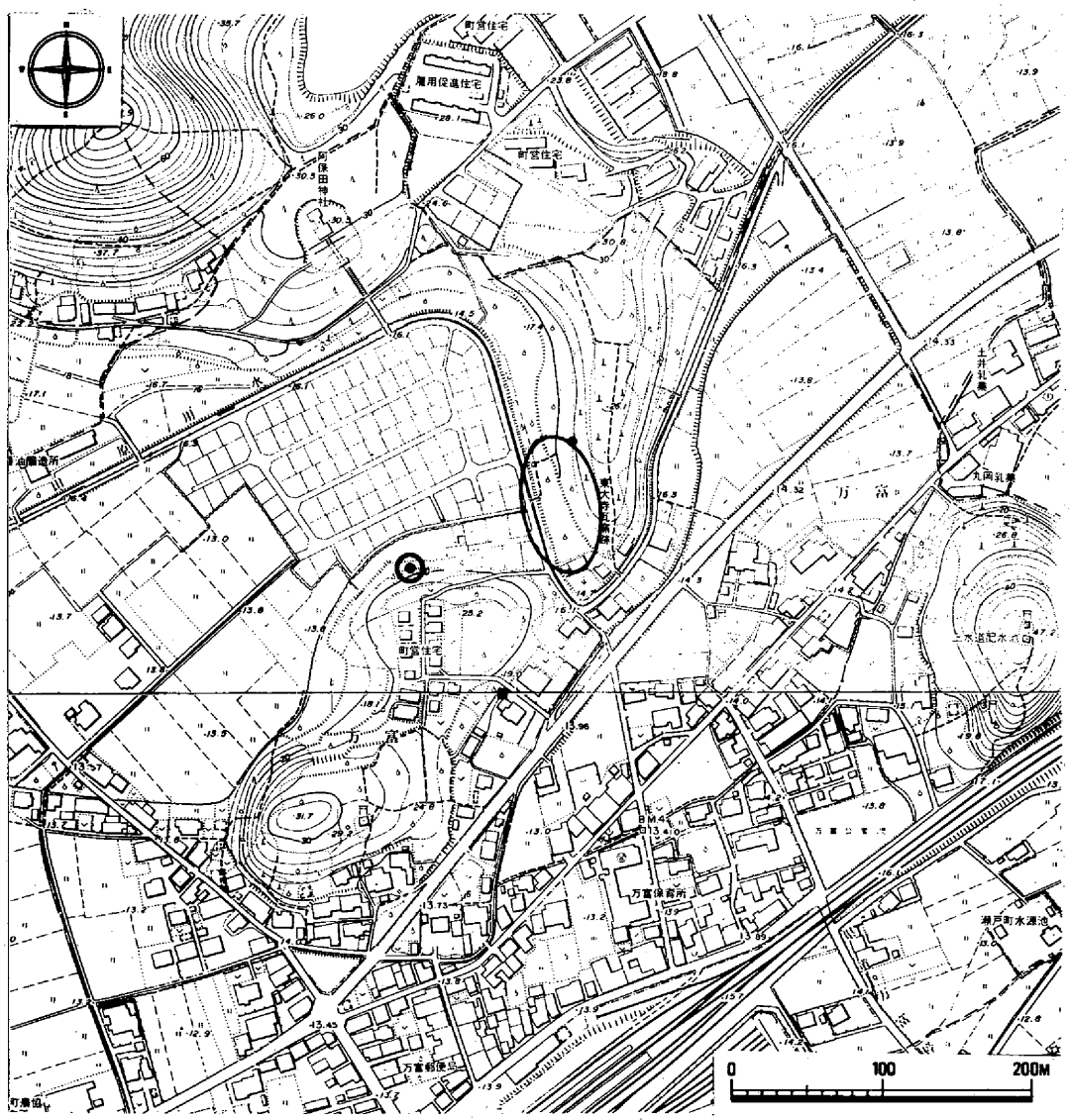
第5トレンチは1号窯の規模と奥部の状況を調査するために発掘したが、窯体部は削平されてすでに消失していて焼土面のみが検出された。中央部は一部後世の土壙によって破壊されていたが強く火を受けた部分があり、ここが床面直下であろうと推定される。したがってこの部分までは1号窯が伸びていたと考えられる。



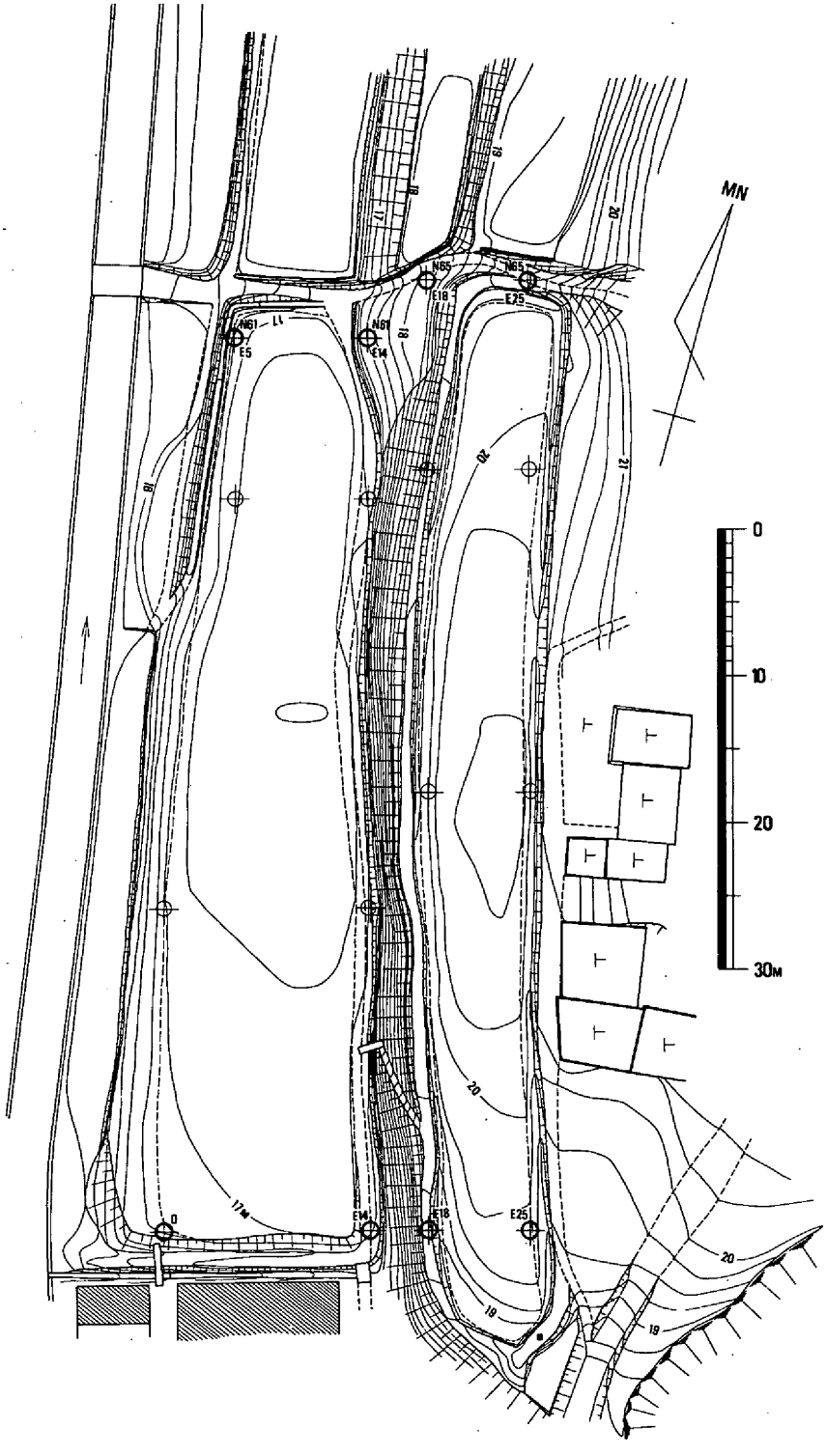

第14図　第5トレンチ実測図（S＝1/30）

## 第２節　万富東大寺瓦窯跡の発掘

万富東大寺瓦窯跡は瀬戸町万富の平野部北東端にあり、熊山町との町境の大盛山から南へ長く伸び出した尾根の最先端に位置する。大井と多田原の集落の間に標高76ｍの半独立丘陵があるが、この南東隅から尾根が派生し、東へ少し伸びて南へ方向を変える。南北方向へ250ｍ程伸びて終わる。東大寺瓦窯跡はその南半100ｍぐらいの部分の西側斜面に所在する。この南北尾根の先端に接してその南西に長さ250ｍの半独立丘陵があり、近年その北側裾から東大寺瓦窯跡が発見され、また東裾からは軒平瓦が採集されている（第15図）ことから、この半独立丘陵も東大寺瓦窯跡の範囲内に入るものと考えられ

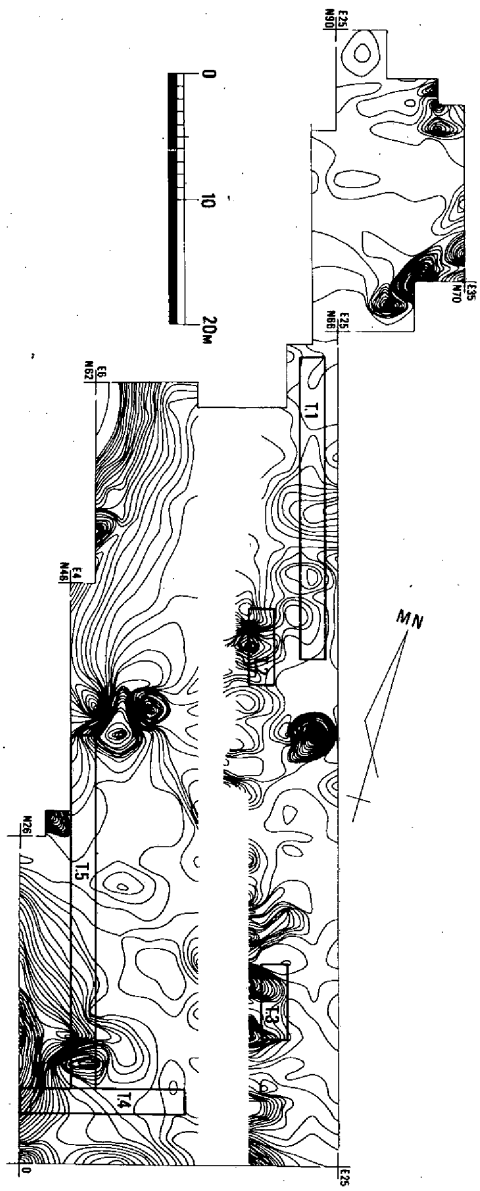



第15図　万富東大寺瓦窯跡周辺地形図（●軒丸瓦■軒平瓦出土地点⊙窯跡）（Ｓ＝1/5000）




第16図　万富東大寺瓦窯跡地形測量図（S＝1/500）

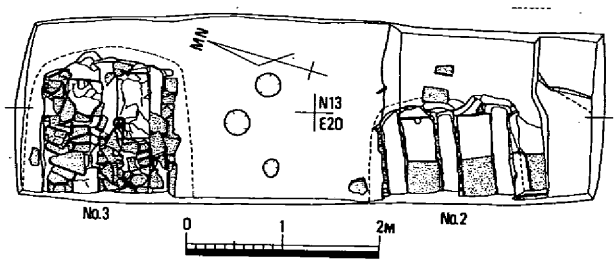
るようになった。今回の発掘調査の対象となった地域は指定域の南半部で第16図に示した東西二面の細長い畑である。東は標高20m前後、西は17m前後であり、3mの段差がある。尾根筋の中央部分は共同墓地になっていて、造墓による造成で地形はかなり改変を受けているとみられる。過去の造墓中の瓦出土なども耳にしたためかなりの攪乱が予想されるが、地形全体としては全面の削平等の大規模な変化はなく、旧状からそう隔っていないとみられる。この付近は大寺山という地名で呼ばれかつて寺があったというが、案外「東大寺瓦」に由来した地名であるかもしれない。



第17図　磁気探査結果とトレンチの位置（S＝1/600）

磁気探査は上述の対象地の北側にある三面の畑のうちの東一面について南25m分も対象として実施し、第3章で述べたような結果を得た。第17図に磁気探査結果とトレンチの位置関係を示している。上段の畑の西端に10基の窯跡が検出され、さらに北に3ケ所の磁気異常地点が発見されたが、これはかつて『吉岡村史』に記載されていた畑の崖面に窯が露出していたという記事と一致する。発掘調査はまず窯跡の磁気探査による推定と実際との位置・規模等の差を確認し、北側の3ヶ所の磁気異常の原因を究明することを目的とした。次いで今後の保存の基礎資料として窯の形式・残存状況等の実態を把握し、絶対年代の判明している遺跡であるという重要性によって灰原等の発掘による遺物の採集も必要とされることから、磁気異常はみられなかったが下段の畑にもトレンチを設定することとした。

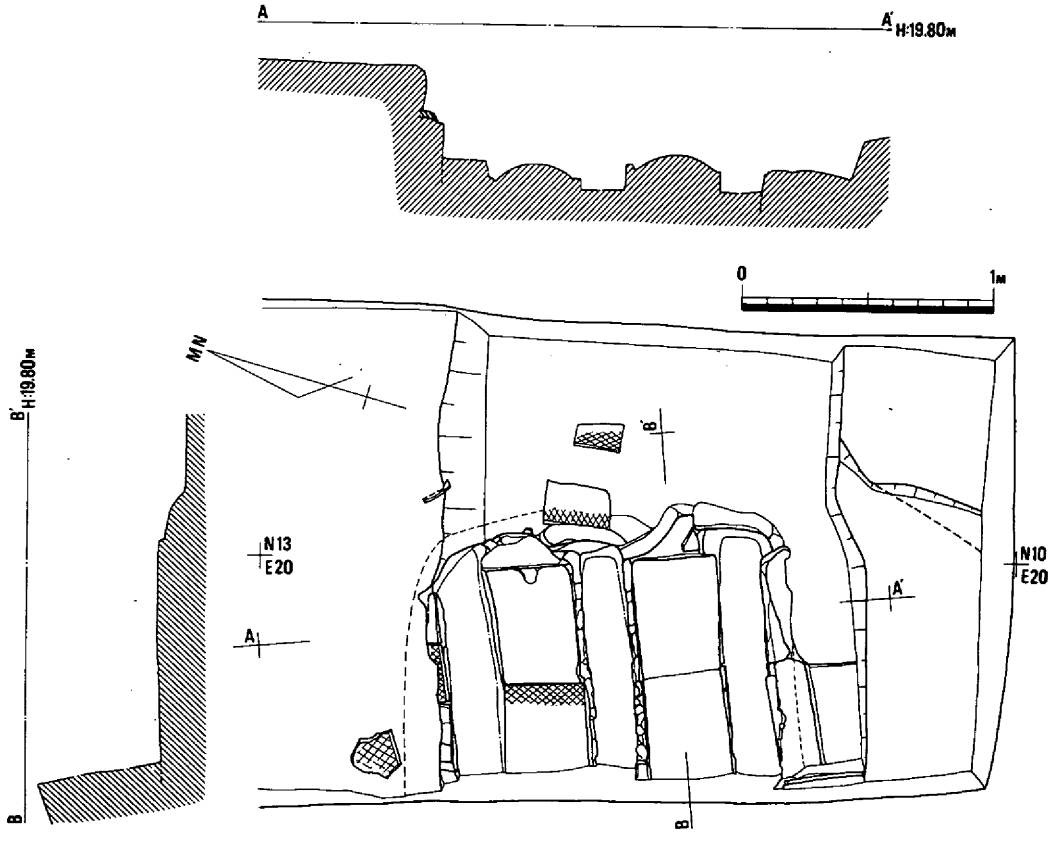
第3トレンチは2号窯と3号窯を調査するために設定した。なお窯の名称は検出された窯を南から順に1号、2号と命名している。磁気探査による推定では3号窯の奥部全体と2号窯の奥部北半が検出される予定だったが、発掘の結果窯は推定よりわずかに北に偏って検出され、2号窯・3号窯共に焼成室の奥部全体を捉えることができた。2号窯と3号窯は側壁間で2.2mの距離を隔てほぼ平行していたが、2号窯が3号窯より若干主軸を南へ振っていた。2号窯は3号窯より50cm程西にある。2号窯の南東隅近



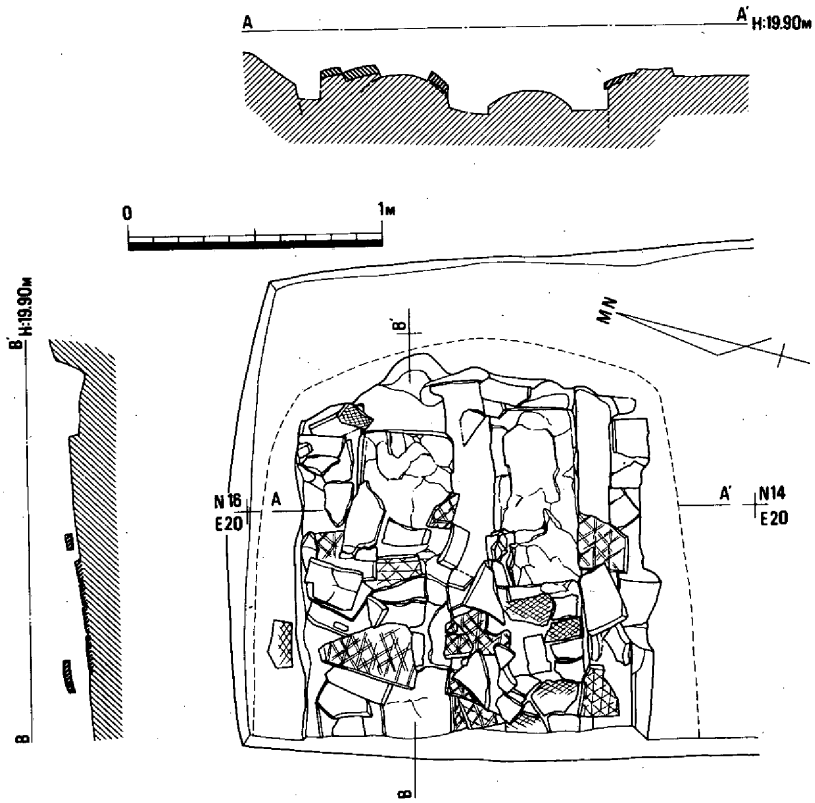

第18図　第３トレンチ実測図（S＝1/80）

くで掘方らしい線を検出したが他にはみられず、２号窯・３号窯の周辺は瓦を含む黄褐色土で充塡されていた。なお、２号窯に重複している溝状遺構は桃畑に設けられた暗渠の一種で、大量の瓦片が投入されていた。２号窯と３号窯のほぼ中央付近で３基の小円形ピットを検出した。ピット内を掘らなかったため性格・年代は判然としないが、その形状からすれば柱穴の可能性が強い。径25cmと長径20cmの規模である。窯と平行して並ぶ大小２基の柱穴が目につく。あるいは窯の上部に設けられた屋蓋施設の痕跡ではないかとも考えている。

２号窯はロストル式平窯である。焼成室の奥部約１ｍ分を検出した。桃畑の暗渠により上端は破壊されていた。窯の幅は1.3ｍを測る。２条の分焔牀をもち、分焔牀の幅は東大寺瓦の幅より少し広い




第19図　２号窯実測図（S＝1/30）

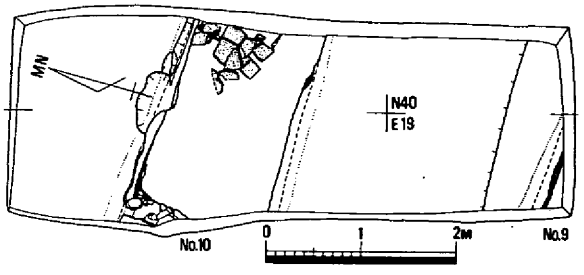



第20図　3号窯実測図（S＝1/30）

37cmである。分焔道の幅は17cm前後と3条ともほぼ等しい。分焔牀は瓦と粘土を交互に積上げたもので、側面には粘土を貼付けている。分焔牀の上面はほぼ水平である。検出に止めて床面まで掘っていないためその高さは不明である。側壁の構築も分焔牀と同様である（図版8）。側壁はほぼ垂直に近く立上がっている。北側壁では上面に瓦を置いた段が途中にみられ、瓦を焼く時に瓦を立てる足掛りにしたものではないかと考えられる。奥壁については暗渠によって大きく破壊されその構築法は明確でない。瓦が一枚粘土に挟まれて残存していることから、瓦を所々に挟みつつ粘土で築いたものとみられそうだが、側壁のように粘土と瓦を交互に積上げる程には瓦を使用しなかったと思われる。奥壁残存部分の粘土の厚さは約10cmを側る。窯体内はよく焼け青灰色を呈している。第19図の破線までは青灰色ないしは白色に変色している。奥壁の南隅から40cm離れ、トレンチの南東隅に掘方らしい線を検出した。第19図に軽い段で示しているがあまり自信はない。窯の主軸方位はＭＮ―69°―Ｅである。

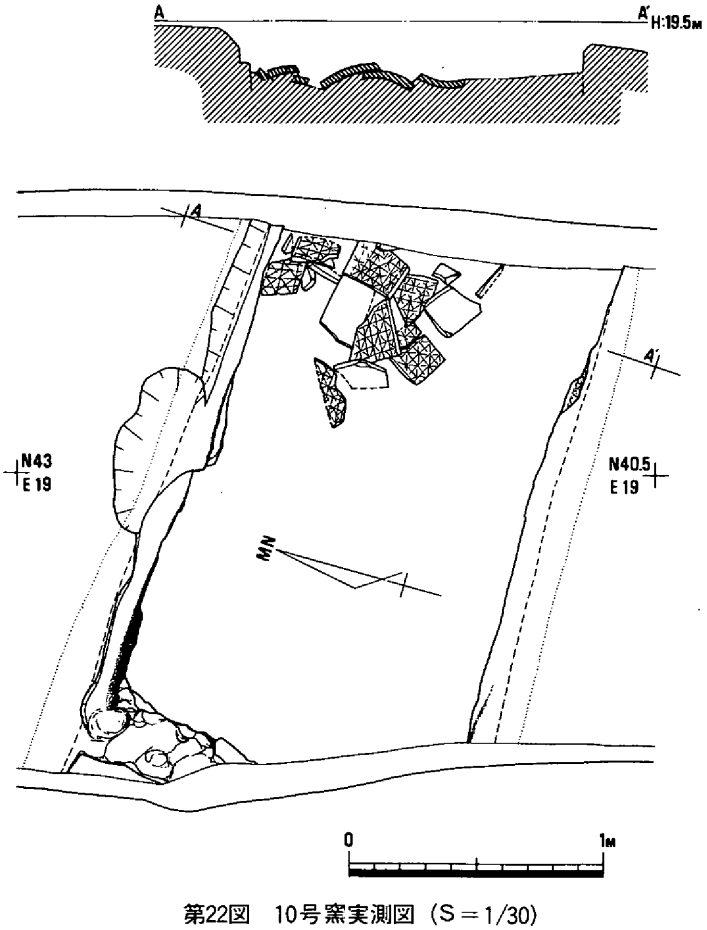
3号窯もロストル式平窯である。窯の構造・規模等2号窯ときわめて類似している。やはり焼成室の奥部1.4m分を検出した。窯体内には多数の瓦片が分焔牀の上に接して散乱し、また分焔道に蓋をするようにしてかなりの瓦片が敷かれていた。分焔牀はほとんど破壊を受けずに残存しているのではないかと考えられる。分焔牀・側壁共に瓦と粘土を交互に積上げて構築されている。奥壁は2号窯と同様明確でないが、検出部分については瓦をみない。2条の分焔牀は幅35cmを測り、その上面はわずかに傾斜を持ち、焚口へ向かって下がっている。分焔牀と奥壁との接合部分は分焔牀上面より一段低くなって段をもっている。分焔道は北側壁側が20cmとやや広く、他の2条は15cmである。南側壁に瓦が

並んでいるが、下の壁面より少し突き出ていてやはり足掛りのようなものではないかと考えられる。窯体内は青灰色を発し、よく焼けている。分焔牀上面の瓦は2号窯と違い、よく火を受けたためかヒビ割れている。窯の幅は1.3m、主軸方位はMN－74°－Eである。



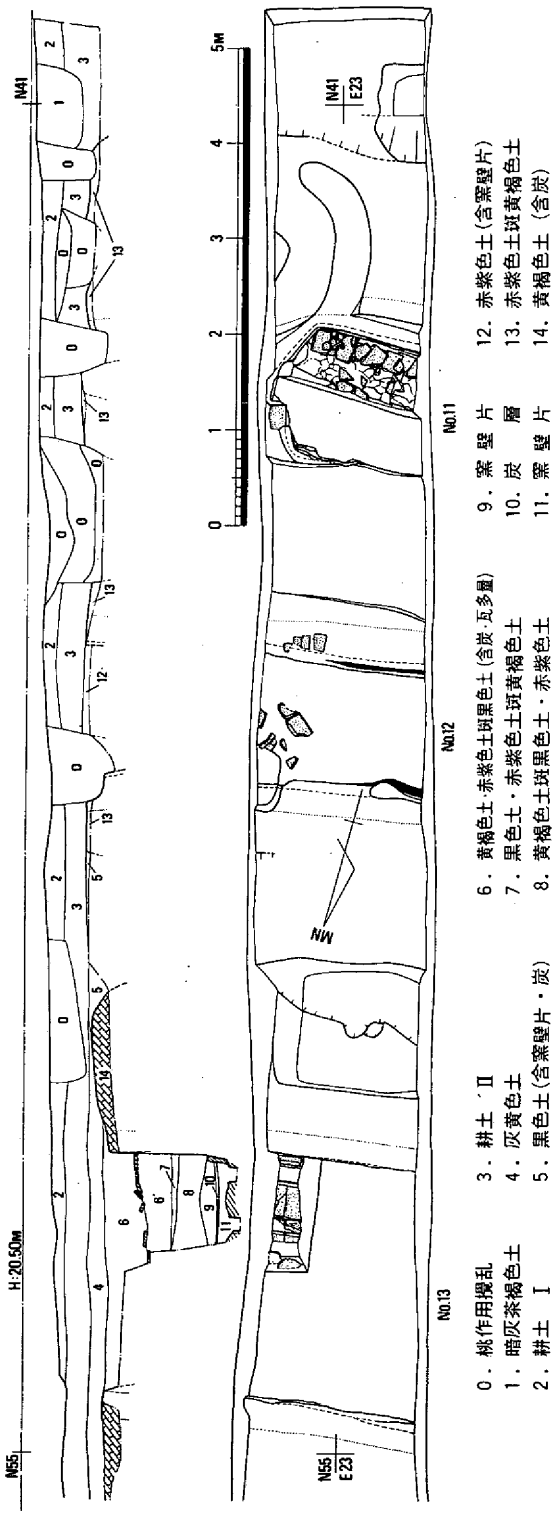
第21図　第2トレンチ実測図（S＝1/80）

第2トレンチは10号窯の検出を目的として設定した。発掘の結果、第3トレンチの場合と同様に磁気探査による推定位置よりも北に偏って窯が検出され、9号窯の北側壁の一部をわずかに検出することができた。9号窯と10号窯は側壁間で2.8mの距離をもって平行して検出された。9号窯縁辺の土と10号窯周辺の土は異なり、第21図のトレンチ右端に示した線が、境として引けるが、これが10号窯の掘方になるかどうかは明確でない。ただ、9号窯縁辺の土は地山に類似して遺物の包含をみないが、10号窯周辺の土は黄色土をブロック状に含む赤紫色土であり、瓦・窯壁片・粘土をかなり含んでいる。第3トレンチでみられたような小形ピットは検出されなかった。



第22図　10号窯実測図（S＝1/30）

10号窯は焼成室部分を検出した。側壁の上端を検出した段階で発掘を止めたため窯体内の構造については不明であるが、後述する11号窯と形態や側壁の状況に類似がみられ、また隔壁があり、ロストル式平窯と推定される。窯の幅は1.3m前後である。側壁断面にはよく焼けて灰黒色ないし青灰色を呈する層が2層みられるところがあり、壁の修復が行われたことを示している。側壁の上端は検出部分については西の焚口へ向かってわずかに傾斜して下っ




第23図　第１トレンチ実測図（S＝1/80）

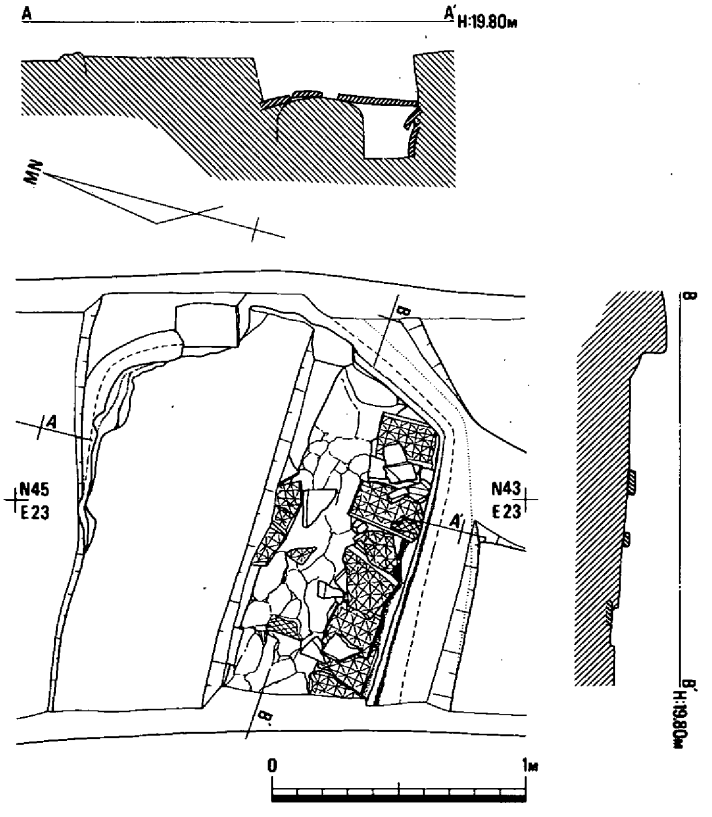
ていく。10号窯で注意されるのは窯の西端で検出された幅25cmの青灰色によく焼けた粘土塊である。窯の主軸と直交する形で帯状にみられる。おそらく燃焼室と焼成室の境の隔壁であろう。これから測れば検出された焼成室の長さは2.3mとなる。10号窯の主軸方位はＭＮ―87°―Ｗである。

第１トレンチは10基の窯よりさらに北で磁気探査によって発見された３ケ所の磁気異常の原因を究明するために設定されたものであり、発掘の結果３基の窯が検出され、磁気異常が窯の存在によることが判明した。３基の窯は南より11号窯・12号窯・13号窯である。３基ともほぼ平行している。それぞれの間の距離は側壁間で、11号窯と12号窯が2.2m、12号窯と13号窯が４m、また10号窯と11号窯は約２mを測る。11号窯と12号窯の間、12号窯と13号窯の間にはそれぞれ桃畑の暗渠が掘られ攪乱を受けている。11号窯の南にある弧状の落込みは桃の施肥用の溝である。東大寺瓦窯跡と関連する遺構としては、トレンチ南端の溝状の落込みと、12号窯と13号窯の間にあるやはり溝状の落込みである。しかしトレンチ南端の落込みは埋土が新しいものであることから関連は薄いとみられる。後者の落込みは12号窯北側壁から40cm、13号窯南側壁からは140cmぐらいの距離に南北肩部があり、溝内には黒色土が詰まり、炭・窯壁片・瓦を大量に含んでいて注意される。一応溝状遺構としているが南肩ははっきりせず、北肩の線もやや不規則なためあるいは土壙状になるかもしれない。

第23図に第１トレンチ東壁の土層図を示しているので、これによって上段の畑の全

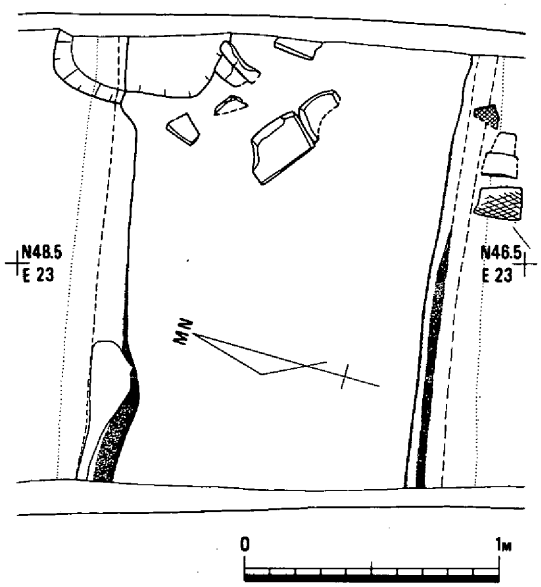
体的な土層状況も含め若干の説明を加えておく。当地はかなり以前より開墾されていたようだが、とくに戦後地権者により盛んに耕作されていた。そして最終的には桃畑となり、さらに近年は地権者の耕作放棄により借地人による畑作が再開され、ほぼ全面畑地となっている。桃畑の時には施肥のためや暗渠を施設するためにかなり深く掘穿され、遺構がかなり破壊されている。とくに暗渠による被害が大きい。しかし攪乱の際に出土した瓦類はほとんど暗渠に埋められたため、現地から大きく遊離することなく残されている。第23図で０と表示した部分はすべて桃畑に伴う攪乱である。２と３は耕土でありよく攪拌されている。３は２よりよくしまり濃色である。上段の畑では３の土が遺構面に接していてこれを除去した段階で遺構を検出することができた。第２トレンチ・第３トレンチがそうである。４の土も東大寺瓦窯操業後に堆積した土とみられる。よくしまった包含層である。５～13は東大寺瓦窯に直接関係するものと考えるが、５はやや疑問がある。13の土は瓦・窯壁片・粘土・炭等をかなり包含していて、10号窯の周辺にみられた土と同じものと考えてよい。この土は12号窯の周辺までみられる。もし９号窯と10号窯の間にみられた線が掘方の肩部であるとすれば、10号窯・11号窯・12号窯は１つの掘方の中に連続して同時に構築された窯ということになる。このことは東大寺瓦窯の形成過程ならびに群構造を考える上で看過できないことである。14の地山は炭を含んでいて山の生地そのものではないが遺物の包含がみられず、東大寺瓦窯構築時の基盤層とみている。

11号窯はロストル式平窯である。焼成室の奥半分を検出した。発掘は窯壁の上端を検出した段階で一度止め、さらに南半分について分焙牀の検出面まで下げた。窯の幅は1.3mを測り、奥壁から前方1.6mまでの部分を確認した。北側壁は桃畑の暗渠によりかなり破壊されていて一部上端を検出したに止まった。奥壁の形状は２号窯・３号窯とは異なっていた。３号窯の奥壁は側壁とほぼ直交するのに対し、11号窯の奥壁は外側へ湾曲して張出し、さらに中央部には幅40cm、長さ10cm程度




第24図　11号窯実測図　(S＝1/30)

の突出部がある。窯体内は攪乱を受けずに保存されていたとみられる。2条の分焔牀をもつものとみられる。分焔牀は幅35cm程とみられる。分焔牀の上面は粘土で覆われていて、一部破損している所から瓦が覗いていた。3号窯の分焔牀上面が瓦を置いたままであったのでここにも相違がみられる。しかし分焔牀の構築法は粘土と瓦を交互に積上げていく方法で同じである。分焔牀の上面はやや傾斜をもち、西の焚口へ向って下がっている。分焔牀と奥壁の接合部上面は傾斜して奥壁側へ上がっている。これは3号窯の場合接合部が一段低くなっているのとやはり異なる。分焔道の幅は南側壁側で20cmを測る。側壁はほぼ垂直に立上がる。検出土端から40cm下まで掘下げた。検出部分下端では壁面に半截したとみられる平瓦を横に立て並べているのが観察され(図版16)、その上方には平瓦を壁面から5cm程はみ出すような形で並べて置き、その上に粘土を積上げていた。やはり足掛りのようなものと考えられる。側壁は、断面をみると内側から青灰色・白色・橙色・赤紫色の順に熱変化を受けて発色しているが、図版14でみられるように青灰色の層が2層みられ、壁の修復ないしは改築のなされたことが知られる。壁体粘土の厚さは10cm内外とみられる。奥壁の検出上面で平瓦が付着して検出され、3号窯と同じような構築によったものと考えられる。奥壁の形態は前述のようなものであったが、この中央の突出部はあるいは煙出しに関係したものかとも思われるが、現状ではきわめて不明確である。窯体内にはかなりの瓦片が残存していたが、その大部分はかなり大きな破片で、あたかも分焔道に蓋をするような形で丁寧に重合わせて並べられていた。ただしこのような状況は南側壁側のみで、中央の分焔道上はかなり疎にみうけられた。このような瓦のあり方は明らかに人為的なものである。ここで想起されるのが3号窯内における瓦の出土状況である。11号窯ほど丁寧ではないし粗いが、やはり分焔道を塞ぐような部分がみられる。このような状態で瓦を焼くことは不可能であり、当然窯の廃棄にあたってなされたものと考えられる。その意図がどこにあるのか、今後考慮されなければならない問題であろう。なお、11号窯の主軸方位はMN—87°—Wである。

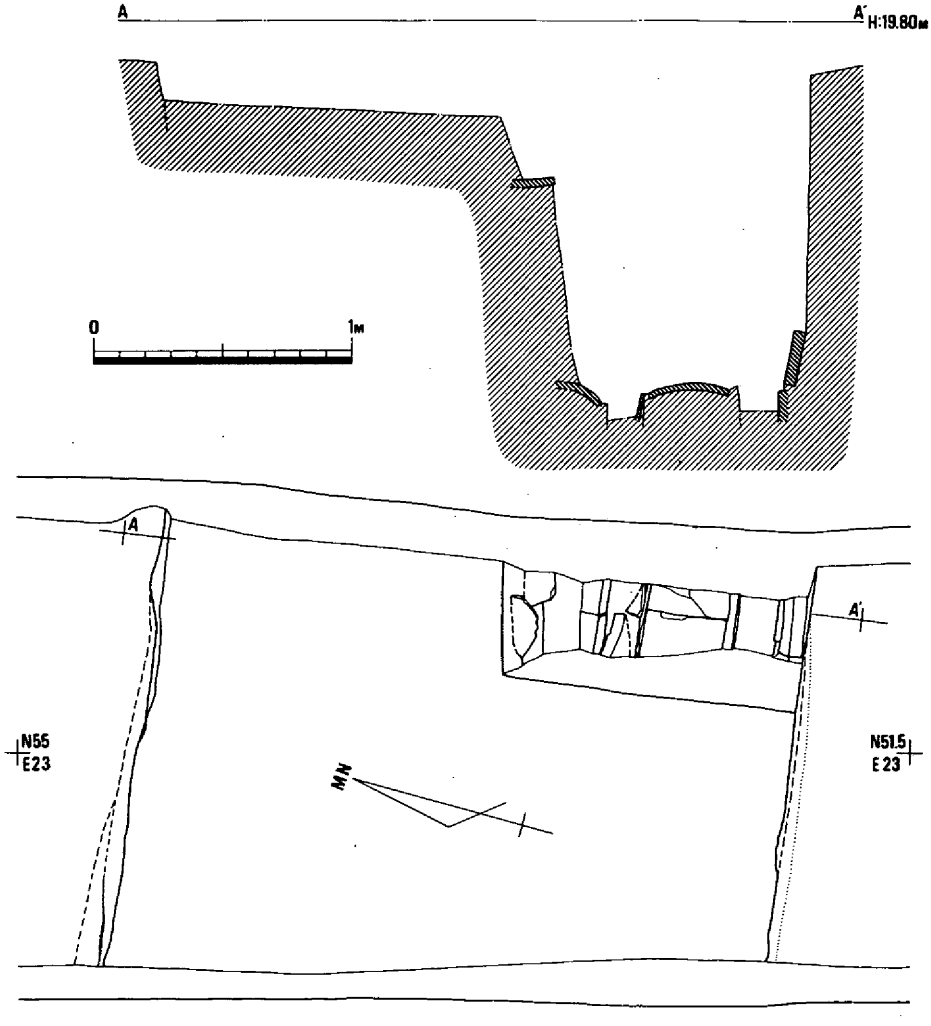


第25図　12号窯実測図（S＝1/30）

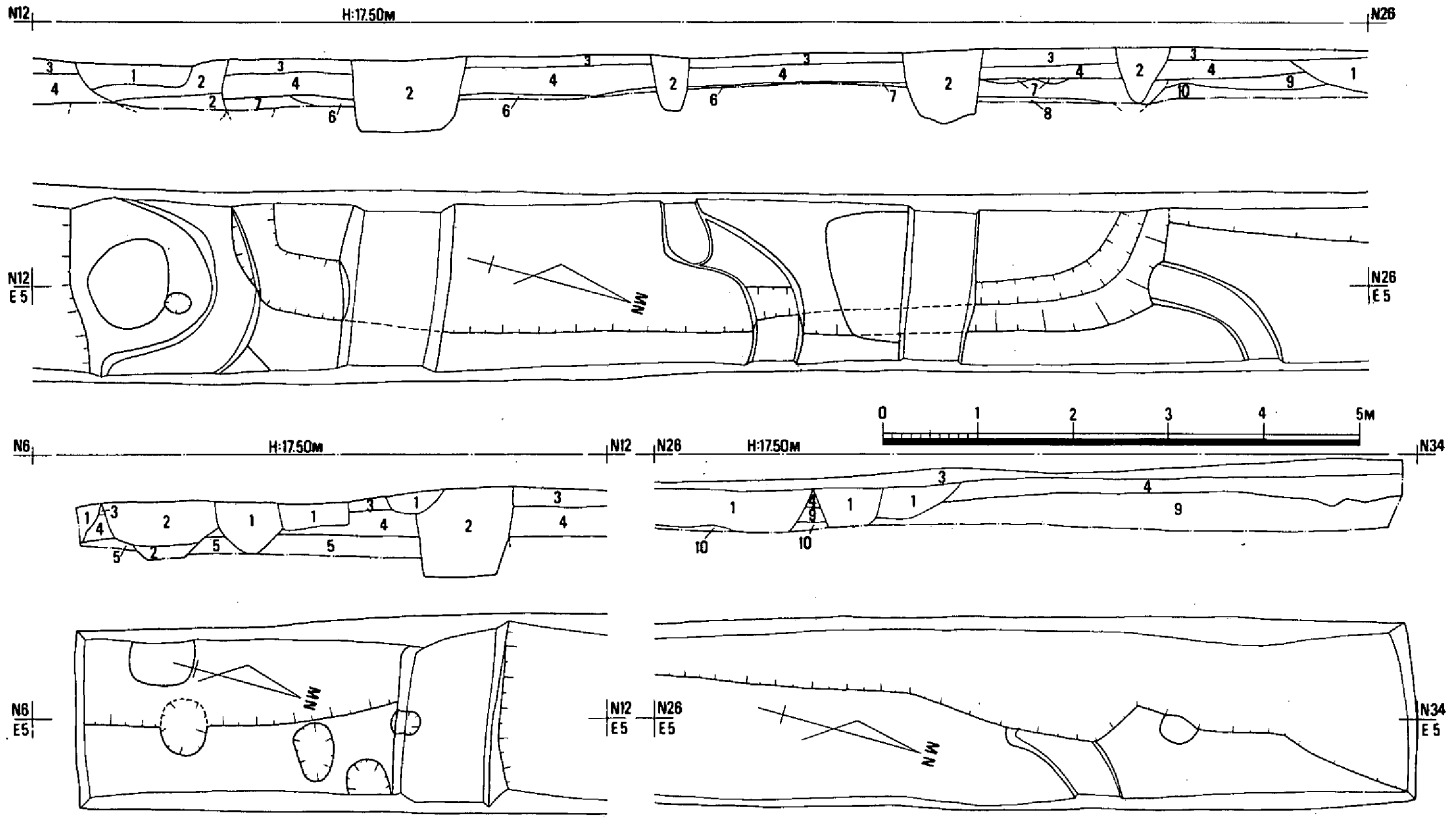
12号窯は窯壁の上端を検出した段階で発掘を止め、窯体内は掘らなかった。検出したのはおそらく焼成室部分であろうと考える。北壁の検出部分東端は桃畑の攪乱により破壊されている。窯の幅は約1.2mを測り、11号窯よりはわずかに狭い。南北の側壁は完全な平行ではなく、焚口へ向かって若干狭くなっている。側壁断面の色彩変化は11号窯と同様であり、南側壁では青灰色の層がやはり2層みら

れ、北側壁でも暗灰褐色土の薄層を挟んで白色の層が２層あり、壁の修復の行なわれたことが想定される。12号窯の主軸方位はＭＮ－80°－Ｅである。12号窯は窯体内を掘っていないためその形式を確認していないが、規模・形態等の11号窯との類似からロストル式平窯と推定してよかろう。

13号窯の幅は2.5ｍを測り、今まで述べてきた窯の倍の規模をもっている。窯壁の上端を検出した段階で一度止めたが、倍の規模をもっていることから、検出部分の南東部の小範囲を掘り下げ、形式を確認することとした。発掘の結果４条の分焔牀をもつと推定されるロストル式平窯と確認された。13号窯は残存状況がきわめて良好で、分焔牀は窯壁検出面下1.3ｍのところで確認された。分焔牀は瓦と粘土を交互に積み上げたものとみられる。分焔牀の上面は瓦であり、粘土の被覆はなかった。しかし分焔牀の側面は粘土が塗られている。分焔牀は幅37cmである。南側壁を検出上端から1.4ｍ下まで確認




第26図　13号窯実測図（S＝1/30）




1．現代攪乱　4．灰茶色土　7．黄褐色土　10．暗茶褐色土
2．桃作用攪乱　5．黒色土（含炭）　8．砂　11．黒色土（含窯壁片）
3．耕土　6．灰色粘土　9．灰原層（黒色土，窯壁・炭多量に含む）

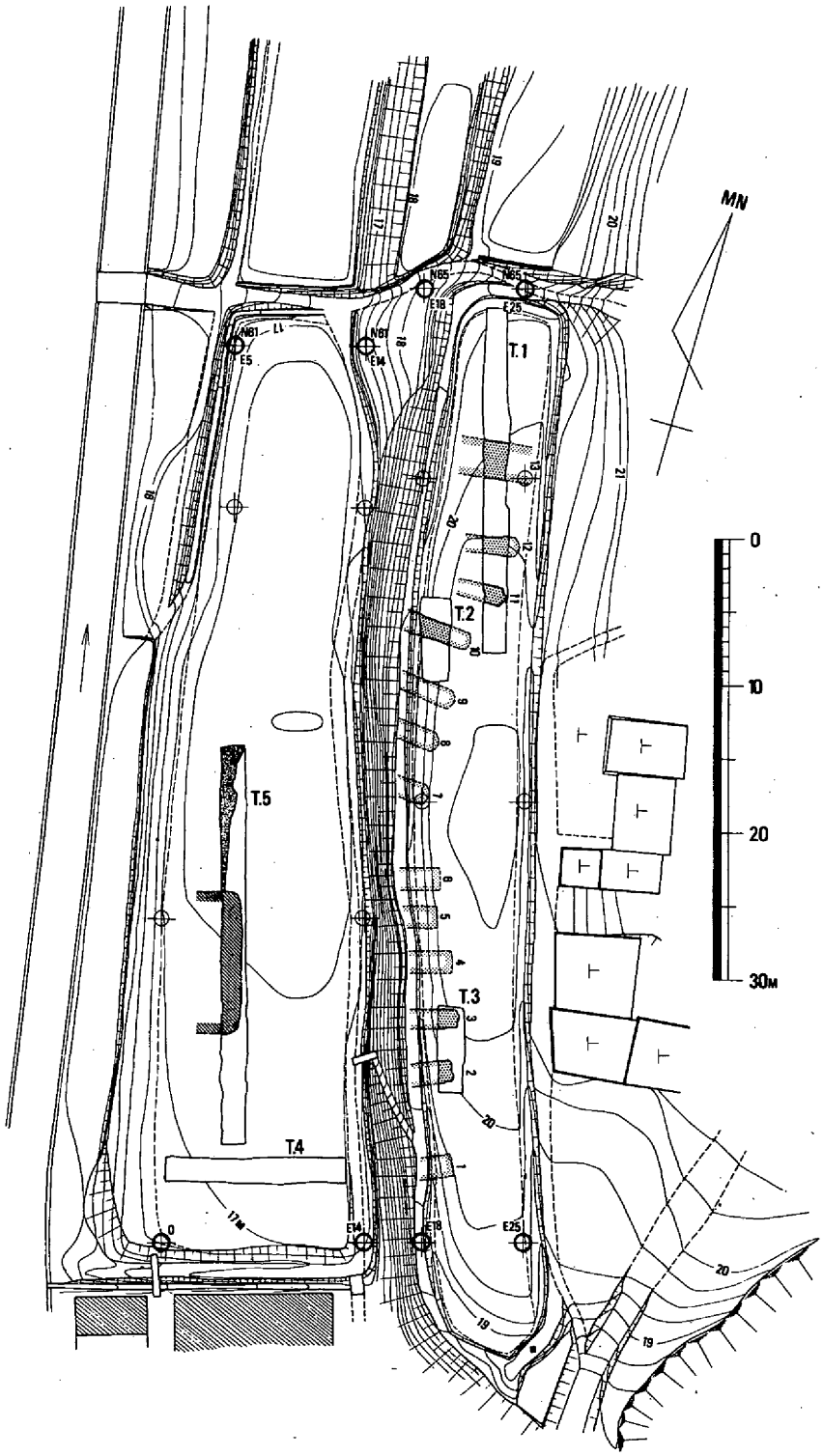
第27図　第５トレンチ実測図（S＝1/80）

した。検出部分下端で壁面に平瓦を立てているのが検出され、さらにその上に磚を壁面に貼付けて立てているのが認められた。瓦の内面と磚の内面は２cm程度食い違い、磚は壁側へわずかに倒れかかっている。瓦の上面は分焔牀の上面とほぼ内じ高さにあり、あるいはやはり足掛りとしての機能があるかもしれない。磚から上の側壁内面には瓦を認めなかった。壁面は粘土を貼ったような感じを与えず、かなり滑らかで、地山そのもののような印象であったが、詳細な観察を行えなかったので明確でない。分焔道の幅は15cmを測る。窯の主軸方位はＭＮ―81°―Ｅである。窯体内の埋没状況はかなり複雑で土層が幾層も認められた。第23図に示したとおりである。最下層の窯壁片には青灰色・白色のものが多いのに対し、それから炭層を隔てた窯壁片堆積層の窯壁は灰黄色・黄色を呈するものが多いことが注意されるが、分焔牀から90cm程上方にある瓦の堆積面は13号窯が人為的に埋められたことを示している。埋没作業の最後に不良瓦を投棄したものであろう。

第４トレンチと第５トレンチは下段の畑に設定した。これは主として灰原の発掘による遺物の採集を目的としたものであった。しかし下段の畑も桃畑になっていたためその耕作による攪乱を受け、なによりも下段の畑を造成する際の大規模な削平により上段の畑との境の崖面から西へ3.5m ぐらいまでは地山面まで削られ、遺構はすべて消失してしまっていた。崖面の中程より上で窯の断面が露出していたということから考えても当然予想される結果ではあったが。第４トレンチは不幸にも中央部を桃畑の暗渠が貫通していたためほとんど成果を上げることができなかった。

第５トレンチでは隅丸方形と推定される竪穴遺構が検出され注目される。まず層序について述べておく。第27図に第５トレンチ西壁の土層図を示している。１は最近のゴミ穴等の攪乱である。２は桃畑の耕作に伴う攪乱である。平面図にみられる直線状の溝は暗渠、弧状の溝は施肥用である。３は耕土、４も耕土と考えられる。５～11は古い時期の堆積であり、おそらく東大寺瓦窯と直接関係すると考えられる。９は灰原であり、第５トレンチの北端、Ｎ24から北の西半で認められた。断面観察では竪穴遺構は灰原を切っているとみられた。５の層と竪穴遺構との切合い関係、上下関係が問題である。５にはかなり遺物が包含されているからである。５の層の上面と竪穴遺構の上面とでは後者の方が高い。しかし両者が接触している部分を検出できず、地山上面の状況も明確でないため、現状では残念ながら不明と言わざるをえない。５の土はトレンチ南端の西半にあり、西の方ほど厚くなっているようである。

第５トレンチで確認された古い時期の遺構は円形ピット５基・溝状遺構・竪穴遺構である。円形ピットのうち径25cm程度の小形の２基は柱穴のようである。心々距離は3.6m である。溝状遺構には黒色土が充塡されている。竪穴遺構はトレンチの中央部分Ｎ14からＮ24の間、３号窯から６号窯の前面に位置する。一辺約10m の隅丸方形と推定している。壙壁は垂直には落ちず、かなり緩やかである。壙内は炭・焼土・粘土塊・窯壁片それに多量の瓦を含んだ黒色土で埋まっている。粘土の薄層や砂の薄層も認められる。周溝を壙壁に沿って巡らせるようである。竪穴遺構は検出したのみで壙内をほとんど掘っていない。また小部分の検出にすぎないためその性格をはっきりさせることは困難であるが、１つの考えとして工房址の可能性があるのではなかろうか。廃棄後、竪穴内に粘土塊・瓦等を投棄したことが考えられる。




第28図　万富東大寺瓦窯跡遺構位置図（S＝1/500）

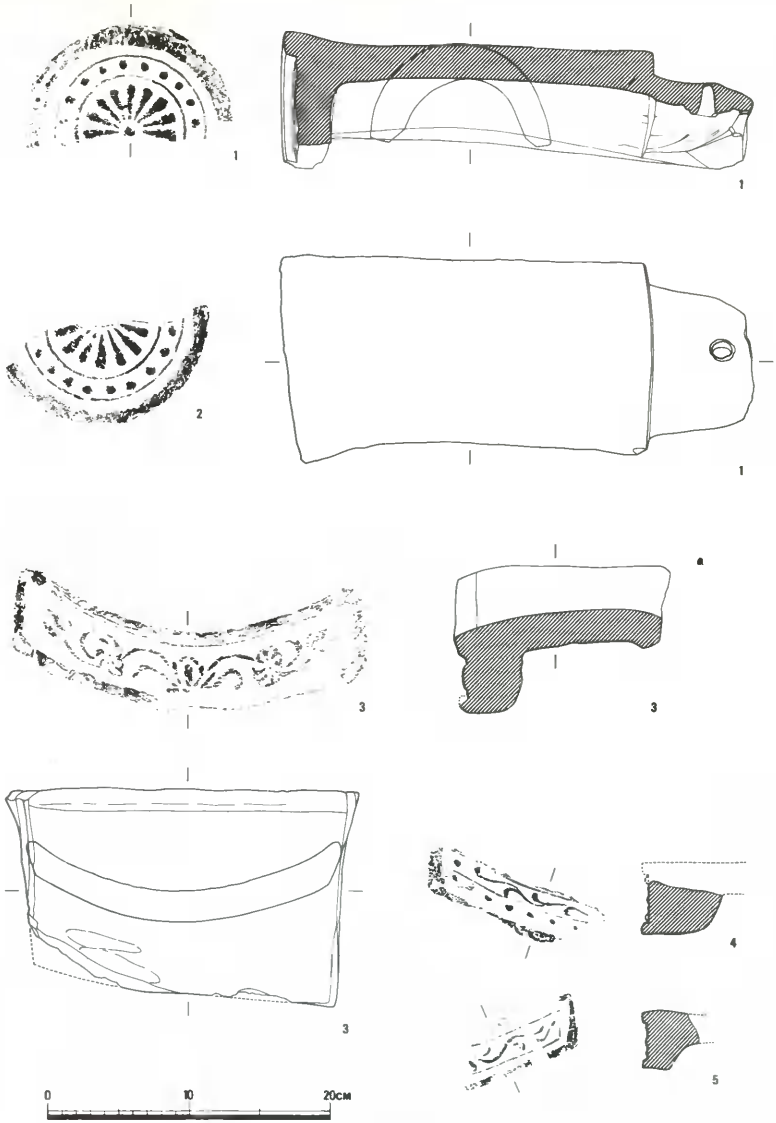
## 第3節　遺　　物

泉・万富東大寺両瓦窯跡の発掘調査で出土した遺物は当然のことながら大部分が瓦であり、泉瓦窯跡で整理箱30箱、万富東大寺瓦窯跡で50箱程度を数える。瓦以外に両瓦窯跡共にいくらかの土器片を出土しているが、瓦の数からすれば圧倒的に少ない。これらの遺物についての調査後の処理は洗浄・注記作業が終了しているのみで、それ以後の整理作業は種々の理由からほとんど進行していない。したがって、ここでは特に重要なもの、あるいは代表的なものを摘出して紹介することに主眼を置き、より詳細な検討・考察については後の機会を待ちたい。なお、万富東大寺瓦窯跡の調査では1片の軒瓦片も出土しなかったが、過去において遺跡周辺から採集された資料が個人あるいは瀬戸町教育委員会等で所蔵・保管されているため、この機会を利用して公表し、考察の参考に供したい。

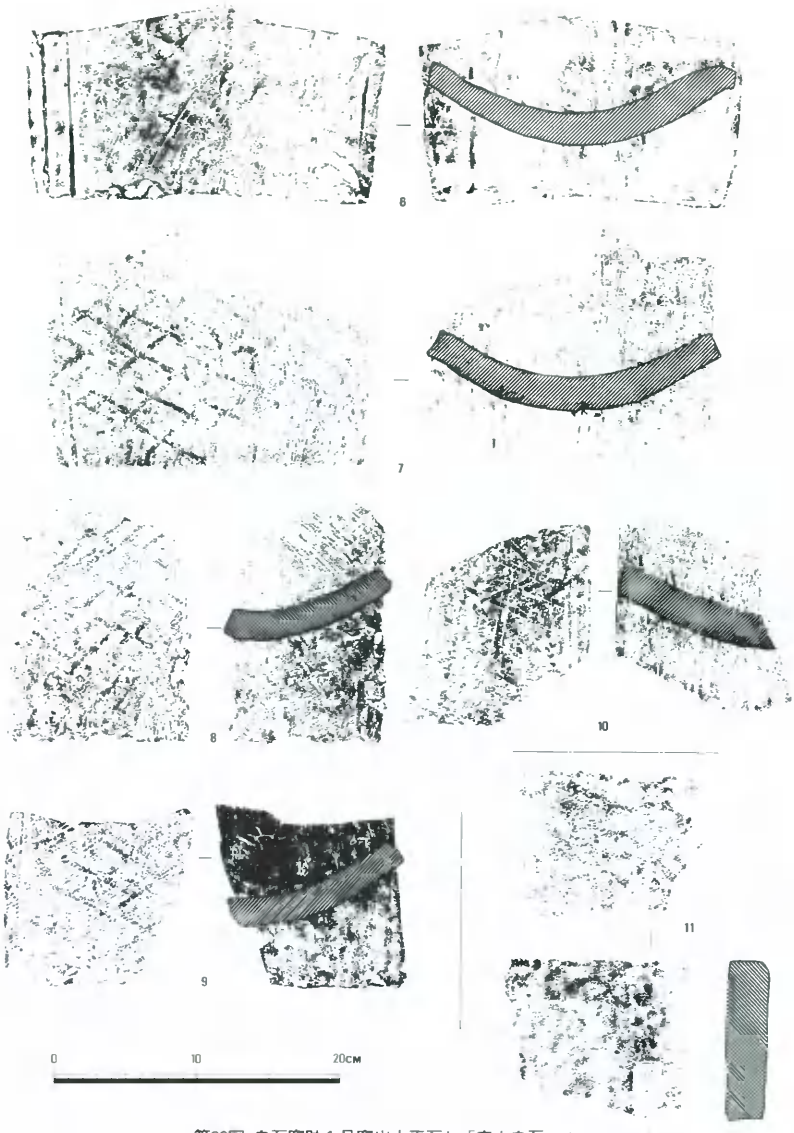
泉瓦窯跡では、発掘調査前の目賀・安東両氏の表採で須恵器・土師器がかなりみられたが、発掘調査では土器はほとんど出土していない。遺物は窯に至るまでの各土層から出土しているが、特に第1トレンチの1号窯北側の傾斜面に堆積した暗灰赤褐色土中からは生焼けの瓦を含め多量の出土をみた。2号窯の掘下げでは遺物の出土をみなかったが、1号窯の床面ないしは分焔道に瓦が残存していて、泉瓦窯跡で焼成した瓦を知ることができた。今回の報告ではこの窯体内出土瓦について述べることとする。第29図・第30図に実測図を示しているが、発掘調査のきっかけとなった「東大寺瓦」も図示しておく。

第29図1の軒丸瓦は第5トレンチから出土したものであるが、同じものが1号窯内から出土し(第29図2)、また第1トレンチの暗灰赤褐色土層をはじめ、周辺からもかなりの出土があり、泉瓦窯跡で焼成されたものである。瓦当面は面径145mmを測り、文様は菊花文で、内区に16弁菊花文、外区は二重の圏線の中に連珠文を配す。花弁は均等に割付けられている。全長330mm、玉縁長70mm、幅は図の断面部分で128mmを測る。玉縁には外面からの穿孔がある。外面は瓦当部から玉縁へ向けて縦方向の篦削りを行った後、図の右半分はナデて調整している。玉縁部はヨコナデを施す。内面は布目を残している。下端は篦削りで面を整え、内側は面取りしている。玉縁部の先端は篦削りで端面を作り、内面先端も篦削りしている。胎土には石粒・砂粒がかなり含まれているが、内表面に多く浮出ている。焼成はきわめて良好で堅緻に焼上がっている。色調は須恵器特有の淡青灰色を呈している。なお、1号窯内から出土したものは生焼けで、色調は淡灰茶色を呈する。

第29図3の軒平瓦は第5トレンチの焼土直上から出土したものである。出土位置は第14図の右端である。図示したものはほぼ完形で、端が斜めに切られている。降棟の先端に近く使用されるものであろう。この軒平瓦は窯体内からは出土していないが、前述の軒丸瓦と同様に第1トレンチの暗灰赤褐色土層、第6トレンチの暗灰赤褐色土層からかなりの点数が出土していることと、第5トレンチでの出土状態から考えて泉瓦窯跡で焼成されたものと考えてよい。瓦当面は上弦幅239mm、下弦幅243mm、厚さ48mm、外区の厚さ10mmをそれぞれ測る。内区文様は均整蓮華唐草文である。中央に側面からみた蓮華を文様化して置き、左右ほぼ均整に唐草を二転させ、一転目の先端に花文、二転目の先端に蕾状の花文を置く。外区は素文縁である。顎は段顎である。顎の先端はオサエによって丸味をもっている。




第29図 泉瓦窯跡出土軒瓦 (S=1/4)




第30図 泉瓦窯跡1号窯出土平瓦と「東大寺瓦」(S=1/4)

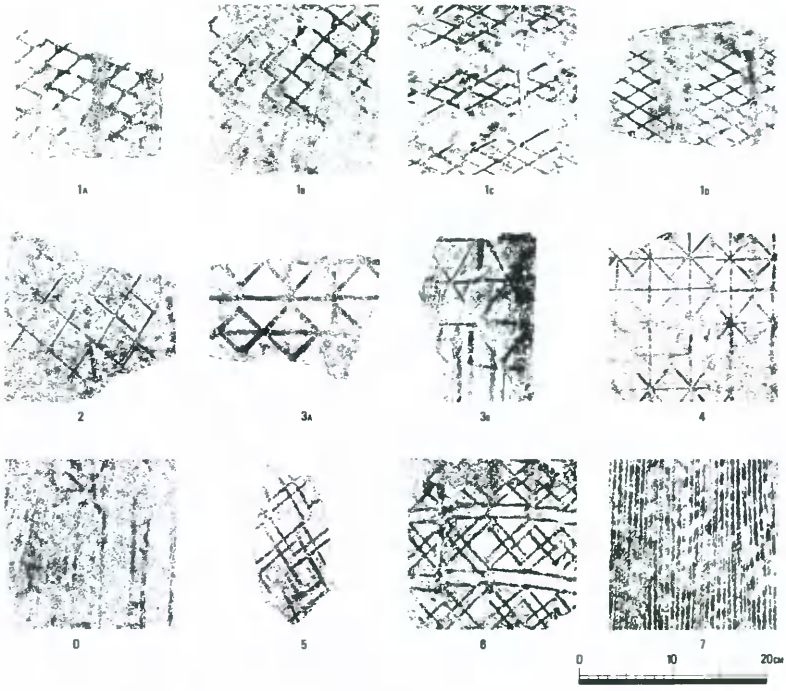
凹面先端に瓦当面の貼付痕跡がみられ、瓦当面の厚さは15㎜程度である。平瓦部凹面は若干布目を残しているが、大部分は縦方向のナデによって調整され、布目は消されている。瓦当面側先端は軽い箆削りを行う。凸面は板状工具によるとみられる削り調整を縦方向に施している。かなり荒い調整である。顎の部分はヨコナデ調整を行う。全体に調整が荒くかなり凹凸を残している。側面は顎まで含めて箆削りで整え、面取りをしている。斜めに切られた端面は板状工具によって整えている。胎土には石粒・砂粒を含み、焼成は良だがやや甘い焼上がりである。色調は凹面が淡灰黄色を呈する他は淡灰色である。

第29図４・５は上記２種の軒瓦の他に調査で出土した軒瓦である。４は第１トレンチの暗灰赤褐色土層から出土した。内区文様は唐草文であり、上下両側に突線を狭んで連珠文を配するものとみられる。側端では両突線が外縁に突当り、その間に珠文を１つ置いている。外縁は素文で厚さは８㎜程度である。顎は段顎でかなり厚い。端部は丸く整えられている。胎土には石粒・砂粒を若干含む。焼成は不良で、淡灰褐色を呈する。貼付面で剝落したものとみられる。５は第５トレンチから出土した。内区文様は唐草文であり、文様全体を突線で囲んでいる。外縁は素文で厚さは５㎜内外である。顎は段顎であるが、平瓦部と顎の接合部分はかなり丸味をもち、明瞭な線を持たない。顎は４と比べるとかなり角張っている。凹面の瓦当部上端は箆削りを行うが、他の部分はほとんどナデて調整している。凹面は横にナデている。胎土には石粒・砂粒を含むが全体に緻密である。焼成は良好で堅緻に焼上がっている。色調は黒紫色～暗灰色を呈する。４と５はそれぞれ１点のみの出土であり、泉瓦窯跡との直接の関係はないものと思われる。

第30図は１号窯内から出土した平瓦である。ただし11は表採された「東大寺瓦」である。以下、それぞれについて若干の説明を加える。６はほぼ半分の残存である。図の下端幅で205㎜を測る。凹面・凸面共に板状工具によって調整され、凹面の布目、凸面の叩目共に消されている。凸面にはカキ目状の擦痕を残している。端面は箆削りで調整されるが、面取りは一側面のみである。凸面の両側近くに隆起の一定しない突線が認められる。胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好で、灰赤褐色の色調を呈する。７もほぼ半分の残存である。下端幅で203㎜を測る。凹面は板状工具による削りの後ナデて調整している。凸面は大部分斜格子の叩目文を残しているが、側端の一部には板状工具による削りを施している。端面は箆削りで整えるが面取りはみられない。凸面の両側にやはり突線がある。胎土には石粒・砂粒を含む。焼成は良好で淡灰赤紫色を呈する。凸面表に砂粒が多く付着している。８の凹面には一部布目を認めるが全体に板状工具による削り調整を行っている。凸面は斜格子の叩目文で、顕著な削りの痕跡は認められない。端面は箆削りである。側端面の凸面側でははみ出した粘土を端面へナデ付けている。これは７についても一部認められたことである。凸面で側端に沿ってやはりかすかな突線がある。凸面表には砂粒が多く浮いている。胎土には石粒・砂粒を含み、焼成はやや不良で、淡灰茶色・灰赤紫色に発色している。９の凹面は丁寧に調整され平滑にされている。板状工具による削りの後、ナデによって調整している。凸面はカキ目状の擦痕を残し、板状工具による削りを行っているが、斜格子の叩目文は残存している。凸面表には砂粒が多量に付着している。端面は箆削りされている。胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は凹面が青紫色、凸面が淡灰赤紫色である。10

の凹面は板状工具による削りの後、ナデによって調整されている。凸面は斜格子の叩目文を残しているが、ごく部分的に板状工具によるとみられる削り痕が認められる。端面は篦削りによって調整されている。側面の凹面側には面取りがなされている。凸面の側端に沿う突線は明瞭である。凹面・凸面いずれも表面には多量に砂粒が付着している。胎土には石粒・砂粒を含む。焼成は良好で、色調は淡灰赤紫色である。

泉瓦窯跡1号窯から出土した平瓦の個々について説明を加えてきたが、それらに共通する要素を取り上げれば、泉瓦窯跡で焼成された平瓦の特色が浮かび上がってくる。まず製作技法上から言えば叩き締めた後に凹凸両面を板状工具によって削って調整するという工程がある。これによって凹面の布目は消され、また凸面の叩目文も完全ではないが消され、中には6のように消滅するものもある。凹面はさらにナデ調整され、布目は完全に消え、9のように平滑にされる。端部は篦削りによって成形されるが、あまり面取りは熱心でない。もう1つの特色に凸面、たまには凹面にも表面に多量の砂粒が付着していることがある。これはおそらく叩締めに際して、叩板が粘土から離れやすくするために、




第31図 万富東大寺瓦窯跡出土平瓦叩目文様分類図 (S=1/6)

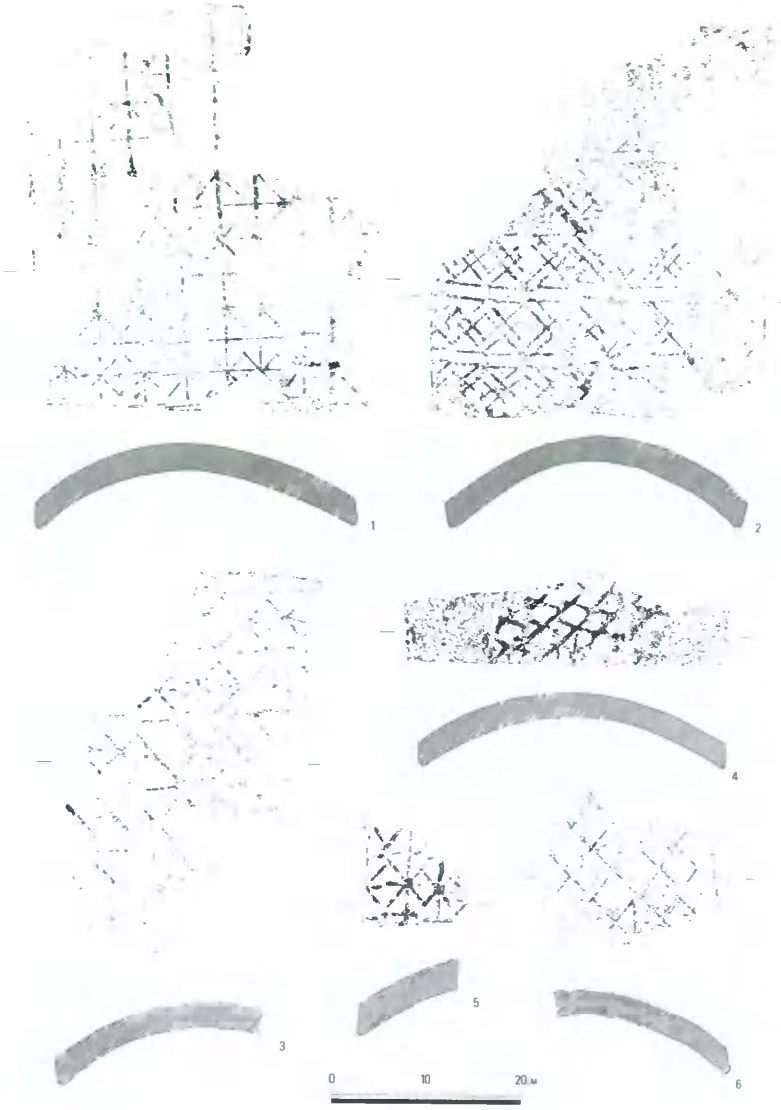
瓦の凸面に撤かれたものではないかと考えられる。なお、叩目文は斜格子の単純なものである。これらの特徴の他に表面的なこととして、瓦の大きさが最小幅205mm程度、厚さ20～25mmということと、凸面の両側端部に近く突線をもつことがある。突線はおそらく製作過程から必然的に生じるものではないかとみられるが、どのようにして生じるか不明である。焼成はいずれも良好で堅く焼け締まり、灰赤紫色を呈する。以上のようなことを泉瓦窯跡焼成平瓦の特徴とすることができる。ただ色調については第29図1のように青灰色を呈するものもかなりあることは注意しなければならない。丸瓦については詳細な検討を行なっていないため、今後に委ねたい。

第30図11は今回の発掘調査の契機となった泉瓦窯跡周辺から表面採集された「東大寺瓦」である。凹面に刻印の一部があり、頭の字はかすかであるが「東」と読めそうである。また凸面にはこれまたかすかに叩目文が確認され、その文様は後述する万富東大寺瓦窯跡出土瓦叩目文様の3A型とみられる。刻印の大きさは「東大寺瓦」のそれであり、叩目文様も「東大寺瓦」特有のものであることから、この瓦は「東大寺瓦」と考えられる。この瓦片はかなり風化が激しい。胎土には石粒・砂粒を多く含み、焼成はやや甘い。色調は凹面灰黒色、凸面淡灰茶色を呈する。

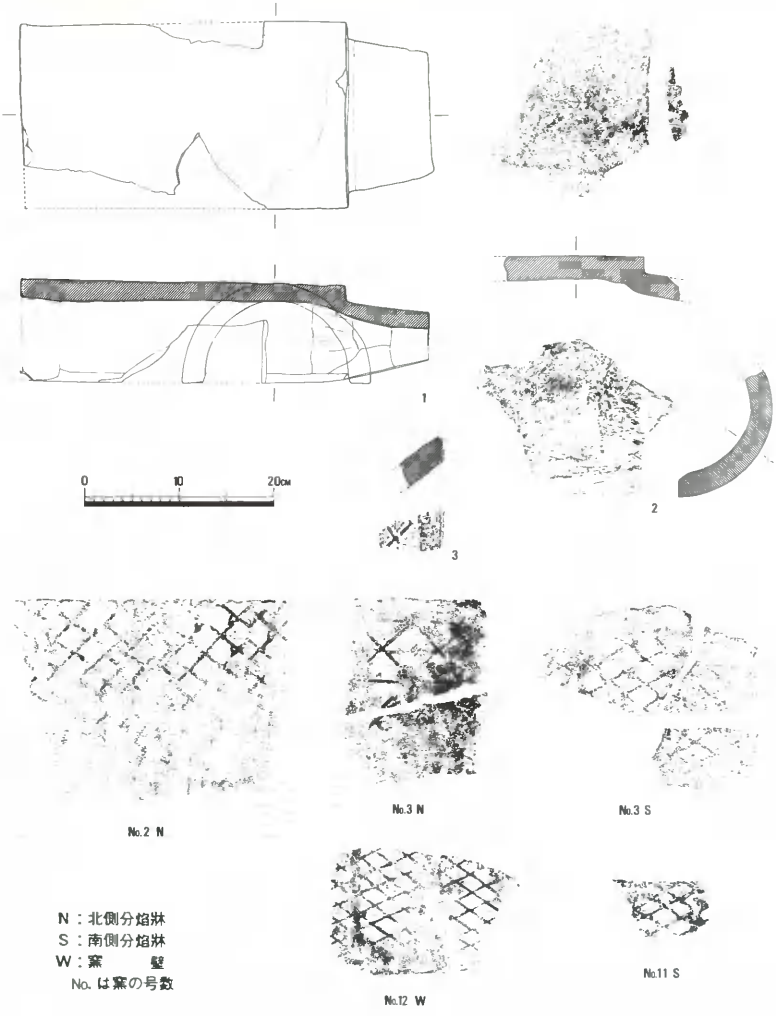
万富東大寺瓦窯跡の調査でも50箱にのぼる多量の瓦が出土したが、前述のとおり詳細な検討は今後の課題として残されている。ここでは若干の資料紹介と全体的な概括を述べるに止める。

万富東大寺瓦窯跡出土のいわゆる「東大寺瓦」はその叩目文様の華やかさでよく知られている。今回出土したものと、過去に知られていたものを集成してその叩目文様を分類すると第31図のようにほぼ7型に分かれるようである。そのうち、それぞれの型の中でも細かな変化がみられ、さらに細分することが可能である。本来表には出ない部分にこのような叩目文様を施すことの意味については充分な考慮が払われねばならない。叩目文様について少し説明を加える。1型は斜格子文である。格子目の細粗および交差角度によって細分した。2型も斜格子文であるが、格子が大きく、線は1型より細い。斜格子というよりも菱形文とでもいうべきものである。3型は菱形文に横線を交点で交差させたものである。AとBの相違は菱形の内角および線の太さの違いによる。4型は3型にさらに縦線を交点で交差させたものである。4をみると菱形の幅が叩板の幅になっているのがわかる。5型は1型ないしは2型を複線にしたものであり、6型は3型を複線にしたものととれる。やはり菱形の幅が叩板の幅になっている。7型は縄目文である。0型は叩目文様ではなく、叩目文様を板状工具で削り消したものである。このように、0型と7型を除けば、1型から6型までは文様に関連性があり、1つの変化の流れがあるように感じられるのである。

次に今回の調査で出土した瓦を数片取上げて紹介しておく。第32図の1～3は半完形の大形破片であるが、4～6は文様によって任意に摘出した。1は叩目文様4型のほぼ完形に近いものである。10号窯埋土中から出土した。叩きは図の左から右へなされ、上下には3回に分けて施されるようである。図の下端幅は約330mmを測り、長さは435mmである。厚さは28mm程度である。凸面には叩目をそのまま残しているが、凹面は板状工具による削りあるいはナデによりかなり布目を消している。端面は篦削りで成形した後ナデで調整している。図の下端凹面側のみ面取りしている。凹面側端は削りとナデで調整し、丸味を持たせている。胎土には石粒・砂粒を多量に含む。焼成は不良で淡黄褐色を呈する。

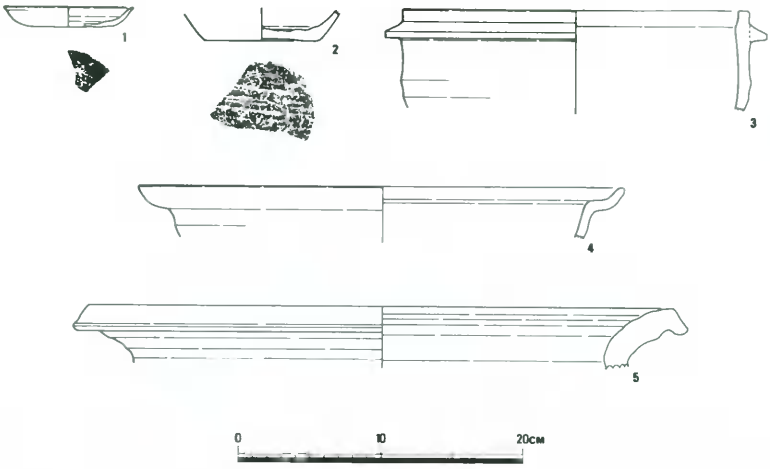



第32図 万富東大寺瓦窯跡出土平瓦 (S=1/6)




第33図 万富東大寺瓦窯跡出土瓦及び窯体使用平瓦拓影 (S=1/6)

残存部分の凹面には「東大寺」の刻印をみない。2は3号窯の分焰牀の上に付着して出土した。6型の叩目文様をもつ。叩きの順序は1と同様である。全体の製作手法は1とほぼ同じである。内面にはかなり布目が残っている。凸面の表面に多量に砂粒が付着していて注意される。胎土には石粒・砂粒




第34図 万富東大寺瓦窯跡出土土器 (S＝1/4)

を多量に含んでいる。焼成は不良で、色調は灰黒色から暗灰色である。厚さは30mmである。3は2号窯の桃畑用暗渠から出土した。全長410mm、厚さは25mmを測り、前二者よりは若干小ぶりである。凸面は3A型の叩目文様である。叩きの順序は1・2と同様である。内面はやはり板状工具によって調整されている。端面の手法もやはり1・2と同じであるが、やや丸味に欠ける。図の上端内面を狭い幅で面取りしている。1・2と上下が逆になっている。胎土には砂粒を多く含む。凸面に砂粒が多く浮出している。焼成は良だがやや甘く、大部分淡灰褐色を呈している。4はやはり2号窯内暗渠出土である。1A型の叩目文様をもつ。凸面には砂粒が多量に付着している。凹面・端面の製作手法は前三者と同一である。図の下端凹面側を面取りする。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好、淡灰色～灰色を呈する。下端幅320mm、厚さ25mm程度である。5は4型の叩目文様である。製作手法はやはり同一である。胎土には砂粒をかなり含む。焼成良好で、青灰色である。厚さは30mmと厚い。6は2号窯内暗渠出土で2型の叩目文様をもつ。製作手法はこれまた同じである。凸面に多量の砂粒が付着している。胎土には砂粒が多量に含まれている。焼成は良好で、凹面灰黒色、凸面灰白色を呈する。以上6点について述べてきたが、製作手法はいずれも同一であった。すなわち、凸面は叩目文様を残し、凹面は板状工具、後にナデで平滑に調整する。端面はヘラ削りで成形して、後でナデで調整する。側面の凹面側はヘラ削りとナデで調整して丸く整える。短い方の端面の凹面側は面取りをするというものである。凸面に砂粒が多量に付着しているものが二、三あったが、これは泉瓦窯跡1号窯内出土平瓦と同様、叩板が粘土に密着しないように凸面に故意に撒いたものであろう。なお、6例だけで判断するのは少し問題があるが、瓦の大きさには大小2つのサイズがあるようである。

完形に近い丸瓦が出土している。第33図1は全長430mm、玉縁長88mm、断面部分幅199mmを測る。下

端面・両端面は篦削りで成形する。両端内面は幅広く篦削りを施し、下端内面側も面取りする。外面は縦方向に板状工具で調整し、玉縁側3分の1はさらに横方向にナデて平滑にする。玉縁部分も横にナデて調整している。内面は若干のナデがみられるが、ほとんど未調整で布目を残している。全体にきわめて丁寧なつくりである。

「東大寺」刻印の押印例で珍しい例があったので紹介しておく。「東大寺」の刻印は普通平瓦の凹面中央に1個押される例が多いが、中に2個・3個押印する例がいくつか知られている。ところが第33図で示したものはさらに希有な例である。2は丸瓦の内面に押印したもので、管見に触れた範囲ではこれ1例である。瀬戸町教育委員会が保管している。3は平瓦の側端面に押印した例である。今回の調査で出土したものである。この2つは現在のところ類例がないただ1つの例である。

第33図の下半に窯体に使用されている瓦の拓影を示した。5例中4例までが叩目文様1型であることは注意してよい。3号窯南分焔牀に使用された瓦の叩目文様は3A型である。3号窯で焼かれた瓦の叩目文様は6型と考えられるので、そうすれば、1型・3型の叩目文様は6型より開始が古いということも考えられる。

万富東大寺瓦窯跡でもいくらか土器片が出土した。とくに第4・第5トレンチの黒色土中にはかなりの土器の包含がみられ、また竪穴遺構中からも土器の出土をみた。第34図にわずか5点にすぎないが一応図示しておく。1は竪穴埋土から出土した。土師器小皿である。底部は回転篦切りである。口縁部はヨコナデするが荒い仕上げである。胎土には砂粒を含む。焼成は良好である。色調は白色を呈する。2～4は第5トレンチ南端の黒色土出土である。2の土師器皿の底部は回転篦切りの痕跡を残し、板目状の圧痕をもつ。胎土には砂粒を含む。焼成は良好で色調は淡灰褐色を呈する。3は瓦質の羽釜である。明瞭な口縁端面をもち、口縁部は直立する。鍔は薄いが端面をもつ。口縁部はヨコナデ。内面はナデて丁寧に調整されている。胴部外面はやや荒い仕上げである。胎土には砂粒を多量に含んでいる。焼成は良好で堅緻である。外面は黒色、内面は灰色を呈する。4は土師器の鍋である。小破片のため口径は確実でない。口縁部は外反した後、内湾する。口縁部先端は丸くおさめる。ヨコナデ

第3表　万富東大寺瓦窯跡遺構別出土平瓦叩目文様分類表

(○印は刻印瓦出土)

| 型＼遺構 | 2号窯埋土 | 2号窯内暗渠 | 3号窯窯体着 | 10号窯埋土 | 11号窯埋土 | 12号窯埋土 | 13号窯埋土 | 13号窯窯体着 | 竪穴埋土 | 灰原 | 上の山 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1A | 3 | 22 | ○ 2 | 1 | 2 | 1 | 5 | 2 | 6 | 6 | 4 | 54 |
| 1B | 1 | ○ 23 | 3 | | | | | | | 9 | ○ 1 | 37 |
| 1C | | | | | | | | | | | | |
| 1D | | 1 | | | | | | | | 10 | | 11 |
| 2 | 1 | 6 | | | 1 | | **20** | 3 | | | | 31 |
| 3A | | | 1 | | | | **33** | ○ 2 | 2 | | | 38 |
| 3B | | 1 | | | | | | | | | | 1 |
| 4 | | | | **9** | **7** | **2** | 1 | | | 2 | | 21 |
| 5 | | | | | | | | | | | **10** | 10 |
| 6 | | ○ **37** | **14** | | | | 2 | 1 | | | 1 | 55 |
| 7 | | 5 | 3 | 1 | 1 | | 2 | | 4 | 2 | 1 | 19 |
| 0 | 5 | 35 | ○ 1 | 3 | 4 | | 13 | **11** | | 10 | ○ 2 | 84 |
| 不明 | 2 | 23 | ○ 4 | 3 | 6 | 1 | 13 | 7 | 3 | 3 | 4 | 69 |
| 丸瓦 | | 4 | | 1 | 1 | 1 | 6 | 2 | | 1 | 6 | 22 |
| 計 | 12 | 157 | 28 | 18 | 22 | 5 | 95 | 28 | 15 | 43 | 29 | 452 |

調整とみられる。胎土には砂量を多量に含む。焼成は良好で、色調は淡褐色である。5は須恵器の甕である。頸部は強く外反し、口縁端部は折り、広い面をつくる。若干外へつまみ出し気味になっている。小破片のため口径は正確でない。胎土には砂粒を少し含む。焼成は良好で、色調は暗灰色を呈する。

万富東大寺瓦窯跡出土平瓦の叩目文様の多様さについては充分な考慮が払われねばならないと述べたが、このことに関して、各遺構と叩目文様との関係について少し考えてみたい。第3表は各遺構ごとについて、それぞれの叩目文様の瓦が何片出土したかを表にしたものである。この表をみてわかることは、各遺構からほぼもれなく出土する文様と特定の遺構からしか出土しない文様とがあるということである。前者は1型と7型であり後者は2～6型である。1型は第33図下半でみるように、各窯の分焙牀に使用されるのが一般的なようであり、各窯から出土する1型の瓦片はかなりが分焙牀使用瓦の破片である可能性が強い。1型と7型は瓦の叩目文としてはもっとも普遍的なものであり、もしそれぞれの叩目文様の間に使用時期の相違があるとすれば、分焙牀に使用されていることからも、1型が最初に使用されたと考えるのが妥当であろう。そうした場合、竪穴遺構の埋土から出土した文様が1型6片、3型2片、7型4片であることから、7型も1型と同様に万富瓦窯跡操業初期に焼かれたことが考えられる。なお3型も3号窯の分焙牀に使用されている。7型の遺構からの出土をみると、やはりかなり均等に出土している。7型も分焙牀に使用された可能性が強いと考える。また、0型は万富東大寺瓦窯跡出土平瓦にかなり普遍的にみられる製作手法であり、本来の性格からすれば、この表からは除外すべきものである。このようなことから、第3表の1型と7型と0型の欄を空白にして考えると、それぞれの窯で焼かれた瓦の叩目文様がほぼ1型式に絞られてくる。つまり、1つの窯で焼成された瓦の叩目文様は1種類ではなかったかと考えられるのである。2号窯と3号窯は6型、10号窯～12号窯は4型、上の山窯は5型と考える。なお、上の山窯は第15図に二重丸で示した新発見の東大寺瓦窯跡である。13号窯については埋土出土のものは窯の廃絶後の投棄によるとみられるため2型と3型の2型式を同時に焼いていたとすることは言えない。窯体付着の瓦も同じ傾向を示すが現段階では断定は控えたい。

瓦の叩目文様から派生する問題がもう2点ある。それは竪穴遺構と灰原との時間関係と、同じく竪穴遺構と前面にある2号～6号までの窯跡との時間関係であるが、これについては第5章で述べることとする。

「東大寺瓦」の大きな特徴の1つに刻印がある。刻印は縦50mm、横20mmの隅丸長方形で、外郭突線を一重巡らせて、その中に「東大寺」の銘を陽刻で置く。第35図に「東大寺」刻印を集成した。Mは瀬戸町万富で出土したことが確実なもの。Sは瀬戸町教育委員会が保管しているもの。Kは岡山市一宮字山神、吉備津宮常行堂跡地出土で黒住秀雄氏所蔵品、Hは岡山県立博物館蔵品である。なおKの番号は第41図の番号と同じである。左に凹面刻印、右に凸面叩目文様を示している。記号の最初の数字は叩目文様の型式を表わす。No.の数字は窯の号数である。すなわち2－1（M11）No.11ならば叩目文様は2型、瀬戸町万富東大寺瓦窯跡11号窯出土ということである。なお、No.0は上の山窯跡を示す。いちおう叩目文様の型式ごとにまとめ、さらに、上を行書風書体、下を楷書風書体としたが、かならずしも厳密ではなく、筆者の主観がかなり混入している。まず一見して気付くことは刻印が当初予想し

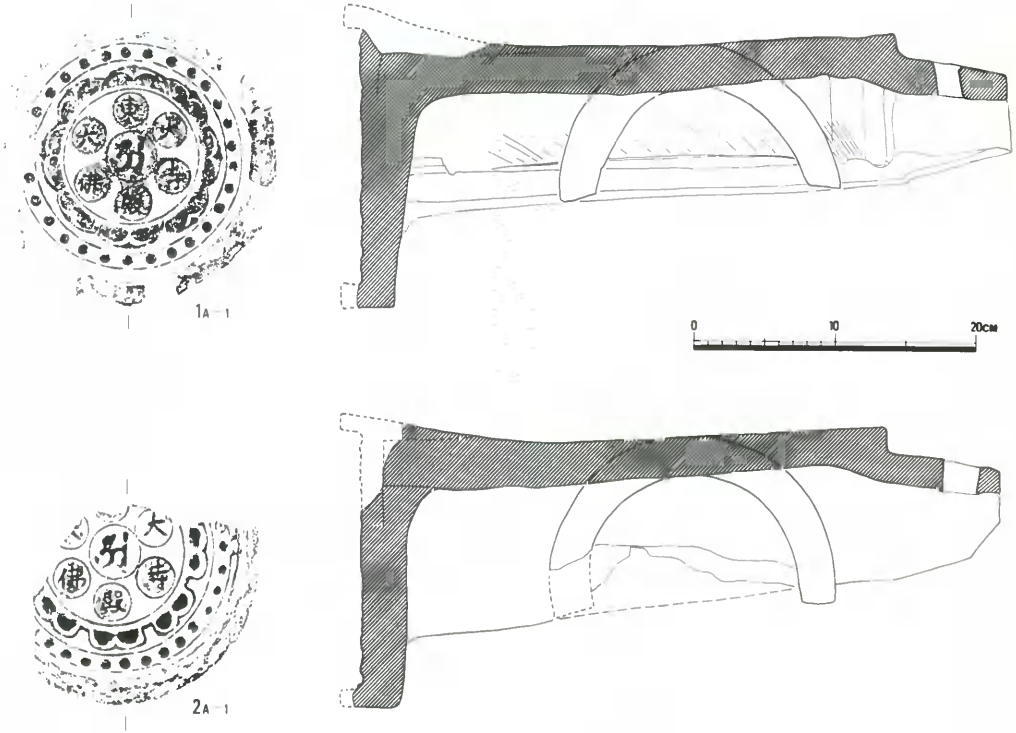
第35図 「東大寺」刻印集成図 (S＝1/4)

ていたように数種類のものではなく、実に多種多彩であるということである。詳細な比較検討はしていないが、37個を図示している内、ほぼ同一と言えそうなものは1－1と1－2、7－1と7－2と0－2、3－4と3－5、4－3と0－3程度のようであり、刻印すべてを集成すれば数10種類に上るであろう。刻印の同一を検討する際に、叩目文様の同一を1つの目安としたが、今後詳細な比較検討を行い、同一刻印でも叩目文様の相違するものがあるかどうかということがこれからの考察にあたって重要な資料となろう。上述した事実からすれば、同一叩目文様の瓦には同一の刻印を使用している可能性が考えられそうである。ただし、1－1と1－2は厳密には叩目原体は異なっている。しかし、1－1と1－2がもし間違いなく同一刻印であるとすれば、岡山市一宮出土の「東大寺瓦」は瀬戸町万富で焼かれて運ばれたものであることが確実となる。今後の検討を期したい。なお、拓本の比較では同一であった。

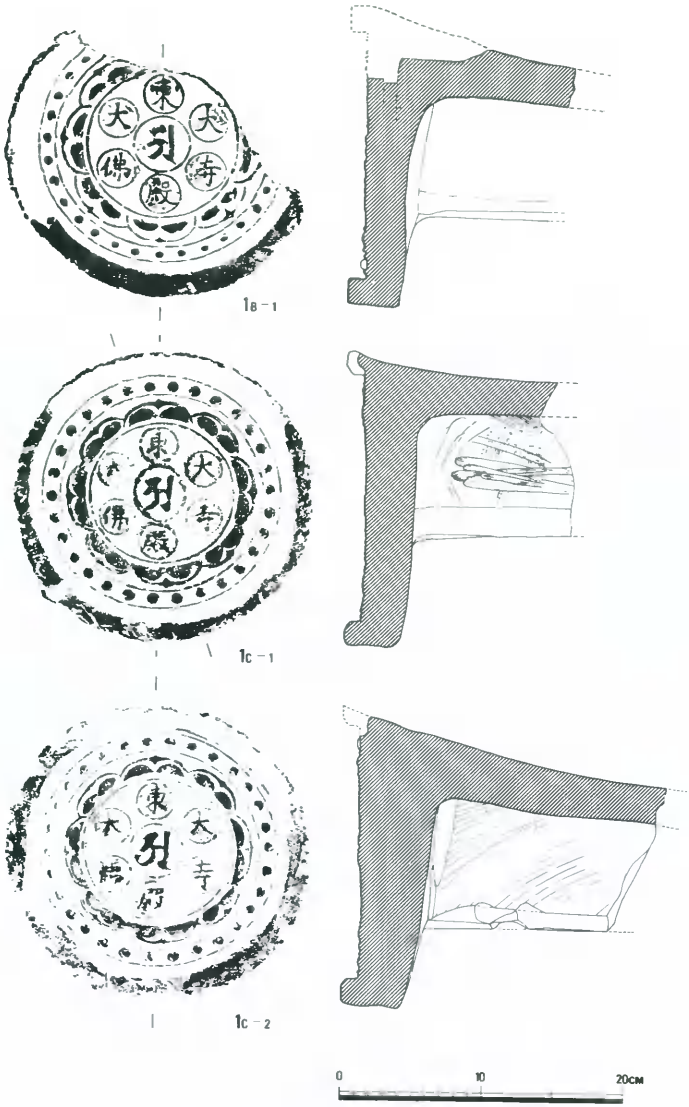
万富で焼かれた「東大寺瓦」が本拠の東大寺でどう使用されたかを少しみてみたい。東大寺鐘楼の修理工事が実施されて報告書が昭和42年に刊行されていて、そこに「東大寺」刻印の図が掲載されている(註1)。鐘楼に使用されていた平瓦の叩目文様は3・4・5・6型である。6種類の刻印が図示されているので、第35図で同一とみられるものを捜してみたい。修理報告書第8図⑪は0－5と、同図⑬は1－1・1－2と、同図⑭は3－3と、拓本を比較した上では同一と考えられる。この事実に誤まりがなければ、万富東大寺瓦窯跡で焼成された瓦は東大寺鐘楼に使用されていることが確実となる。かねてから言われているように、万富で焼かれた瓦は単に大仏殿のみに使用されたのではなく、他の東大寺の諸伽藍にも使用されたことになる。必要とした瓦の枚数は莫大な数になったであろう。一説には30万枚、あるいは50万枚とも言われる。

今回の発掘調査では軒瓦は1片も出土しなかった。まるで軒瓦のみ別の窯で焼成したのではないかと思わせるようであった。万富東大寺瓦窯跡で焼成された軒瓦はかなりの数が個人ないしは博物館、教育委員会によって保有されている。今回の報告書作成を機会に、それらのうちの何点かを実測し、公表しておきたい。

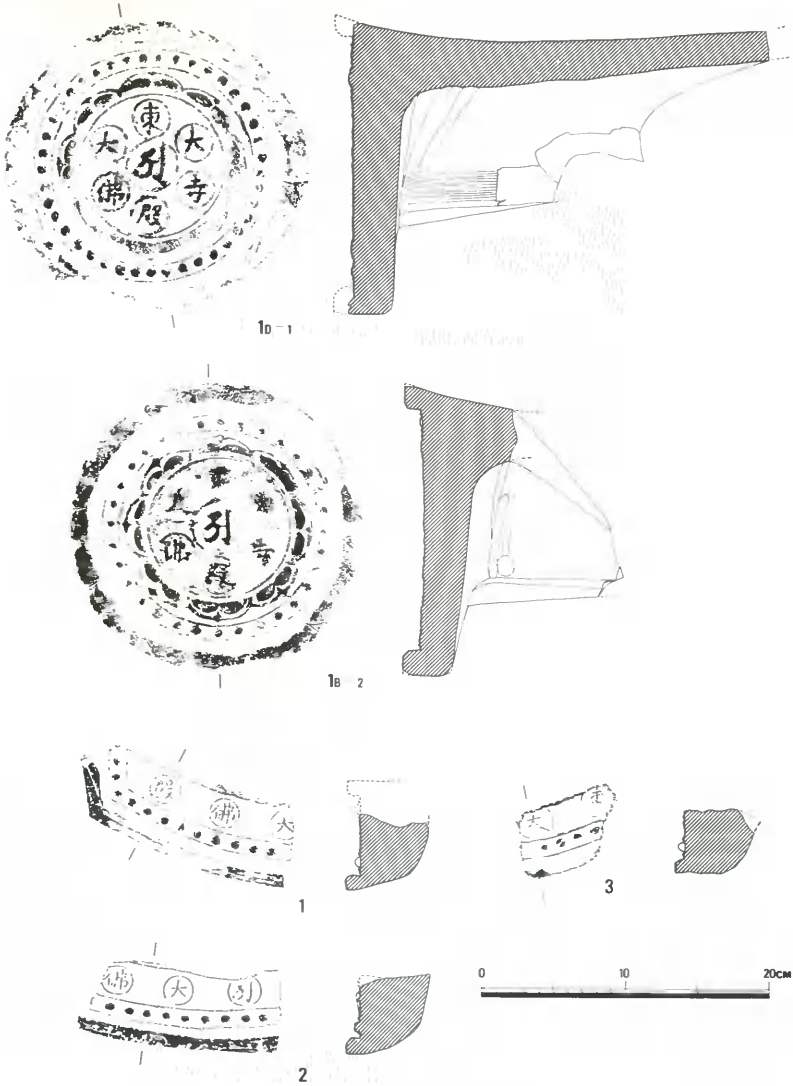
軒丸瓦は瓦当面径210mm、全長460mm、玉縁長80mm前後の規模である。瓦当面の文様構成は、内区中心に大日如来を表す梵字を入れた円環を置き、その周囲を6等分して「東大寺大佛殿」の銘文を1文字ずつ円環に入れて配す。これらを中房とするかのように圏線を一重させ、その外に8花弁を繞らせる。この花弁の形状の相違から軒丸瓦の瓦当文様を2類に大別することができる。いずれも複弁であるが、1類は花弁端が尖がり、隣する花弁が重なり合っている。2類は花弁端が反り返った形で凹み、隣の花弁とは接触しない。その外には二重の圏線を繞らせ、その間に連珠文を置く、外縁は突出した素文縁となる。製作手法は丸瓦部においては第33図1の丸瓦と同じであり、外面は箆あるいは板状工具によって縦に削り、その後ナデで調整している。玉縁部分は横方向にナデる。内面は布目を大部分残し未調整であるが、なかにはカキ目状の痕跡がみられて板状工具による調整を思わせるものがあり、また縦方向にナデて布目を消しているものもある。瓦当部の成形であるが、瓦当円盤の上端より少し下に丸瓦部の端面を押付け、その外面と内面の両面に粘土を付加し接合する。内面に付加する粘土はかなり厚い。瓦当裏面のかなりの部分が付加された粘土によって上塗りされ厚みを増す。内面の接合



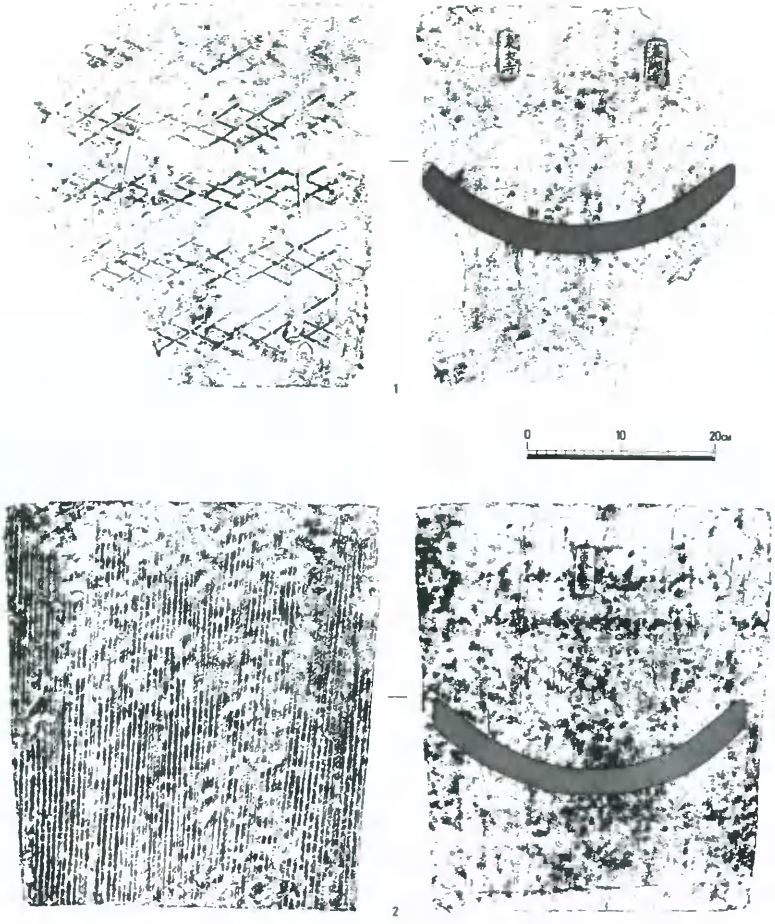

第36図 「東大寺大佛殿」銘軒丸瓦 (S＝1/4)




第37図 「東大寺大佛殿」銘軒丸瓦 (S＝1/4)




第38図 「東大寺大佛殿」銘軒瓦 (S＝1/4)




第39図 「東大寺」刻印平瓦 (S=1/6)

部分には強いナデが認められる。瓦当裏面はナデあるいは板状工具により調整される。玉縁部には1孔がある。外面から内面へ向けて穿孔されている。孔径は15～25mmである。再度瓦当面の文様を注目すると、1類・2類それぞれの中でも書体や珠文の数に違いがあることがわかる。収集した資料中では、1類には4種、2類には2種の変異が認められる。第4表に収集した軒丸瓦の計測値一覧表を掲載しておく。弁型の欄のAは弁端が尖るもの、Bは弁端が凹むものである。紙数の都合で個々の詳細

な説明は省略する。

軒平瓦は軒丸瓦と較べれば出土点数がかなり少ない。今回の報告にあたっては３点を収集することができたにすぎない。いずれも破片である。出土地は３点とも万富である。瓦当面の文様構成は内区では中央に大日如来を表す梵字を円環で囲んで置き、その両側に「東大寺大佛殿」の銘文を一字ずつ円環で囲み、左右３個ずつ均等に配す。中央と両側の円環の大きさは同じである。外区では二重の突線の間に連珠文を繞らせる。外縁は突出した素文縁である。瓦当面の文様には細かくみれば４通りの変異がある。それは連珠文の在り方による。四周するもの、左右いずれかの側辺の連珠文が欠けるもの、両側辺とも欠けるものの４種類である（註２）。図示した３点はいずれも瓦当部が接合面から剥落したものであり、瓦当部上端の様子は明確でない。顎の形状は段顎であるが、板状工具によって横方向の調整を行い丸く整えられている。丁寧な調整である。瓦当部側面は箆削りによって成形されている。３点とも胎土には砂粒を含む。焼成はいずれも良好であり、暗青灰色を呈している。２と３は個人蔵であるが、第15図の軒平瓦出土地点から出土したものである。

「東大寺」の刻印をもつ完形、ないしはほぼ完形に近い平瓦があるので第39図に２点図示しておく。１は岡山県立博物館蔵品、２は黒住秀雄氏所蔵品である。１はＩＣ型の叩目文様をもつが、この型式の叩目文様をもつ瓦は今回の調査では出土していない。刻印は凹面の中央に１個ではなく、２個１対で左右対称の位置に押されている。胎土には砂粒を含む。焼成は良だがやや甘く、淡灰色～淡黄灰白色を呈している。全長413mmである。２は７型の叩目文様をもつ。内面中央上端に刻印を１つ押す。全長425mmである。製作手法は前述した平瓦のそれと当然変わりはない。２については図の内面右側辺に面取りが認められる。

註１　『国宝東大寺鐘楼修理工事報告書』奈良県教育委員会　1967年
註２　註１に同じ

第４表　「東大寺大佛殿」銘軒丸瓦計測値一覧表　（単位はmm，蓮子は個数，（　）は推定値）

| 個体番号 | 型式 | 瓦当面 直径 | 内区 中房径 | 内区 梵字環径 | 内区 漢字環径 | 内区 弁型 | 内区 弁幅 | 内区 弁長 | 外区 内縁 幅 | 外区 内縁 蓮子 | 外区 外縁 幅 | 外区 外縁 高 | 全長 | 玉縁長 | 出土地点 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1A-1 | 1A | (210) | 95 | 36 | 25 | A | 50 | 17 | 11 | 29 | 18 | 15 | (470) | 78 | 瀬戸町弓削（吉井川底） | 岡山県立博物館所蔵 |
| 1B-1 | 1B | (216) | 106 | 40 | 28 | A | 49 | 19 | 12 | (32) | 18 | 12 | — | — | 瀬戸町万富 | 岡田伊三六氏所蔵 |
| 1B-2 | 1B | 208 | 99 | 39 | 27 | A | 47 | 19 | 12 | 32 | 18 | 13 | — | — | 瀬戸町万富 | 瀬戸町教育委員会保管 |
| 1C-1 | 1C | 210 | 100 | 40 | 27 | A | 50 | 17 | 12 | 30 | 17 | 11 | — | — | 瀬戸町弓削（吉井川底） | 国鉄万富駅所蔵 |
| 1C-2 | 1C | 212 | 101 | 38 | 26 | A | 50 | 17 | 12 | 30 | 17 | 12 | — | — | 瀬戸町弓削（吉井川底） | 瀬戸町教育委員会保管 |
| 1D-1 | 1D | 207 | 102 | 37 | 27 | A | 47 | 17 | 12 | 41 | 18 | 15 | — | — | 瀬戸町弓削（吉井川底） | 瀬戸町教育委員会保管 |
| 40図-1 | 1E | (202) | 100 | 29 | 29 | A | 50 | 17 | 12 | — | 16 | 13 | — | — | 岡山市一宮山神 | 黒住秀雄氏所蔵「吉備津宮常行堂」銘 |
| 2A-1 | 2A | (200) | (100) | 38 | 27 | B | 40 | 18 | 12 | — | 16 | — | (460) | 80 | 瀬戸町弓削（吉井川底） | 岡山県立博物館所蔵 |
| 2A-2 | 2A | (208) | 97 | 38 | 26 | B | | | 12 | — | 17 | 10 | (460) | (72) | 瀬戸町弓削（吉井川底） | 岡山県立博物館所蔵 |
| 2B-1 | 2B | 210 | 102 | 41 | 28 | B | 40 | 19 | 12 | — | 18 | — | — | — | 瀬戸町弓削（吉井川底） | 瀬戸町教育委員会保管 |

# 第5章　ま　と　め

## 第1節　泉瓦窯跡について

泉瓦窯跡は窖窯に分焔牀をもつというきわめて特異な構造をもっている。岡山県内はもとより、管見に触れた範囲ではこれに類似した窯跡は知らない。このような構造が生じたのは、従来の窖窯で瓦を焼くという必要からではないかと考えられる。瓦窯として一般的であったロストル式平窯の構造を窖窯に導入し、両者の折衷的な窯を考案したのではなかろうか。第4章の第1節で2号窯で検出した土柱を分焔柱と表現したが、岡山県で明瞭な分焔柱をもった窯跡は現在のところ確認されていない。備前市不老山東口窯跡の発掘調査で灰原中から分焔柱の破片を採集した(註1)としているが、それは外径20×17cmの中空の土柱であり、窯の規模からすればあまりに小さすぎるのではないかと考える。ちなみにこの窯跡の時期は備前焼の大窯期直前、間壁氏編年(註2)の第Ⅳ期Bの室町後半期とされている。したがって岡山県では室町期までの窯には分焔柱をみないのが一般的であり、それからすれば分焔柱の存在は大きな疑問である。分焔柱は本来窯の中央軸上に位置するのが機能上必然的であるのに、泉瓦窯跡では2本みられ、窯の中軸部は空間になっている。したがってこの2本の土柱はむしろ2条の分焔牀に対応するものとみ、ロストル式平窯の隔壁と同様の機能を期待したのではないかと考える。しかし壁ではなくてあくまで土柱であり、焔を3条の分焔道に導く役目からすればやはり分焔柱という表現もまんざらはずれてはいない。ただ機能的には本来の分焔柱とはまったく異なることは承知していなければいけない。窖窯で中央部が貫通しているため、焔は3条の分焔道を均等には走らず、中央のみにより集中した可能性が強い。発掘調査でかなりの量の生焼けの瓦を採集したが、その原因はこのような窯の構造上の欠陥に由来するものかもしれない。それではこのような構造をもっている泉瓦窯跡の年代はいつ頃であろうか。

泉瓦窯跡では1号窯内から瓦の出土をみている。まず軒瓦について検討してみたい。軒丸瓦は16弁の菊花文である。岡山県内では古代末から中世にかけての窯跡あるいは寺院跡等の発掘例に乏しく、この時代の瓦に関する資料は貧弱であり、軒丸瓦については類例をみない。遠方ではあるが大阪府堺市大仙遺跡から文様構成の同じものが出土している(註3)。しかし花弁は14弁である。寺院跡に伴うものとされ、その寺院の年代は平安末から室町初期とされている。第2類とされる。第4類から第7類は巴文であり、報告者の意図を考えれば第2類は鎌倉前半期の所産と考えられるだろうか。軒平瓦については幸いに県内で出土例がある。それも備前国分寺跡からである(註4)。泉瓦窯跡で焼かれたものが国分寺まで運ばれて使用されたとみてよいだろう。昭和49年度の発掘調査時には出土していないが、編年的には軒平瓦Ⅸ型式とⅩ型式(註5)の間に位置するのではなかろうか。また軒丸瓦もⅧ型式とⅨ型式の間に入ると考えられる。軒平瓦の顎は特徴がある。このような丸い顎はやはり泉瓦窯跡から出土した第29図の4にもみられ、なによりもこの形態の顎をもっているのは万富東大寺瓦窯跡出土の「東大寺大佛殿」銘軒平瓦である。また備前焼第Ⅰ期の備前市大明神窯跡から出土した軒平瓦(註6)

の顎もこの形態をもっている。大明神窯の軒平瓦には巴文軒丸瓦がセットになる。このようなことから考えれば、泉瓦窯跡出土の軒瓦の年代は平安末から鎌倉初期頃とするのが妥当なようである。平瓦は板状工具で両面を削って調整するのを大きな特色とし、内面の布目は消されていた。また凸面には多量の砂粒が付着していた。この板状工具による調整という手法は万富東大寺瓦窯跡から出土する平瓦にみられる手法とまったく同一である。この手法は近接した年代と考えられる大明神窯跡出土瓦にはみられないようである。なお第4章第3節で述べなかったが、泉瓦窯跡では線の太いかなり粗い格子叩目文をもった瓦も出土しているが、その凹面の布目はやはりほとんど消されている。大明神窯跡出土瓦の格子叩目も粗い。また、やはり近接した年代と考えられる岡山市一宮出土の「阿弥陀佛」銘平瓦(第41図)も粗い格子叩目をもつが、内面の布目は顕著である。平瓦は万富東大寺瓦窯跡との関連が強いようであり、やはり先の泉瓦窯跡についての年代観は適当と考える。

備前焼Ⅰ期には伊部の諸窯では日常の雑器と伴に盛んに瓦を焼いていた。そしてそれらの瓦は熊山の寺院へ貢納されたという(註7)。このような伊部における状況と泉瓦窯跡とがまったく無縁であったとは思われない。伊部の地も和気の地も共に和気郡内なのである。間壁忠彦・間壁葭子の両氏は伊部における窯業の開始を古代から中世へ移る律令体制の崩壊期という社会的背景の中で、身分的隷属を強いられていた工人が古代的な貢納関係を権門勢家への貢納で肩がわりし、自己の生産の自営化を図ろうとする動きとして捉えている。そのような社会的背景というものは充分考慮されなければならない。泉瓦窯跡のような折衷的な構造の誕生も、そのような変化の時代の中で生じたものであろうか。しかし、泉瓦窯跡で焼かれた瓦は備前国分寺で使用されていた。

泉瓦窯跡では備前国分寺に使用される瓦だけを焼いたのかどうか、これは多分に疑問のあるところである。第1章第1節で述べたが、和気町吉田飼葉瓦窯跡で焼かれた瓦が熊山町豊田の円光寺跡で発見されていて、泉瓦窯跡と備前国分寺との関係も考え合わせれば、和気町は古代における瓦生産地の1つであったことが考えられる。したがって泉瓦窯跡で焼かれた瓦は単に備前国分寺だけでなく他の寺院へも供給されたのではないだろうか。しかしとにかく備前国分寺の瓦を焼いていたのである。ここで想像を飛躍させると、万富東大寺瓦窯跡出土瓦と泉瓦窯跡出土瓦との製作手法上の類似が納得される。国分寺の瓦を焼くということは、国衙と和気町(藤野郷)との間に親密な関係があったことを示す。藤野郷は和気郡衙の所在地でもあった。泉瓦窯跡と万富東大寺瓦窯跡との年代がそう違わないものならば、泉瓦窯跡の操業前後に備前の国務を司どっていたのは他でもない重源であったであろう。当然、泉瓦窯跡と万富東大寺瓦窯跡との交流はあってしかるべきである。「東大寺瓦」出土の原因はあるいはここいらあたりにあるのかもしれない。国衙の力が和気郡中枢部に及んでいた可能性がある。

## 第2節　万富東大寺瓦窯跡について

万富東大寺瓦窯跡では東大寺大仏殿の瓦だけでなく、その他の伽藍の瓦も焼いていた。その枚数は莫大な量となる。備前国が東大寺造営料国となった建久4(1193)年から、「吉岡御瓦」の字句がみられる『南無阿弥陀仏作善集』の裏文書である備前麦進未進納所惣散用帳(註8)の建仁3(1203)年までの最低10年間は瓦を焼いていたと言われるのも当然である。瓦を焼くために必要とした工人もまた多数

に上ったであろうし、窯も13基程度では到底足らなかったであろう。このような大きな集団を動かすにはどうしても組織化ということが必要となってくる。それを考えさせてくれるのが、第4章第3節で少し詳しく述べた叩目文様である。1つの窯で焼かれた瓦の叩目文様はほぼ1種類に限られるようであると述べたが、そのような文様が複数の窯に共通している。すなわち2号窯と3号窯では6型の文様、10号窯・11号窯、12号窯では4型の文様の瓦を共通して焼いている。これらの窯が隣り合っていることがまず注意されるが、第4章第2節で述べた窯の形態の相違を考慮すると、同じ文様の瓦を焼いている窯は形態が同じであることがわかる。さらに第28図の窯の分布状態をみると、1号窯と2号窯・6号窯と7号窯・12号窯と13号窯の間がやや広くなっていて、5・6基でまとまっているのがわかる。さらに細かくいえば3号窯と4号窯・9号窯と10号窯の間にも少し空間があるようである。9号窯と10号窯との間で土の相違から線が引かれ、10号窯から12号窯までが1つの掘方の中に築かれている可能性があるとしたが、そうすれば3基ずつがまとまりをもっていることとなる。万富東大寺瓦窯跡では5基ないしは6基の窯を1単位とし、その操業に従事する工人達を1つの組として組織化して工人集団全体を掌握したものと考えたい。1つの組は5・6基の窯を連続させて同時に築き、1種類の文様しかない叩板を使用して瓦を製作したのであろう。瓦の叩目文様は彼等の窯印ではなかったろうか。出土瓦からすれば、4型・5型・6型と少なくても3組があったことは想像に難くない。

工房址ではないかと考えられる竪穴遺構が検出されて注目されるが、その位置をみると2号窯から6号窯までの前面にあり、あたかも1つの組にちょうど対応するかのようである。窯跡の前面に工房址ないしは作業場を伴う例は奈良県音如ケ谷瓦窯跡で知られている(註9)。ところが出土瓦の叩目文様から考えた場合、2号窯～6号窯の操業時期に竪穴遺構が機能していたかどうかは疑問である。第4表をみると竪穴遺構から出土した瓦の叩目文様は1型と3型と7型であり、2号窯・3号窯で焼かれた6型の瓦は出土していない。1型・3型・7型は分焙淋に使用されたりして、叩目文様の中では最初期に使用されたものと考えられる。そうすれば、2号窯～6号窯の操業時には竪穴遺構はすでに埋没していた可能性がある。2号窯～6号窯の構築にあたって竪穴を埋め、整地したことも考えられる。しかし、1型・3型は3号窯の分焙淋に使用されているため、竪穴から出土しても矛盾はないわけであり、竪穴内はほとんど掘り下げていないため、6型の出土する可能性は残されている。今後を期待したい。このことで灰原出土の叩目文様が注意される。7号窯～12号窯に使用されたとみられる4型の瓦が2片出土している。竪穴遺構と灰原層との切合い関係の把握は、土色・土質の類似からきわめて困難であったが、いちおう竪穴遺構が灰原層を切っていると理解している。そうだとすれば竪穴遺構が2号窯～6号窯に伴う可能性が高くなり、もし伴うとすれば2号窯～6号窯が7号窯～12号窯より後に構築されたこととなる。いずれにしても東大寺瓦の製作はかなり大規模に、そして組織的になされたものと考えられる。そこには国司として赴任した勧進職俊乗坊重源の熱意が感じられ、国を挙げての取組がなされたことを髣髴とさせる。

万富東大寺瓦窯跡は文献から絶対年代をおさえることができるため、遺物の編年研究の上で重要な位置を占めている。残念ながら今回の報告では種々の理由から遺物について詳細な検討を加えることができなかった。今後の整理研究を期したい。

今回の発掘調査の目的は窯の位置・数・規模・形態等の資料を収集することにあったが、その点からすれば13基もの窯の検出は当初の予想を大幅に上回るものであり、また11号窯以北での残存状況の良好さを確認することができたのは大きな成果であった。今後一層その保護に力が注がれねばならない。その点でとくに留意すべきことは指定域の西方に所在する丘陵の窯跡である。指定域出土瓦とは異なる叩目文様をもつ瓦が出土していて、先の考察からすればさらに4ないし5基の所在が予想される。今後指定域周辺における基礎調査を実施し、それらの窯の保存が図られ、最終的には指定域の拡大がなされねばならない。

註1　河本清・葛原克人「不老山古備前窯址」『埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会　1972年
註2　間壁忠彦・間壁葭子「備前焼研究ノート（3）」『倉敷考古館研究集報』5　倉敷考古館　1968年
註3　堀江門也『大仙遺跡発掘調査概要Ⅱ』大阪府文化財調査概要 1974―8　大阪府教育委員会　1975年
註4　玉井伊三郎・藤沢一夫『吉備古瓦図譜』第2輯　1941年
註5　春成秀爾・岩本圭輔・小野昭・葛原克人・伊藤晃『備前国分寺跡緊急発掘調査概報』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告10　岡山県教育委員会　1975年
註6　間壁忠彦・間壁葭子「備前焼研究ノート（1）」『倉敷考古館研究集報』1　倉敷考古館　1966年
註7　註2に同じ
註8　『鎌倉遺文』3―1370
註9　清水真一・金子裕之・岡本東三・田中哲雄・巽淳一郎・吉田恵二・今泉隆雄・立木修・佐藤興治『奈良山Ⅲ』奈良県教育委員会　1979年

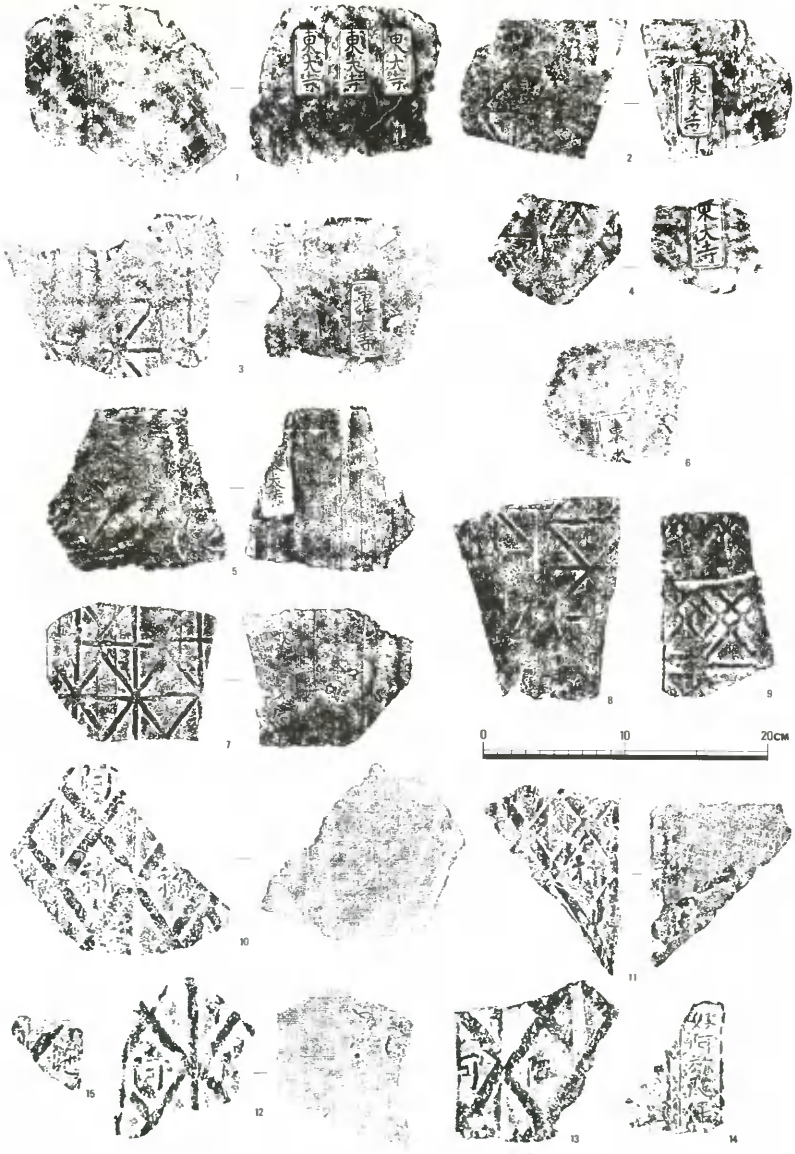
**付1．岡山市一宮字山神（吉備津宮常行堂）出土瓦（第40・41・42図）**

岡山市一宮字山神で、「吉備津宮常行堂」という銘文をもち、文様構成が万富東大寺瓦窯跡出土の軒瓦とまったく同一である軒瓦の出土することが過去から知られていて、また「東大寺」の刻印をもつ平瓦片も多数採集され、研究者の注意を引いていた。重源の生涯の事績を記した『南無阿弥陀佛作善集』の備前国の項の最初に「造立常行堂、奉安丈六弥陀仏像」という記事があり、この常行堂の跡地がこの一宮字山神であるとされる。この地は吉備津彦神社に近接している。当地在住の黒住秀雄氏によって精力的な資料収集がなされている。それらの資料はたびたび公表されているが、今回の報告書作成を機会に再度一括して図示しておきたい。第40図1・2の軒瓦の文様構成は「東大寺大佛殿」銘軒瓦とまったく同一である。採集された「東大寺瓦」の叩目文様は1型・3型・4型・6型の4型式である。調整手法は万富出土のものと同じである。1の刻印は第35図1―2のそれと同じであり、これらの「東大寺瓦」は万富東大寺瓦窯跡で焼成されたものと考えられそうである。「東大寺瓦」と共に「阿弥陀佛」あるいは「好阿弥陀佛」の銘の平瓦が採集されているが、それらの製作手法は「東大寺瓦」とは異なり、凹面の布目は顕著である。

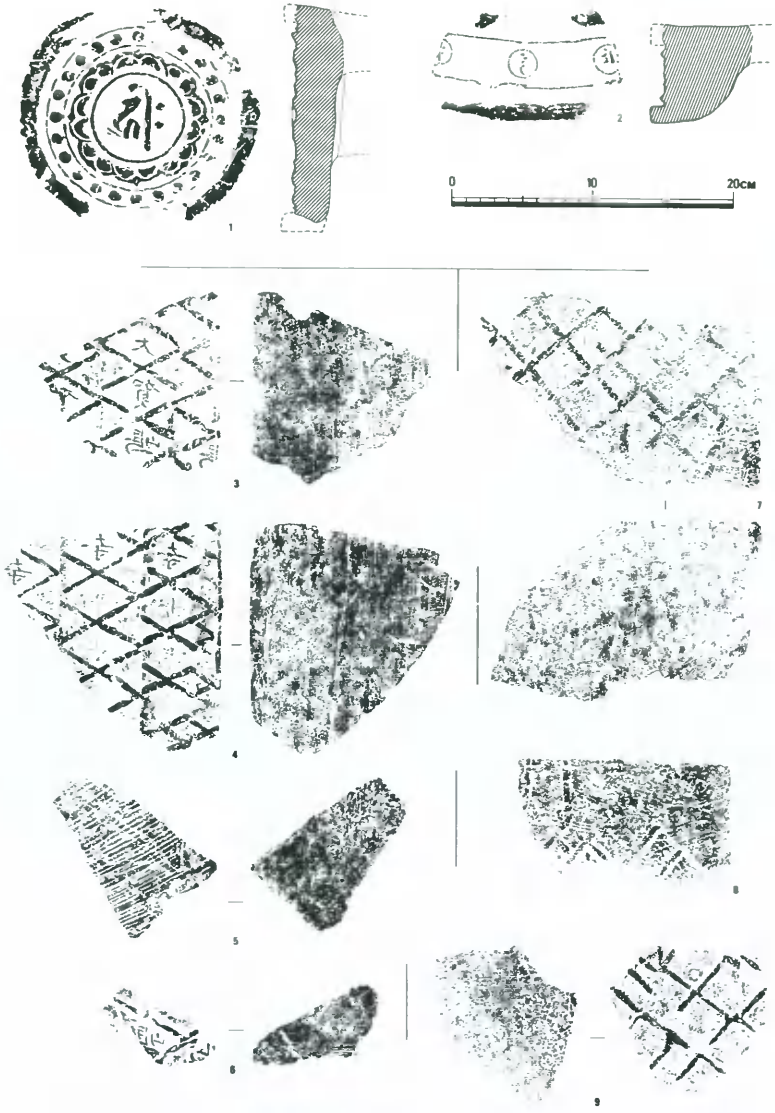
**付2．邑久町大賀嶋寺・半田廃寺出土瓦（第42図）**

大賀嶋寺は邑久町の千町平野南方の丘陵上に位置する古い寺院である。重源は備前国内の諸寺を修造し、その数22に及んだという。図示した瓦の「大賀嶋寺」という裏字と書体を取上げて重源との関係を考える説もある。半田廃寺は邑久町尾張に所在する奈良時代後期創建の寺院跡である。この2寺の瓦を鎌倉時代の資料として示しておく。製作手法は「東大寺瓦」とは異なり、焼成・色調共に違う。

第40図 岡山市一宮字山神(吉備津宮常行堂)出土軒瓦 (S=1/4)




第41図 岡山市一宮字山神(吉備津宮常行堂)出土平瓦 (S=1/4)




第42図 岡山市一宮字山神(上)・邑久町大賀鳥寺(下左)・邑久町半田廃寺(下右)出土瓦 (S=1/4)

# 泉 瓦 窯 跡

1．調査前近景（東から）

2．調査前全景（南西から）

図版 2

# 泉 瓦 窯 跡

1．第1トレンチ全景（南から）

2．第1トレンチ西壁（部分）（東から）

# 泉 瓦 窯 跡

1．1号窯検出状況（東から）

2．1号窯分焔牀（東から）

図版 4

# 泉 瓦 窯 跡

1．2号窯検出状況（東から）

2．2号窯分焔柱（東から）

# 泉 瓦 窯 跡

1．第5トレンチ全景（西から）

2．第1トレンチ石敷遺構（東から）

図版 6

# 万富東大寺瓦窯跡

1．万富東大寺瓦窯跡遠景（東から）

2．調査前近景（南から）

# 万富東大寺瓦窯跡

1．第2トレンチ全景（北から）

2．第3トレンチ全景（南から）

図版 8

## 万富東大寺瓦窯跡

1．2号窯検出状況（西から）

2．同　　上　（東から）

# 万富東大寺瓦窯跡

1．3号窯検出状況（東から）

2．同　　上　（北から）

図版10

# 万富東大寺瓦窯跡

1．3号窯検出状況（南西から）

2．3号窯細部（北西から）

# 万富東大寺瓦窯跡

1．3号窯南分焔牀（西から）

2．2号窯南分焔牀（西から）

図版12

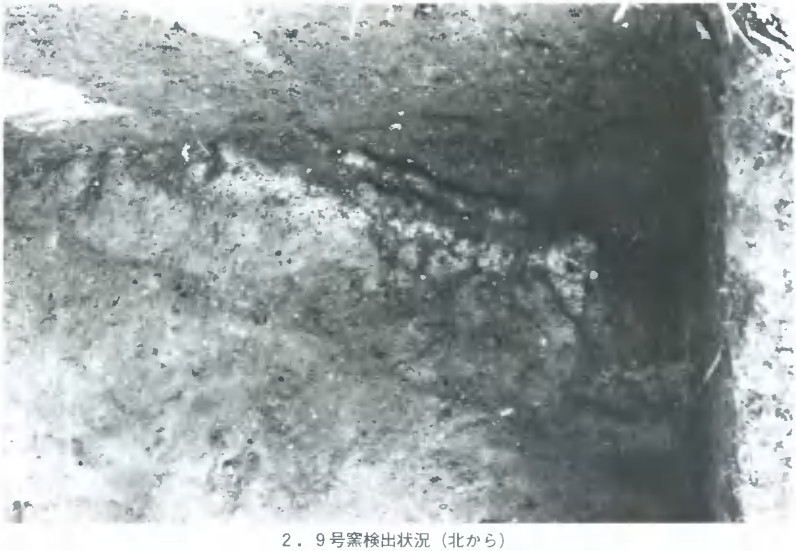
# 万富東大寺瓦窯跡

1．10号窯検出状況（西から）

2．10号窯瓦残存状況（西から）

# 万富東大寺瓦窯跡

1．10号窯隔壁検出状況（西から）



2．9号窯検出状況（北から）

図版14

# 万富東大寺瓦窯跡

1．11号窯検出状況（西から）

2．11号窯焼成室南東隅（西から）

3．11号窯南壁（西から）

# 万富東大寺瓦窯跡

1．11号窯奥壁（西から）

2．11号窯南半窯体内部（西から）

図版16

# 万富東大寺瓦窯跡

1．11号窯分焔牀細部（南から）

2．11号窯南壁細部（北から）

# 万富東大寺瓦窯跡

1．12号窯検出状況（西から）

2．同　　上　（西から）

図版18

# 万富東大寺瓦窯跡

1．13号窯検出状況（西から）

2．13号窯瓦出土状況（西から）

# 万富東大寺瓦窯跡

1．13号窯分焔牀検出状況（西から）

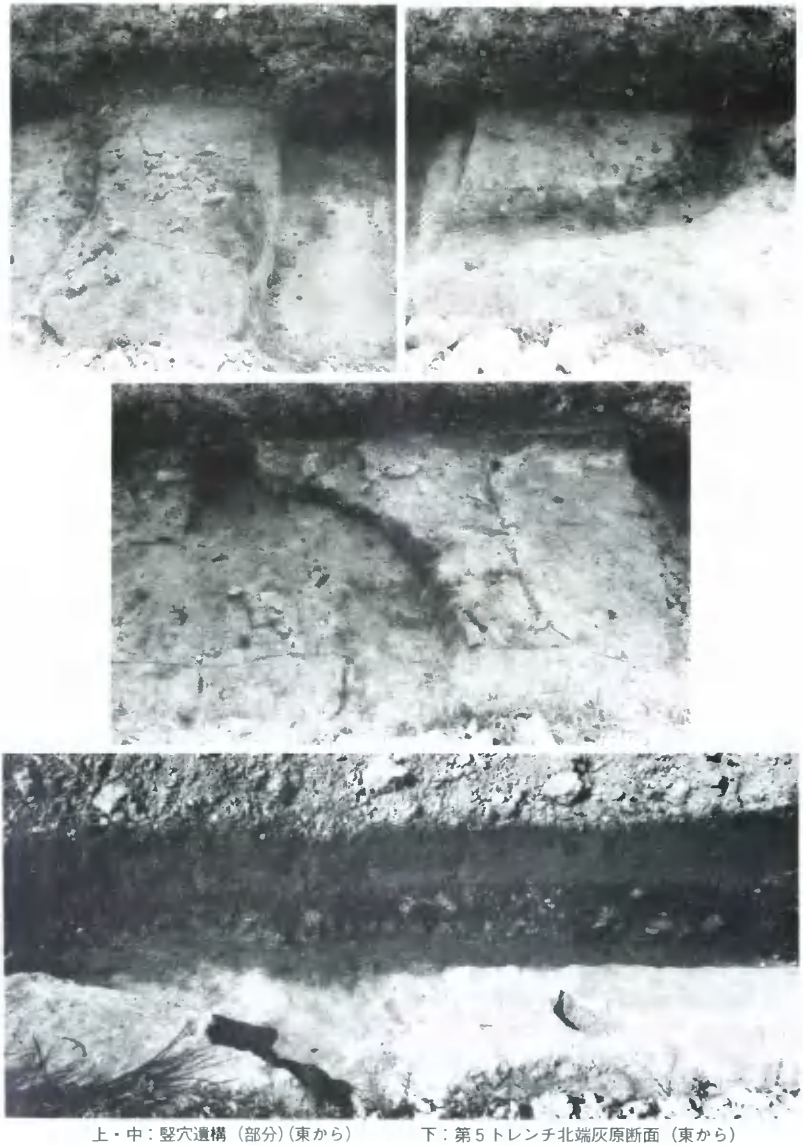
2．13号窯分焔牀（西から）

# 万富東大寺瓦窯跡

1．第5トレンチ竪穴遺構（南から）

2．第1トレンチ全景（南から）

# 万富東大寺瓦窯跡

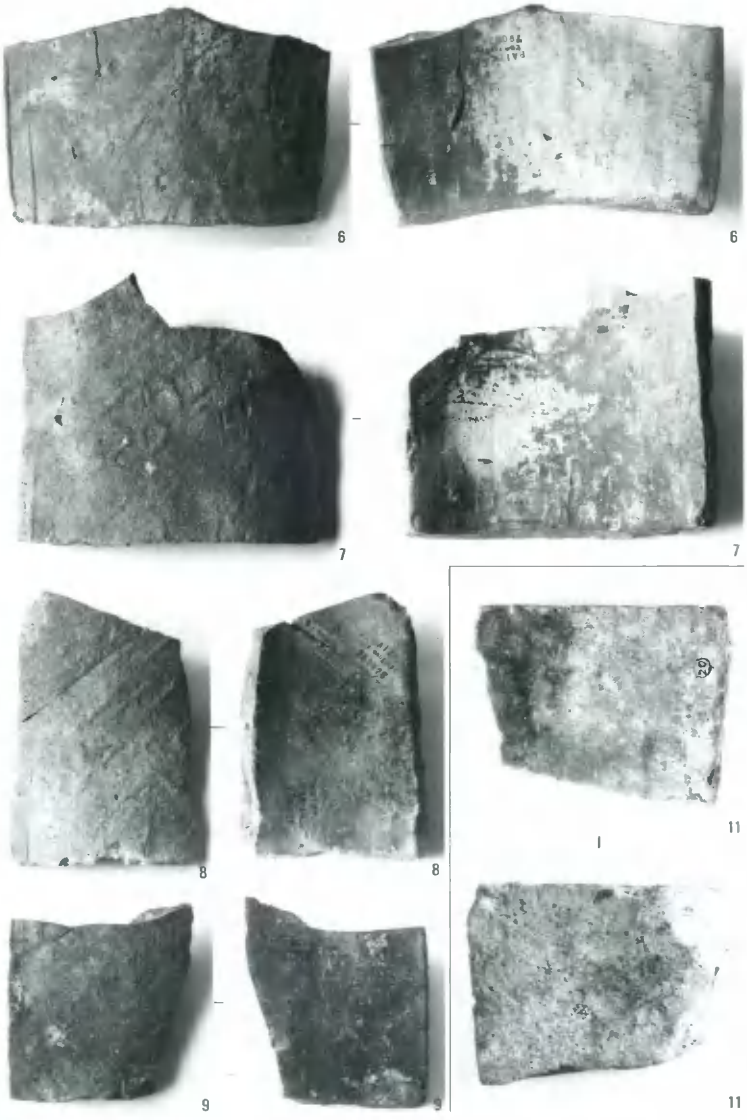


上・中：竪穴遺構（部分）（東から）　　下：第５トレンチ北端灰原断面（東から）

# 泉 瓦 窯 跡

泉瓦窯跡出土軒瓦

# 泉 瓦 窯 跡




泉瓦窯跡出土平瓦

# 万富東大寺瓦窯跡

1B-1

1D-1

「東大寺大佛殿」銘軒丸瓦

# 万富東大寺瓦窯跡

1C-2

2A-1

1A-1

2A-2

1

2

2A-2

3

「東大寺大佛殿」銘軒丸瓦

# 万富東大寺瓦窯跡

2

3

2A-1

1

2

2

1A-1

1

1

2A-1

万富東大寺瓦窯跡出土瓦及び「東大寺」銘瓦

岡山市一宮字山神出土瓦（吉備津宮常行堂）

図版28

岡山市一宮字山神出土瓦（吉備津宮常行堂）

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　37

泉瓦窯跡・万富東大寺瓦窯跡

1980年　3　月　20　日　印刷
1980年　3　月　30　日　発行

編集
発行　岡山県教育委員会
岡山市内山下２－４－６